

Gender and Sexuality

Journal of the Center for Gender Studies, ICU

No.07
2012

CGS
Center for Gender Studies
International Christian University
Tokyo.....Asia

目次

目次 ----- 1

研究論文

田山花袋『蒲団』にみる日本の近代化とジェンダー
生駒夏美 ----- 5

研究ノート

寡婦性はいかに変容可能か
——インド・タミル・ナードゥ州に住む寡婦に着目して——
久保田絢 ----- 37

書評

トリシャ・ローズ、『ブラック・ノイズ』
堀真悟 ----- 52

ジェンダー研究センター(CGS)2011年度イベント報告

ワンデー・レクチャーシリーズ報告
「HIV/エイズに見る日本・アジア 越境するセクシュアリティ」 ----- 70
トークセッション報告
「みんなで語ろう！大学での子育て」 ----- 104

ジェンダー研究センター(CGS)活動報告・予定

多摩ジェンダー教育ネットワーク 第8回～第10回会合 ----- 126
2011年度CGS活動報告 ----- 130
2012年度CGS活動予定 ----- 142

付記

| | | |
|----------|-------|-----|
| 執筆者紹介 | ----- | 148 |
| CGS所員リスト | ----- | 149 |
| 第8号投稿規程 | ----- | 152 |
| 編集後記 | ----- | 163 |

Contents

Contents ----- 1

Research papers

Gender and modernization in Japan: An analysis of Tayama Katai's *The Quilt*
Natsumi IKOMA ----- 5

Research notes

The changeability of widowhood: A study of widows in Tamil Nadu, India
Aya KUBOTA ----- 37

Book review

Rose, Tricia. *Black noise: Rap music and black culture in contemporary America*.
Shingo HORI ----- 52

CGS Events reports

Report: One-day lecture series
Re-visiting "Japan" and HIV/AIDS: Japan in Asia, Asia in Japan ----- 70
Report: Talk session
Let's Talk about parenting on campus ----- 104

CGS Activity reports and schedule

Report: One-day lecture series
The eighth-tenth meetings of the Tama Gender Education Net ----- 126
AY 2011 CGS Activity report ----- 130
AY 2012 CGS Activity schedule ----- 142

Notes

| | |
|--|-----|
| Author profiles ----- | 148 |
| Regular members of the Center for Gender Studies ----- | 149 |
| Journal regulations for Vol. 08 ----- | 152 |
| Postscript from the editor ----- | 163 |

田山花袋『蒲団』にみる日本の近代化とジェンダー¹ 生駒夏美

1 言文一致と私小説

日本近代文学を語るとき、研究者がまずしなければならないことは、その特殊性について注意深く考察することである。まず挙げられるのは、日本における近代文学がそれまでの文学形態とは大きく異なるものであり、それを生み出した社会はそれまでの日本社会とは大きく異なるものであったという点、つまり過去との分断がそこにあったということである。外国の圧力によって引き起こされた明治維新は、江戸時代までの固定化した身分社会を終わらせ、日本が近代国家へ変貌することを迫るものだった。それはまさしく、外から引き起こされた革命であり、国家的危機であったとも言える。これに呼応して起きたのが、文学上の革命と言われる言文一致運動であり、一連の新しい文学、日本近代文学である。そこには当時の政治的・社会的・思想的危機に当時の知識層がどのように対処したかが記録されているのである。

言文一致運動と言えば、通常その民主性が指摘される。事実、それは身分社会の言語体系であった候文などの、知識階級によって行使された文語体を否定し、新しい平等な社会にふさわしい、ダ・デア調・デス・マス調などの口語体を推奨するものであった。この運動が文学として結実した明治20年代は、国民皆教育によってこれまで独占されていた文学的知識が広く一般に流布し、一部の知識階級や上流層でなくとも文学活動に参入できるようになった時代である。裏を返せば、そのような知識の平民浸透の事実を反映するものとして、言文一致で書かれた文学を捉えることもできる。

批評家の柄谷行人が指摘するように、幕末に幕府の翻訳係を務めていた前島密が、文学とは無関係に言文一致を近代国家に不可欠なものとして建白した時、この運動の主眼は身分の上下を示す語の排除にあり、また漢字を排除した音声言語の使用推進にあった（柄谷, 2004/2008, pp. 47-50）。つまり書

き言葉のあり方が、表音文字で構成される英語を初めとする西洋の言葉の「経済性、直接性、民主性」(ibid., p. 50) をモデルにしていることは言うまでもない。しかし言文一致が文学として表出した明治20年頃には、その運動は単に言語表記の問題ではなくなっていた。近代文学の書き手であった作家たちの多くがヨーロッパの文学を勉強し、翻訳した経験を持つことからわかるように、単に言葉のあり方のみならず、日本近代文学は多かれ少なかれその頃大量に流入していた西洋の近代文学、特に第三人称のリアリズムを手本にし、物の捉え方や見方も西洋のそれを模倣しようとしていたのである。²

しかし果たして維新の時代に、人々がそんなに容易く西洋風の表現法を獲得できたのかというと、そんなはずはないのであって、明治初期・中期の近代文学を読むと、当時の作家たちがいかに苦勞して言文一致を試し、挫折し、あるいはリアリズムを取り入れようと苦勞しているかが感じられる。例えばツルゲーネフの翻訳において言文一致運動に大きな影響を与えたとされる二葉亭四迷は、『浮雲』で言文一致文の体裁を使用したものの、とてもリアリズムとは呼べない文章を書いたし、森鷗外は『山椒大夫』など一連の歴史物で日本の伝承文学に材をとった書き直しを行なったり、雅文で『舞姫』というドイツを舞台にした作品を書いている。夏目漱石は創作の合間に漢詩を作ることでバランスをとり、また英国留学をしたものの、西洋文学に関してはアンビバレントな気持ちを持ち続けた。尾崎紅葉、山田美妙らは擬古典主義を標榜し、樋口一葉は『たけくらべ』や『わかれ道』などで、近代人になりきれない人間模様を旧式の美文調で描いている。程度の差こそあれ、表記や題材の扱い方において、近代的な文学を書くのに苦勞している様子が見てとれる。

明治の作家たちが苦勞したのも当然かもしれない。江戸時代以前の文学と言えば戯作であり、俳諧をふんだんに盛り込んだものや、人情本や滑稽本といった「型」があり、それに則って書かれていた。そこにおいては近代的リアリズム(写実)は存在せず、語り手の主観によって大きく歪められた像が

提示され、受容されており、それ以外の客観的像があるなどとは考えられていなかった。浄瑠璃や歌舞伎などの演劇においても、「型」が重んじられており、写実がもたらされたのは明治10年代、新富座の市川團十郎と座付作者河竹黙阿弥によってであったという（柄谷, 2004/2008, pp. 51-2）。³ つまり明治以前の文学作品は、伝統的な文学形式に則り主観を通して見た世界を描く外向きのベクトルを持つものだったのであり、現代において文学がみなされているような、作家自身の個性を表現する内向きのベクトルを持つものではなかったと言える。⁴ 明治期以前の身分制社会においては、外界と対立する存在としての個というものが思考されていなかったこともあるだろう。しかし、もっと大きな要素は、作者と読者、演者と観客の距離の近さにあったのではないだろうか。例えば浄瑠璃や歌舞伎などの舞台は、必ずそこに演者と観客とのインタラクションが存在し、一回一回の舞台が前回と全く同じということはありません。同じ演目であっても、演技者による表現の違いが大きな変化をもたらすものである。また印刷された作品（例えば十返舎一九の『東海道中膝栗毛』（1802-14）の場合でも、版木に字を掘り出し、挿絵がつけられるというスタイルであり、その版木は著者の自筆であった場合も多い。観客と演者の距離が近かったように、文学作品においても読者と作者の距離は近く、読者は作品を読みながら、著者の息遣いや筆遣いを感じ、挿絵や演技者の声色、身体の動きなどから言外の何か、個性と呼んでもよいような味を感じることができたのである。

ところが製版技術の発展により、明治時代の作家たちは新たに大量の平民読者を得ると共に、読者との遠い距離という新たな問題を抱えることとなったのである。字ばかりで、一見すれば没個性に製本された作品が、不特定多数の読者に読まれるためには、これまでのような「型」に則った作品づくりでは立ち行かない。また、技術面での問題以上に大きな困難であったことが予想されるのは、文明開化によってもたらされた西洋思想の導入によって、形式的には万人が平等な社会が生まれ、そこで近代的な「個」を持つことが要求されたことではなかったか。明治の作家たちは、作品の内容で「個」、

つまりは他との差異を創出する他はなかったのである。

言文一致という表記法も、西洋の言語にならって主語を要求するものであった。これは先に述べたことと矛盾するようであるが、そうではない。江戸時代の文学が主語の「私」を省略しても成立したのは、文学とは主観で誇張されたものであったからであり、それ以外の客観的表現などは想像されなかったからであった。しかし近代的リアリズムが要求したのは、「彼」や「彼女」の視点であり、また作者である「私」にも向けられる客観的視点であった。この努力の結果、日本においては、三人称の客観的語りを用いながら作家と同一視される人物の心の内面を描く「私小説」が明治末期から大正にかけて確立していった。⁵ 江戸時代以前の主観的文学と明治以降の私小説は、一見同じように思われるかもしれないが、江戸以前の文学における「私」とは異なり、私小説の「私」は客観的視点との対立関係において成立するものであり、その「私」にも外からの批判的視点が注がれているのである。従って私小説の「私」が語る出来事が、「私」の歪んだ視点から見た世界であることが読者にもわかるし、読者は読者の基準でその「私」を判断し評価することができるのである。つまり「歪んだ私」も作品の一部として提示されたのである。作家たちはこのように苦心して「近代」の文学を書こうとした。つまり日本近代文学という呼称における「近代」は、単なる歴史的時代区分ではなく、この当時の文学の志向をも示すものなのである。

2 私小説とナショナリズム

私小説が確立した時期は、国民皆学の方針が推進されて平民があまねく文学を消費し生産しうる知的水準に達し、また言文一致の文学における最初の試みから20年が過ぎ、この表記法が定着した時期と考えることができる。⁶ 明治の近代的国家政策を西洋を手本にした民主化と捉えるならば、その政策が功を奏し始めたと見えるこの時期に、私小説という一見内向きの小説作法が登場したのは、奇妙に思えるかもしれない。実際、小林秀雄や福永武彦、中村光夫、福田恆存らは私小説が客観的ではなく、小説世界と作家自身がき

ちんと分たれていないとして、批判している。⁷ だが明治以降の日本の歴史を考えれば、それが直線的な民主化の歴史ではなかったことは明らかであり、私小説の登場も当時の日本の近代化への反応の一つと考えれば不思議な現象とは言えない。たとえば明治初期の自由民権運動は、初期の不平士族による士族民権から豪農民権へと運動の性質を変化させ、民権思想の裾野への広がりを見せているかのようである。しかし近年、そもそも民権派の多くにとって国権は前提とされていたのであり、愛国主義や帝国主義の様相をも含んだものであったとして、むしろナショナリズムとして捉えるべきであるとする歴史学者もいる。⁸ 事実、自由民権運動の成果たる大日本国憲法は明治24年に制定されたが、天皇制を問い直すことはなかったし、またこれ以降、日本が軍事国家化していくことは周知の通りである。

つまりは明治維新が日本を西洋的な近代国家に変身させようとする思いから出発したことは否めないとしても、その思いが等しく皆に共有されていたのではなかったのだろうし、また、西洋の圧力や思想が広く流布したからこそ、それに対する反発や反動が現れ、江戸時代以前の日本のあり方への希求も生まれたのであろう。近代文学というメディアも、そういった日本社会の動きを反映したものであったに相違ない。日本近代文学は、言文一致の小説を通して、新しい民主的明治という時代の日本社会のあり方、近代的思想を流布した一方で、日本とは何か、近代日本とは何か、またその日本に生きる「私」とは何者かという問いを、発したのである。そして新たに知識層の仲間入りをした一般大衆は、文学作品を読むことによって、この時代の考え方、物の見方、価値観を習得していったのである。文学の民主化として始まった言文一致運動が「私小説」という形態に辿り着き、それがその後の日本文学の主流となっていったことを考慮すると、当初外向きだった文学のベクトルも、自由民権運動と軌を一つにして内向きになり、「あるべき日本像」といともすればナショナリズム的なものを一般大衆に「教育する」メディアとして機能したのではあるまいか。

こうした文学の役割について柄谷（2005）は、ベネディクト・アンダー

ソンの言葉を借りて次のように説明している。

小説は、『共感』の共同体、つまり想像の共同体としてのネーションの基盤になります。小説が、知識人と大衆、あるいは、さまざまな社会的階層を「共感」によって同一的たらしめ、ネーションを形成するのです。(p. 45)

ここで柄谷が「ネーション」と呼ぶものは、統一感を持って他国と対峙しうる存在としての「国家」である。つまり、国家がそもそも同一的であることを求められるのは、その国家が他国と並び立ち、かつ他国とは異なる目的に進もうとしている場合なのである。その意味において、日本近代文学はまさにネーションの基盤を作ったというのは柄谷の指摘する通りである。なぜなら、維新以降に西洋の思想が大量に流入したことによって、日本は初めて西欧諸国の存在感に圧倒され、「日本国」として立つ必要に迫られたと考えられるからである。明治維新によって、日本は初めて近代的なネーション＝ステートとして、他国の存在を認識し、その脅威と向き合うこととなった。その後の日本が日清戦争、日露戦争と立て続けに戦争を起こし、駆け足で列強の仲間入りをしたことから、当時の日本国の状況はわかるというものである。

日本近代文学はこのような日本国の状況を、見事に反映するものなのである。つまり、当時の日本には二つの一種矛盾する欲望があった。一つは西洋文化圏の語りに学び、言文一致やリアリズムを取り入れながら、西欧列強に追いつくこと。もう一つは、西欧諸国への反発に裏打ちされた、日本独自の存在感、個性への希求である。二つ目の欲望が、ともすれば近代以前の価値観への逆戻りや国粹主義、そして軍国主義に容易に傾くであろうことは想像に難くない。実際、近代文学の中には、この二つの傾向がはっきり見て取れるものも多いのである。

明治の読者はこのような欲望で満たされた近代文学を読み、それが表出す

る個たる「私」に同一化することによって、ある部分ナショナリスティックな近代日本国民となっていた。柄谷はこの機能において、日本近代文学を高く評価している。『近代文学の終り』（2005）の中で、彼は「近代小説が近代のネーション形成の基盤であったことは否定できない事実」であると書き、続けて、現代においては「文学がナショナリズムの基盤となることはもう難しい」、「政治的な目的があるなら、小説を書くより、映画を作ったほうが早い」、「そのほうが大衆にとって近づきやすいから」（pp. 56-57）と述べている。彼はまたインドの作家アルンダティ・ロイが小説を書かなくなったことを引き合いに出し、「ロイの言動は、文学が果たしていた社会的役割が終ったということを示唆するものではないだろうか。文学によって社会を動かすことができるように見えた時代が終ったとすれば、もはや本当の意味で小説を書くことも小説家であることもできない」（pp. 58-59）と続けている。つまり柄谷にとって、日本の近代文学とは、近代日本というネーションを作り上げたという、まさにその社会的功績において意義があるのであり、同じことができない文学はもはや「文学」の名に値しないということらしい。

だが、そのように作り上げられた日本というネーション＝ステートは次々と戦争を引き起こし、世界大戦に突入していったのではなかったか。日本というネーション＝ステートを思考するのであれば、それが引き起こした悲劇や罪についても考察しなければならないのではないのか。そして日本近代文学がそのネーション＝ステートを作り上げるのに果たした役割もまた、批判されなければならないのではないのか。

一つの手がかりは、当時の近代文学を通して想像・創造された「日本国民」がどういう概念であったかを考えることにあるだろう。柄谷の言う、同一的たらしめられた「さまざまな社会的階層」とはいったい誰のことであるのか。その「さまざまな社会的階層」にたとえばジェンダー差異は含まれたのであろうか。江戸時代に穢多と呼ばれた非人階級の人々、また明治維新後、強制的に崩壊させられた琉球王国の人々は含まれたのであろうか。また

本当に「さまざまな社会的階層」の人々は同一になったのか。表面的同一性を作り出すために、何者かが排除・抑圧されたのではなかったか。

本論では特に明治の近代化におけるジェンダーに着目し、田山花袋の『蒲団』（1907）という作品を見てみよう。この作品において、柄谷が言うように「さまざまな社会的階層」が「私」への共感の元で「同一的」になるよう招かれているように見える。しかし、実際にこの小説で起こっていることは、同一化の（意図的な）失敗であり、それに伴う抑圧と排除なのである。

3 田山花袋『蒲団』のなかの女学生

明治40年（1907年）に発表された田山花袋の『蒲団』⁹は、物語の最後で女弟子の使っていた蒲団に顔を埋めて匂いを嗅ぎ、涙する作家の姿を描き、性を露悪的に描きだして当時の文壇に大きな反響を呼んだ作品で、日本における自然主義文学、また私小説の出発点に位置づけられている。作品内での竹山時雄と横山芳子の関係は、田山花袋と弟子の岡田美知代の関係をもとにしていると言われ、作者と登場人物がほぼ同一視されている。

物語は、妻子ある作家、竹山時雄のもとに、大ファンの娘、横山芳子が弟子入りすることから動き始める。時代は明治末期、作家として身を立てることが多くの人に可能性として現れたころである。しかし時雄は、作家として大成功しているわけではなく、小説以外の仕事を渋々引き受けてなんとか妻子との生活を支えている。その自分を先生と慕い、神戸から出てきて弟子にしてくれというこの若い娘を時雄は可愛がるが、彼の内面には彼女への恋情が潜んでいる。つまり、本気で弟子として彼女を育てる気があるかどうかは疑わしく、ハイカラ女学生である芳子を、性的対象として欲しているのである。

まず芳子の造形に注目しよう。

父も母も厳格なるクリスチャン基督教信者、母は殊にすぐれた信者で、曾ては同志社女学校に学んだこともあるといふ。総領の兄は英国へ洋行して、帰

朝後は某官立学校の教授となつて居る。芳子は町の小学校を卒業するとすぐ、神戸に出て神戸の女学院に入り、其処でハイカラな女学校生活を送つた。[中略] 美しいこと、理想を養ふこと、虚栄心の高いこと——かういふ傾向をいつとなしに受けて、芳子は明治の女学生の長所と短所とを遺憾なく備へて居た。(pp. 528-529)

女学校は江戸末期の藩における女学設置の他、ミッション系の私学女学校や東京女子師範などが明治初期に設立されている。芳子もそのような女学校で学んだ子女であることがわかる。明治維新後、様々な西洋思想が一気に流入するわけだが、なかでもキリスト教の衝撃は大きく、多くの作家たちや元武士であった者達が、少なくとも一時期キリスト教に傾倒している。当時、キリスト教はハイカラの象徴であったのだ。

しかし本田和子(1990)によれば、「女学生」という存在がハイカラの象徴として欲望のままざしに晒されるのは明治30年代になってからだという(pp. 8-24)。しかも彼女たちのハイカラ化は、自発的な動きとは言いがたく、男性主導で近代的なあり方を喧伝した『女学雑誌』に洋式束髪が掲載され大流行するまでは、断髪への抵抗も大きかったという(pp. 32-53)。女学生の制服が男袴から洋装、再び和装(女袴)へと紆余曲折したのも、上からの変更であった。特に洋装廃止の動きは、一部の女子エリートが女子高等教育の対象だった明治初期とは異なり、女子教育が公的教育の一環として組み入れられ、その結果「良妻賢母主義」がその方針として採用されたのと同調していると本田は指摘する。

日清戦争後の社会が、中産階級の育成という国家的課題を抱え込まれたとき、改めて女性の役割が注目された。すなわち、中流家庭の形成者という……。 「良妻賢母」を標榜する女子教育が、そこにドッキングされたことは言を俟たない。(p. 83)

明治も後期に入ると、女子教育は少数エリート教育から脱し、一般女子を公的に教育するミッションへと移行する。その際に志向されたのは、学歴が高く「男並み」の知識を持つ女性ではなく、また和風西洋婦人でもなく、近代化された日本国民の未来の妻・未来の母に相応しい存在として、中庸の近代性と知性と発展性を持ち、かつ大和撫子の淑やかさをも残した女性であった。¹⁰「ハイカラ女学生」像は、当時の為政者たち・権力者たちによって作り出された、そのような都合の良いブレンド品である。束ね髪に海老茶袴、洋靴のそのスタイルは、洋と和、上流性という非日常性と日常性を巧みに組み合わせ、国家的戦略として作り上げられた近代日本社会の女性の徴であった。そして戦略通り、人々は彼女たちに憧れ、その姿は盛んに小説や絵画に描かれた。

時雄も、そのようなハイカラ女学生に憧れる男性として描かれる。妻はいるが、「旧式の丸髷、泥鴨のやうな歩き振、温順と貞節とより他に何物をも有せぬ細君に甘んじて居ることは時雄には何よりも情けなかつた」（田山, p. 529）とある。そこへ登場した芳子である。「ハイカラな新式な美しい女門下生が、先生！先生！と世にもえらい人のやうに渴仰して来るのに胸を動かさずに誰が居られようか。」（*ibid.*, p. 529）と時雄は胸を躍らせる。

当の女学生たちはこの時代をどのように生きたのだろうか。ただ男性たちから求められた衣装や髪型を身につけて、大人しくしていたわけではない。和装やコルセット付きの洋装では得られない身体の手をいれた彼女達は、その自由を満喫し、人々の欲望のまなざしを楽しみ、テニスや自転車といった活動を満喫し始める。また30年代からの公教育で誕生した新興女学生たちには、上流子女にしか許されなかった世界が急に自分のものとなり、「特権に手を延べ得るやも知れぬという、ある種の上昇気流」（本田, p. 88）が生まれたとある。彼女たちには知識や未来への欲望が新たに芽生えていたのである。

しかし、世間で女学生たちがあまりにも自由に闊歩し始めると、中には彼女たちの放埒ぶりに眉を顰めるものも現れる。本田も「人々の視線に、軽や

かに装い変えた女学生たちが、奔騰する性のままに振舞うモラル破壊者として、まぶしく、また、時にうとましく映じた」(ibid., p. 91) と指摘している。

時雄の芳子へのまなざしも「まぶしさ」から「うとましさ」へと次第に変化する。当初芳子の発展ぶりに眉を顰める家人に対して、時雄は次のように擁護している。

「お前達のやうな旧式の人間には芳子の遣ることなどは判りやせんよ。男女が二人で歩いたりさへすれば、すぐあやしいとか変だとか思ふのだが、一体、そんなことを思つたり、言つたりするのが旧式だ、今では女も自覚して居るから、為ようと思ふことは勝手にするさ。」(田山, p. 532)

そして芳子の手紙の文面や、その言葉（典型的な女学生言葉である）、振舞いをすべて自分に向けられた「嬌態」(ibid., p. 535) と解釈し、芳子への欲望を募らせる。

しかし芳子の恋人、田中が芳子を追って上京してくると、時雄の妄想は破られる。芳子が田中とのことを話すのに「私共」と「公然許嫁の約束でもしたかのやうに言ふ」(ibid., p. 558) のを不快に思い、次のような述懐となる。

当世の女学生気質のいかに自分等の恋した時代の処女気質とは異つて居るかを思った。勿論、此の女学生気質を時雄は主義の上、趣味の上から喜んで見て居たのは事実である。昔のやうな教育を受けては、到底今の明治の男子の妻としては立つて行かれぬ。女子も立たねばならぬ、意志の力を十分に養はねばならぬとはかれの持論である。此の持論をかれは芳子に向つても少なからず鼓吹した。けれどこの新派のハイカラの実行を見ては流石に眉を顰めずには居られなかつた。(ibid.)

プラトニックな関係を主張し時雄の庇護を求める若い二人を、表面上は保護者面して擁護してみせながら、時雄は内心、旧式な価値観に立ち返り、嫉妬に狂って芳子を自宅に住ませ監視する。だがやがて芳子と田中の関係が実はプラトニックなものでなかったことを芳子が告白するに至る。

この時の時雄の心情は、次のように語られている。

時雄の其の夜の煩悶は非常であつた。欺かれたと思ふと、業が煮えて為方が無い。否、芳子の霊と肉——其の全部を一書生に奪はれながら、兎に角其の恋に就いて真面目に尽くしたかと思ふと腹が立つ。其の位なら——あの男に身を任せて居た位なら、何も其の処女の節操を尊ぶには当らなかつた。自分も大胆に手を出して、性慾の満足を買へば好かつた。かう思ふと、今迄上天の境に置いた美しい芳子は、売女か何ぞのやうに思はれて、其の体は愚か、美しい態度も表情も卑しむ気になつた。[中略] 何うせ、男に身を任せて、汚れて居るのだ。此の儘かうして、男を京都に歸して、其の弱点を利用して、自分の自由にしようかと思つた。(ibid., p. 595)

ここで芳子のイメージが、ハイカラかつ道徳的な処女、「上天の境」の天女のようなイメージから、一気に「売女」へと落とされていることに注目したい。ことは、恋人と肉体的な関係を持ったというだけである。それがなぜか、不特定多数の相手をする売春婦のイメージが喚起され、さらには、それを理由に自分が芳子を姦淫しても許されるという思いが吐露される。その背後には、時雄が芳子の言動をして、自分への恋情の現れと解釈していたことがある。「あれだけの愛情を自分に注いだのは単に愛情としてのみで、恋ではなかつたらうか。」とか、「数多い感情づくめの手紙——二人の関係は何うしても尋常ではなかつた。[…] 語り合ふ胸の轟き、相見る眼の光、其の底には確かに凄しい暴風が潜んで居たのである。」(ibid., p. 521) などと、時雄は芳子が自分を誘っていたと思っていたのだ。であるから、自分へも色目

を使いながら、若い男とも出来ていたなんて、なんというふしだら、という思考回路となる。本田（1990）は、女性たちの行き過ぎた「近代化」を罰するかのよう明治30年代の人気大衆小説の性に奔放な女学生ヒロインたちが、ことごとく悲惨な最期を運命づけられていることを指摘しているが、『蒲団』の芳子もここで「汚れた肉」に位置づけられ、その罰を受け、時雄に破門されて郷里に帰されることになる。

時雄が芳子を破門するのは、師のいいつけを破り、信頼を裏切ったからとされているが、この引用部から見えてくるのは、「肉の誘惑」に負けた芳子の性の「汚れ」への憤りであり、また師匠として時雄が有すると思っていた、芳子への当然の権利の感覚である。ここに、当時の明治の男性知識階級の意識が見えてくるのではなかろうか。若い娘たちに教育を授け、近代化へと導いてやろうと言うのに、その娘たちが必要以上に奔放になり性モラルを逸脱し、近代日本の未来を危うくしているという危機感と怒り。そこには自分たちの特権性や優越性を自明のものとする感覚が透けて見える。

芳子が小説家になる夢を諦めさせられて故郷に帰されるのは、時雄から下された罰以外の何物でもない。時雄からしてみれば、大胆にも男のように小説家を目指したハイカラ女学生芳子を、受け入れてやったのであるから、芳子は自らの分際をわきまえ、時雄の配下で大人しく貞淑にしていればよかった（あるいは時雄のものになっていればよかった）のである。しかし師のいいつけを破り、「一書生」ごとくと密通した。そんな破廉恥な女は小説家にならせることはできない。こうして時雄は、師匠という立場と権利を行使して芳子から小説家という夢を奪ったのである。

批評家の大塚英志は、芳子が時雄に書き送っていた告白調言文一致体の手紙が、故郷に戻された後では文語体になることに注目している。竹山時雄という言文一致で書く作家がこの作品の中で行なったことは、芳子を近代作家となる道から追放し、文語体の世界へと（つまりは近代人以前へと）押し戻すことだったというのだ。大塚の言葉を引用するなら「作者つまり小説家だけが「私」になれると特権化するために、読者である横山芳子の「私」を剥

奪」(2004, p.119) することだったのだ。その理由として、大塚は当時の作家が感じていたであろう苛立ち、焦りを挙げる。

自分と同じような「私」を抱えた大衆に対する、既に作者になったものの苛立ちと考えていかないとまずい。近代文学で、作者が特別な「私」であるためには、芳子みたいな読者が簡単に「私」になられては困るわけです。(ibid., p. 119)

つまり時雄は自分の言文一致体が生み出した「私」に共感し同一化したがつた芳子に脅威を覚え、自己の特権を守るために芳子を文語体の世界に抑圧したというのである。だがそれならば、時雄の苛立ちは芳子からのファンレターを受け取ったときに始まるべきであり、田中の登場とは無関係であるはずだ。だが実際は、時雄は嬉々として芳子を弟子として受け入れ、彼女の小説家になりたいという欲望を承認しているのであり、田中が芳子を追って「文学」をやろうと上京してきて初めて、時雄の苛立ちは始まっているのである。

田中を芳子から引き離すために、時雄は芳子の父親を田舎から呼び出すという、師弟関係の階層性と父権を大いに揮う行動に出る。その際、芳子は「私は女……女です……あなたさへ成功して下されば、私は田舎に埋れても構やしません、私が帰ります」(田山, p. 591) と頗る前近代的な科白を吐いている。そして、その後、師匠に「欺いて」いたことを告白し、郷里に戻されるのである。ちょうど明治末期の大衆小説で、性的に奔放なヒロインたちが非業の死を遂げさせられるのと同じように、キリスト教信者の両親のもとに生まれ神戸の女学校に通い、進歩的・近代的・発展的なモダンガールだった芳子が、こうして前近代的な女性へと後退させられているのである。本田和子(1990)は、当時の人気大衆小説の女学生たちが「愛」によって身を滅ぼすべく運命づけられているのは、当時の日本社会が「父になろうとする」女たちの前に立ちふさがり、「良き妻であり、賢き母であれ」と指さし

て見せ」(p. 165) ているのだと指摘している。本田によれば、明治末期の女学生たちは「父になろうとする意志」と「なり得るという幻想」を与えられた挙げ句、それらを女という肉体であることという運命によって破壊しようとする言説で包囲されたという。¹²『蒲団』もその言説の一部であることが、この部分からはよく見えてくる。本田は明治の大衆小説にヒステリー症状を起こす女性が盛んに書かれていることを指摘し、それが当時の女性が「父になろうとする意志」(精神)と「母の血」(肉体)に引き裂かれる様子を象徴的に示していると分析している。¹³『蒲団』の芳子も「神経過敏」(田山, p. 535)に陥っており、大量に「シユウソカリ」(ibid.)を服用している。時雄はそれを評して「絶えざる欲望と生殖の力とは年頃の女を誘ふのに躊躇しない」(ibid.)と、その原因を芳子の肉体に帰しているのである。

芳子は時雄のライバル候補というよりは、時雄に「近代文学」を書く材料をもたらすミューズ・女神であった。事実、花袋は岡田美知代をミューズとして『蒲団』を書いたのではなかったか。つまり、時雄(田山花袋)にとって芳子(岡田美知代)は対等の存在ではなかった。時雄が芳子の「小説家」という夢を許していたのは、それが花袋を本当には脅かさなかったからなのである。

時雄を怒らせたのは、芳子が田中のものになった、という点である。自分の所有であったはずのものが、自分よりも目下の男に奪われた。しかも田中は作家を目指しており、将来自分のライバルになるかもしれない。大塚の指摘するような脅威として立ち現れたのは、むしろ田中であっただろう。時雄が芳子を「近代の女」から「前近代の女」へと戻したのは、芳子の逸脱した性モラルへの罰であると同時に、田中の所有物となった芳子を故郷に帰し、彼女の父の所有へと戻すことによって、田中からその所有物を奪い、苦しめようとしたのだと考えられるのである。

芳子とその父親を見送りに行く時雄の心情は次のように語られている。

時雄の胸は激して居つたが、以前よりは軽快であつた。二百余里の山

川を隔て、もう其の美しい表情をも見る事が出来なくなると思ふと、言ふに言はれぬ侘しさを感じるが、其の恋せる女の競争者の手から父親の手に移したことは少なくとも愉快であつた。(ibid., p. 600)

時雄は芳子の心情を思いやることはなく、むしろ田中を苦しめてやったということでほくそ笑んでいる。時雄が住むのはホモソーシャルな世界であつて、そこで女性である芳子はどこまでも男性の所有物としてしか認識されていない。自分の所有にならないのであれば、父親の所有に戻す方が、田中に奪われるよりもまだという心理がここで綴られているのである。

ちなみに、小説のモデルとなった岡田美知代は田山花袋に破門されて郷里に戻されるが、恋人永代静雄との関係は切れない。『蒲団』が発表されたとき、花袋はその事実を十分認識していたようだ。そして『蒲団』発表後の明治42年、彼は妊娠中の美知代を養女にして、永代と結婚させている。『蒲団』の出版によって美知代に対する「罰」は完了したのであろうか。あるいは花袋は『蒲団』の成功によって、もはや永代などに脅かされぬ名声を自負したのであろうか。またあるいは養父になることによって、永代よりも強力な所有権を美知代に関して主張したとも考えられるのである。

4 告白文学としての『蒲団』

柄谷によれば、この作品が日本文学史上衝撃的であつた理由は、「この作品のなかではじめて性が書かれたから」であり、その「性」とは、「それまでの日本文学における性とはまったく異質な性、抑圧によってはじめて存在させられた性」(2004, pp. 110-111)であるという。告白文学そのものは明治以前の日本文学にも存在し、代表作といえば井原西鶴の『好色一代女』が挙げられる。¹⁴しかしそれらは性の越境を伴う虚構の「告白」であり、作者の悔悟とは無縁のものであつた。一方、『蒲団』で描かれる性は、精神の下位に置かれた「恥ずべきもの」としての肉体であり「罪」である。そこに明治の文人たちが受けたキリスト教の大きな影響を見ることは妥当なことであ

ろうし、事実田山花袋はキリスト教に入信していた。作品中では横山芳子がキリスト教の教育を受けているし、彼女の恋人である田中も京都でキリスト教の説教師を志している。(これはモデルの岡田美知代と永代静雄も同じである。)

『蒲団』の作品全体もキリスト教の告白制度に則ったものであるという指摘は、福田恒存によってもなされている。¹⁵ しかし『蒲団』における告白は本当に罪の告白なのであろうか。時雄の欲情は確かに赤裸々に露悪的に書かれているし、それがしばしば彼の身勝手な妄想であろうことも読者にも伝わるように書かれている。前述したように、『蒲団』の時雄においても、他の私小説の「私」と同じように、客観的視点が確かに注がれているのである。だが同時に、彼の欲望や妄想の告白には、罪の告白に伴うような悔悟の念や罪の意識は感じられないのである。それらはむしろ堂々と、時に誇らしげに開示されているのであり、小説の中で「恥ずべきもの」「罪」として位置づけられているのは、これまで見てきた通り、むしろ芳子の行為であり、芳子の肉体なのである。

柄谷は告白制度の特殊性を指摘して次のように書いている。

告白という形式、あるいは告白という制度が、告白さるべき内面、あるいは「真の自己」なるものを産出するのだ。問題は何をいかにして告白するかではなく、この告白という制度そのものにある。隠すべきことがあって告白するのではない。告白するという義務が、隠すべきことを、あるいは「内面」を作り出す。(2004/2009, p. 113)

つまり花袋は、私小説という告白形式を採用することによって、告白さるべき内面・隠すべきことを捻出したのだ。それは西洋的リアリズムを手本にしてきた明治の文人にとって、大きな課題をクリアする非常に巧い手であった。江戸時代以前の文学のような主観を通して見た世界像ではなく、自己を外から眺める視点、「私」をリアルに書くという技術を、明治時代の作家た

ちは探し求めていたのである。そんな彼らにとって、この告白形式は願ってもないツールとなった。なぜなら、この方式を使えば「真の自己」を持ち得るのだし、それを描き得るからである。

なかでも性的な事柄の「告白」は、極めてプライベートなことである。それゆえ、その告白によって打ち立てられる「真の自己」もまたこの上なくリアルになる。中村光夫や福田恆存は私小説における登場人物と作者の距離の近さを批判しているが、その批判は『蒲団』においては外的外れであると言わねばならない。なぜなら、『蒲団』が優れた告白文学であるためには、それが作者の体験した事実に基づいた話に極めて近いことが肝要であるからだ。『蒲団』によって、田山花袋は自分が抱いていた女弟子への恥ずかしい欲情を曝け出し、「真の自己」を描き切ったと思ったのであろう。だから、そこに深い悔悟や罪の意識が感じられないのは当然である。なぜなら花袋は自己の「告白」を誇っているからである。

柄谷は、告白というのは「ねじまげられたもう一つの権力意志」(2004/2009, p. 122) であるとして、それが「弱々しい構えのなかで、「主体」たること、つまり支配することを狙っている」(ibid.) と書いている。

これを謙虚な態度とみてはならない。私は何も隠していない。ここには「真実」がある……告白とはこのようなものだ。それは、君たちは真実を隠している、私はとるに足らない人間だが少なくとも「真実」を語ったということを主張している。(ibid., p. 123)

花袋の『蒲団』はまさにそういった主張である。彼は自分をモデルにした「告白」によって自然主義文学の極みを達成し、作家としての権力意志を示したのである。

さらに言えば、キリスト教における告白制度が保証するのは罪の赦しであるように、花袋もこの「告白」によって、告白した内容が赦されることを確信しているのであるし、また事実、『蒲団』の成功によってそれが確認され

てもいる。だが告白による赦しが、告白する万人に保証されたものであったかということ、それは事実と異なるようで、『蒲団』において、時雄の欲情は赦されるものとして描かれる一方、芳子の性・肉体は赦しから見放されている。

それというのも、『蒲団』において告白しているのは時雄ばかりではない。芳子も告白しているのである。

先生

私は墮落女学生です。私は先生の御厚意を利用して、先生を欺きました。其の罪はいくらお詫びしても許されませぬほど大きいと思ひます。先生、どうか弱いものと思つてお憐れみ下さい。先生に教へて頂いた新しい明治の女子としての務め、それを私は行つて居りませんでした。〔中略〕どうか先生、此の憐れなる女をお憐れ下さいまし。先生にお縋り申すより他、私には道が無いので御座います。

芳子

(田山, p. 597)

これは、芳子が時雄に嘘を見破られた後、半ば強制的にさせられた「告白」の手紙である。しかし、高い教養と性モラルの遵守という「明治の女子としての務め」を果たさなかったという悔悟の念と罪の意識に溢れた手紙は、赦しを芳子にもたらずことはない。男性たる時雄（花袋）の性は赦され、女性たる芳子（美知代）のそれは赦されない。ここにも明治末期の日本社会におけるジェンダー階層を見て取ることが可能である。そこでは、女性の性が男性のそれよりも、もっと低く暗く罪深いものとして刻印されているのである。

5 近代日本文学の階層性

『蒲団』は性についての小説でありながら、また作家についての小説でも

ある。前述したように、中心人物は竹山時雄という作家である。この人物、「美文的小説を書いて、多少世間に聞えて居つた」(ibid., p. 526)ものの、現在は地理書の編集などして鬱屈している設定である。「後れ勝なる文学上の閲歴、断篇のみを作つて未だに全力の試みをする機会に遭遇せぬ煩悶、青年雑誌から月毎に受ける罵評の苦痛、彼自からは其の他日成すあるべきを意識しては居るものゝ、中心これを苦に病まぬ訳には行かなかつた」(ibid., p. 523)とある。これは当時の田山花袋の状態をほぼ忠実に再現している。要は、時雄は文学でなにか功績を上げたいと焦っている作家なのである。

そこへやってきたのが、彼を師と仰ぐ若い女性である。時雄の自我にとってはこの上ない支持者の登場であった。しかし、彼女の恋人である田中が「文学を遣り度い」(ibid., p. 561)と、本格的に東京に出てくることになったことは、大変な衝撃を時雄に与えている。

『文学？ 文学ッて、何だ。小説を書かうと言ふのか。』

『え、左様でせう……』

『馬鹿な！』

[中略]

『今一度留めて遣んなさい。小説で立たうなんて思つたッて、とても駄目だ、全く空想だ、空想の極端だ。[……]』(ibid., pp. 561-562)

このやりとり、促音が片仮名の「ッ」で表記されていたり感嘆符が使われていたり、時雄の動揺を伝えて、いかにも滑稽である。先に、時雄にとって田中は恋の競争相手として脅威だったのみならず、将来の作家として脅威であったと私は指摘した。しかしなぜそこまで時雄が脅威を覚えたかという点が興味深い。当時、スランプのような状態にあった時雄という作家にとって、若い作家志望の男性がすべて敵に見えたのかもしれない。だが大塚英志(2004)は「私」という私小説特有の告白形式のポテンシャルに原因があると分析している。¹⁶ つまり告白する「私」という近代文学私小説の手法は、

うら若き娘である芳子にも、そして田中にも使いこなせる汎用性の高いものだったということである。芳子のときは自分の男性としての優位性に奢り、平然としていられた。だが田中が芳子に追隨して作家を目指すと言ってきたときに、彼は焦り始めたのだ。このままではあつという間に自分の作家という特権が侵されてしまう、という危機感に時雄が襲われたのも不思議はない。事実、私小説という形態は、『蒲団』以降あつという間に広がり、現代でもその伝統が色濃く残っているのである。

さらに言うならば、言文一致体で成立させられた「私」の内面というのは、形式によって生み出されてしまう「私」であって、内実の伴ったものではなかったということだ。そこで吐露される「真実」は、告白という形式によって産出される「真実」であって、竹山時雄あるいは田山花袋という特定の作家の才能や固有性とは実はあまり関係がない。『蒲団』が告白文学として成功したのは、まさにそれが田山花袋の実人生と密接に関わった話であったからだということは先に指摘した通りである。言い換えれば『蒲団』は田山にとって告白文学の究極であると共に、田山花袋にとってこの作品以上の材料はもはやないということでもある。他の作家が、その人物の実生活を材料に、『蒲団』以上の告白文学を書くことは十分考えられるとしても。

田中に対する時雄の焦りは、彼の作家としての、それも自然主義近代作家としての特権性を侵されるという焦りであったのだ。そしてその特権性は、芳子や田中のような一般読者が同じように「私」を使って文学を書くことを妨げなければ、その独自性や優位性が保てない類の不安定で不確実なものだったということだ。作家である時雄と大衆である芳子や田中の間に、確固たる乗り越えられない階層性をなんとしても維持しなければ、時雄は自己を保てなかったのである。物語中で、時雄は田中に仕事を世話してやるといういながら、結局何もしてやらないが、それは当然である。なぜなら、田中（そして彼に続く作家志望の若者たち）から文学の道を奪い、東京で生活していく希望を閉ざすことが時雄の命題だったのである。

田中のモデルである永代静雄は、後に新聞記者となり、翻訳に携わったり

大衆小説などを執筆している。しかし田山花袋と比すると彼の業績は高い評価を得ているとは言い難く、時雄（花袋）の作戦はどうか功を奏したと言えるだろう。後日、岡田美知代は永代美知代名義で『蒲団』に対する反論を発表しているが、そこでは永代と花袋が同じ自然主義でも少々意見を異にしていたという事実や、花袋が、美知代が永代と結婚した後もいかに美知代に執着し永代を嫌ったか、美知代に「佐伯〔永代〕のやうなものはとても成業の見込みはない」（永代, 2009, p. 479）などと言っては、永代から離れることを勧めている様子が描かれているのである。

『蒲団』に見られるような、作家の排他主義は何も田山花袋だけのものではなかった。およそ多くの近代文学の作家たちは様々な派閥を形成し「文壇」を築き上げることによって、自分たちを特権化することに努めたのである。その多くは女性たちについて描き、女性たちとの性関係について描き、中には谷崎潤一郎のように、極端に西洋化した女性の奔放な性に対する男性の存在不安を描いたものもある。一方、女性を一見肯定的に善なる存在として書いているものであっても、それらの作品中の女性たちは男性作家たちのミューズにとどまらされている。女性たちには女性たちの定められた場所があり、それは芳子が戻らされた田舎であり、自然の中であり、また前近代なのである。例えば大正15年に発表された川端康成の『伊豆の踊子』においては、踊子が伊豆の美しい牧歌的風景と一心同体で描かれている。主人公の学生は、彼女とその仲間たちの中に、素朴な、日本的な美を発見し心を動かされる。学生にとって踊子は、日本人としての自我を確立させるためのインスピレーションであり原風景であるのだ。しかも彼女が性的に「汚れていない」ことも重要な点である。しかし、そこは学生にとって心を回復させる憩いの場所ではあっても、創造活動・活躍の場所ではない。彼が本来属するのは、近代化が進んだ都会なのであり、そこに彼は物語の最後で戻って行くのである。彼が東京で活躍するためには、彼の世界と踊子の世界の差異が維持されねばならなかったと言えるだろう。その他、同じく川端の『雪国』

(1935) や志賀直哉の『焚火』(1920) など、地方の旧弊たる世界と女性や母性を結びつけた近代文学作品は枚挙にいとまがない。

一方、明治以降、『蒲団』に描かれた芳子のように、書く女たちも相当数登場している。しかし芳子がそうであったように、彼女たちは文壇に君臨する男性作家たちによって指導される存在であり、時に彼女たちはミューズのように扱われ、作品をまともに見てもらえなかった。また時には彼女たちが書くべきジャンルを指定され、そこからの逸脱を許されなかった。詩人であり、また批評家でもある高良留美子(1995)は次のように書いている。

それら〔女性作家の作品〕を権威をもって読み、判定し、分類し、位置づける仕事は、ほとんど男性の批評家や研究者の手に委ねられてきた。そしてその結果、しばしばテキストそのものが十分に解読されないまま、〈女流〉文学として文学という制度の周縁部に置かれてきたのである。それらは既成の価値観の枠組を問うことなく、フェティシズムや郷愁や社会主義やナルシシズムの香気や臭気を放ちながら、男たちの〈近代〉の随伴現象として、本質的に無害な役割を果たすことを期待されていたとさえいえるだろう。(p.2)

高良がここで描写しているような男性による女性文学の検閲と周縁化は、現代に至るまで連綿と続いているが、明治前半に生きた樋口一葉は既にそのすべてを体験している。例えば樋口一葉といえば雅文体で知られているが、これは彼女生来の女性性を表すものではなく、男性の指導によって作られたものであったことを関礼子(1992)が検証しているのである。

[半井] 桃水の指導は以下の二点に要約される。ひとつは、「女流作家」の「女の言葉」が「女形」をやる「男優」と「女優」の比喩で論じられ、「自分を標準とする」「女優の演劇」は「荒ッぽく」なるこ

と。もうひとつは、「さほど耳立たぬ辞」も「書いて見れば優しくない」ことである。前者の「女形」をやる「男優」を「女装文体」を使用する「男性作家」と置き換えてみれば、桃水の言葉は「女の言葉」の形象において、当時の（少なくとも彼のイメージする）小説文体が圧倒的に男性作家の「女装文体」を標準としていることを示している。(p. 41)

桃水によって指導された「女の言葉」は男性作家が作り上げたものであり、それが女性作家に「女の徴」として指導されたものであったというのである。「いわば一葉は桃水という男性作家によって「父の娘」にふさわしいことばであるか否かという「ジャンルの掟=性的差異の掟」の検閲を受けたのだ」(ibid., pp. 42-43)と関は分析している。

また一家の大黒柱として生計を任されていた一葉は、自分が文学者たちの間で「女」として徴づけられていることを嫌って、明治29年5月2日の日記に次のように書いている。

我を訪ふ人十人に九人まではたゞ女子なりといふを喜びてももの珍しさに集ふ成けり、さればこそことなる事なき復古紙作り出ても今清少よむらさきよとはやし立る、誠は心なしのいかなる底意ありてもしらず、我れをたゞ女子と斗見るよりのすさび。されば其評のとり所なきこと、疵あれども見えずよき所ありてもいひ頭はすことなく、[…]
(樋口, 2005, p. 197)

作られた性的差異によって苦しんだ一葉の内心は、「我れは女なり、いかにおもへることありともそは世に行ふべき事かあらぬか」(ibid., p. 193)という同年2月20日の日記の言葉にも吐露されている。杉山武子(1999)は次のように分析している。

物心ついてからと言うもの、意志的な生き方を目指してきた一葉の夢を砕いてきたのは、常に女であることに起因している。女に学問は不要との理由で小学校を中退させられたことが、その後の一葉の意志の実現を阻む大きな要素にもなっていたのである。(七章)

ここにも明治の女学生たちが体験したのと同じ、「父になろうとする意志」をくじかれた女性作家の姿が浮かんでくる。そして彼女たちを阻んだのは、父たちによって作られた性の規範であったのだ。

こうして女性作家たちは特定の言葉遣いとジャンルの中で生きる事を要求され、周縁化され、二流作家として扱われた。また彼女たちがその後の歴史のなかで消されていく中で、文壇の男性作家たちは近代作家たる特権を、自分たちだけで独占していったのである。

6 むすび

本論で見てきたように、日本の近代文学は「私語り」によって奇跡的に「私」を確立させたようでありながら、その「私」とは守られた特権性に過ぎなかったのであり、特権的でなければ「私」としての自我を保てないゆえに、排除と抑圧のシステムにより守られねばならぬ脆弱なものだった。そもそも近代化以前の日本人には個がないと言ったのはパーシヴァル・ローウェルであるが、¹⁸ 大塚は近代化によって西洋的思想が入ってきた結果、個がなければならないという「強烈な動機づけ」が出てきて言文一致体が編み出されたと見る(2004, p. 87)。しかし皮肉にも、前述したように、この「私」の個を確立するためには、その他大勢の「大衆」が個を持たないことが必要だったのである。日本近代社会においては、他を抑圧することで自らの「私」を少なくとも形式的に成立せしめた少数と、個を確立できずにつき従った多数がいたのである。そしてこの場合、女性というグループは「その他大勢」の方に追いやられたのであった。

ヘーゲルの主人と奴隷の例を挙げるまでもなく、この「私」がいかに「大

衆」が「大衆」に留まっていることに依存していたかは明らかだ。近代日本は個を持たない大衆（女性を含む）と、絶対的な個を成立させたフリをしながら弱い「私」を必死に守っていた少数（男性）という集団だったからこそ、ネーション＝ステートの全体主義の中へと共に取りこまれ、戦争を引き起こしていったのではなかったか。近代文学を称揚する声の中には、この抑圧の構図やナショナリズムが引き起こした暴力の歴史に対する反省は、なぜだかあまり見られない。

しかしグローバリズムの21世紀に入り、我々はそろそろ自分たちの語る「私」を見直す必要性に迫られているのではないか。なぜなら、その「私」とはまさしく明治以降の文学において創造／想像されてきた「私」に他ならず、他者の抑圧と特権性の保持という遺産を含んで成立しているものに他ならないからである。

大塚英志は「9・11以降の「戦時下」に何一つ対応でき」なかった日本の現代文学弱体化を危惧し、その原因を近代文学の「私」に見ている一人である（2005, p. 166）。彼はこう書いている。

近代文学は「私」の主観の中にひきこもり、「私」を「他者」と交渉する主体として育むことも、ましてそれぞれの「私」がお互いに交渉し、パブリックなことばを紡ぎだしていく運動としてあることも忌避してきた。だからこそ、皆、ムラ社会的な空気に流され、われわれは「公民」たり得ないのだと柳田は昭和の初期の普通選挙実施の後で憤っているが、一人一人がメディアとなって発信し得る時代がやってきてしまった今、ぼくたちはもう一度、自らが他者にことばを届ける主体となり得るかが問われているように思う。[中略] ぼくたちは今や、より根本的に近代的な個人となることが求められている。(ibid., p. 189)

ここで大塚も指摘しているように、近代文学は真の意味で他者と対等な

「私」を確立させることに失敗してきた。しかしその近代文学の「私」がその後の日本社会の「私」の基盤となってきたのだ。だからこそこの国は全体主義に飲み込まれ、他者を疎外し他国を侵略し、その権利を侵害してきたのではなかったか。

現代文学の「問題」や若者の「文学離れ」が語られる際も、しばしば学生の学力低下が憂われるにとどまらず、日本人としての資質が失われようとしているという国粋的懸念に結びつき、日本語や日本文学、日本的価値観への回帰が叫ばれる。「正しい日本語観」「正しい日本人観」と結びついた近代文学がかつてナショナリズムの場であったように、いまでもかなり狭い意味での日本人観を培養している土壌である。この論調には日本なるアイデンティティの中身を問うことなく「美しい日本」「美しい日本語」を当然視する姿勢が隠れており、多様性どころか、ある種の「日本人」を基準として強いる態度と、それを支える抑圧的・排他的態度が混在している。例えば、2011年3月11日に起きた東日本大震災と福島第一原発事故においても、そういったある種の「日本人」を強制する言説が横行し、「がんばろう、日本」というナショナリスティックなスローガンと共に、自由な批判が抑圧される傾向が見られたのではなかったか。

日本社会の閉鎖性と、その精神的美しさは表裏一体である。だが例えば本論で見てきたように、近代日本文学における女性の抑圧を分析することで、近代文学の「奇跡」が排除してきたものたちとその悪影響が見えてくる。明治維新以後も日本語と国文学の関係は自明視され、だからこそ今でもネーションと結び付けて文学が論じられてきたのであるから、女性だけではなく非日本語話者や外国生まれの作家たちの差異化と排除もまた、詳しく見る必要があるだろう。¹⁹ グローバル化しネーションが無効化する現代社会において、日本社会もムラに留まっておれず今後は変わっていかざるを得ない。そのときに問われなければならないのは、「私」が一体誰を排除し周縁化しているのかという問題なのである。

Footnotes

- ¹ 本論考は、文部科学省科学研究費補助金（課題番号 19710221）の助成を受けた研究成果の一部である。
- ² 例を挙げるならば、夏目漱石は英文学、森鷗外はドイツ文学、二葉亭四迷はロシア文学にそれぞれ傾倒していた。しかし、夏目漱石や森鷗外は漢文の知識も豊富に持っていて、一方的に西洋文学を模倣した訳でもない。
- ³ 矢内賢二『明治の歌舞伎と出版メディア』東京：ペリカン社（2011）によると、明治時代に歌舞伎の型の伝承に関する危機感が生まれ、型の記録が始まったという。これは返せば、明治以前の歌舞伎においては「型」は当然視されていたということを示している。
- ⁴ これを柄谷は明治近代文学における「内面の発見」と呼んでいる（柄谷，2004/2008, pp. 41-102）。
- ⁵ 私小説はその名称から、一人称の語りと誤解されることがあるが、実際には三人称の語りで書かれていることも多い。1907年に発表された田山花袋の『蒲団』も三人称で書かれている。
- ⁶ もっとも真に国民皆学とは言えないのであって、明治4年に文部省が設置され国民皆学が志されたものの（文部科学省編，1981）、それは初等教育のみ男女を受け入れる制度であった上、初期においては当時の考え方から女子を小学校に入れない親も多かったという。また三年次以上は教科書も男女別であり、中等教育に至っては女子の受け皿は例外的事例を除き、存在しなかった（神戸女学院大学文学部総合文化学科編，2006）。詳しくは拙論（2012）*Separate ladder: Educated women's predicaments in Japan*. In Tran Thi Huong Hoa (Ed.), *Asian women and education – Asian, European and other perspectives* (Ha Noi: Tu dien bach khoa), 参照。
- ⁷ 小林秀雄『私小説論』（1935）、加藤周一、中村真一郎、福永武彦『1946・文学的考察』（1947）、中村光夫『風俗小説論』（1950）、福田恆存『日本を思ふ』（1969）などがその例として挙げられる。
- ⁸ この一例は田村安興による『ナショナリズムと自由民権』（2004）。
- ⁹ テクストには1993年出版の『定本 花袋全集』第一巻（京都：臨川書店）を使用した。原文中の旧字体漢字は常用漢字に修正した。

- ¹⁰ ここでの「国民」は飽くまで男性と考えられる。女性はその男性の妻となり、母となる存在であって、決して「国民」のフルステータスを与えられたわけではなかったのだ。
- ¹¹ 本田, pp. 136-167 参照。
- ¹² 本田, *ibid.* 参照。
- ¹³ 本田, *ibid.* 参照。
- ¹⁴ 関礼子 (1992, p. 45) 参照。
- ¹⁵ 福田恆存『日本を思ふ』(1969/1999, pp. 53-59) 参照。
- ¹⁶ もっとも大塚は本論文筆者とは異なり、時雄がその脅威を芳子に対して感じたのだと分析している (p.119)。
- ¹⁷ Chieko M. Ariga (1995) 参照。
- ¹⁸ Percival Lowell, *The soul of the Far East* (1888/1977) 参照。
- ¹⁹ 李良枝やリービ英雄などの非日本人作家もいるが、彼らはいまだにマイノリティ/外国人という徴付けされた存在であり、特別視をされている。

Reference

- 大塚英志. (2004). 『物語消滅論—キャラクター化する「私」、イデオロギー化する「物語」』. 東京: 角川書店.
- 大塚英志. (2005). 「もう一度「不良債権としての文学」に向けて」. 『早稲田文学』, 2005年5月号, 163-193.
- 永代美知代. (2011). 「ある女の手紙」. In 岩淵宏子, 長谷川啓 & 吉川豊子 (Eds.), 『[新編] 日本女性文学全集 第三巻』 (pp.466-480). 東京: 葎柿堂.
- 加藤周一., 中村真一郎., & 福永武彦. (1947). 『1946・文学的考察』. 東京: 真善美社.
- 柄谷行人. (2008). 『定本 日本近代文学の起源』 (岩波現代文庫版). 東京: 岩波書店.
- Original work published 2004.
- 柄谷行人. (2005). 『近代文学の終り—柄谷行人の現在』. 東京: インスクリプト.
- 神戸女学院大学文学部総合文化学科編. (2006). 『女子教育、再考』. 京都: 冬弓舎.
- 杉山武子. (1999). 『夢とうつせみ(4)』. Retrieved August 8, 2011, from <http://www2u.biglobe.ne.jp/~horizon/dream4.htm>
- 関礼子. (1992). 「闘う父の娘——葉テクストの生成」. In 江種満子 & 漆田和代 (Eds.), 『女が読む日本近代文学 フェミニズム批評の試み』 (pp.31-54). 東京: 新曜社.
- 高良留美子. (1995). 「はじめに」. In 岩淵宏子, 北田幸恵 & 高良留美子 (Eds.), 『フェミニズム批評への招待——近代女性文学を読む』 (pp.1-3). 東京: 学芸書林.
- 小林秀雄. (2001). 『小林秀雄全集 第三巻 私小説論』. 東京: 新潮社. Original work published 1935.
- 田村安興. (2004). 『ナショナルリズムと自由民権』. 東京: 清文堂.
- 田山花袋. (1993). 『蒲団』. In 『定本 花袋全集』 第一巻, 521-607. 京都: 臨川書店.
- Original work published 1936.
- 中村光夫. (1950). 『風俗小説論』. 東京: 河井書房.
- 樋口一葉. (2005). 『樋口一葉 日記・書簡集』. 東京: 筑摩書房.
- 福田恆存. (1999). 『日本を思ふ』. 東京: 文藝春秋. Original work published 1969.
- 本田和子. (1990). 『女学生の系譜 彩色される明治』. 東京: 青土社.
- 文部科学省. (1981). 『学制百年史』. Retrieved June 10, 2011, from http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpbz198102/index.html
- 矢内賢二. (2011). 『明治の歌舞伎と出版メディア』. 東京: ペリかん社.

- Ariga, Chieko M. (1995). Who's Afraid of Amino Kiku? Gender conflict and the literary canon. In Fujimura-Fanselow, Kumiko. & Kameda, Atsuko (Eds.), *Japanese women: New feminist perspectives on the past, present, and future*. New York: The Feminist Press.
- Lowell, Percival Lawrence. (1977). 『極東の魂 (公論選書8)』 (川西瑛子, Trans.). 東京：公論社. = (Original work published 1888.). *The soul of the Far East*. Boston: Houghton, Muffin & Company.

**Gender and Modernization in Japan: An Analysis of Tayama Katai's
The Quilt
Natsumi IKOMA**

Modern Japanese Literature has been characterised by its seemingly democratic revolution in writing system, *genbun-itchi*, and semi-autobiographical narrative style, *shi-shosetsu* (I-novel). This paper, though analysis of modern Japanese literature, probes into the external and internal urges of modernization and establishment of individuality prevalent in the Japanese society then, to reveal nationalistic tendency in the representation of what modern Japan should be like. I-novels, the paper argues, became a vehicle to create/propagate the notion of proper modern Japanese citizen that presupposes the repression/marginalization of certain kinds of people such as women. In Tayama Katai's *The Quilt* with its confessional narrative, for instance, we can see how women are marked by their "dirtier" sexuality and expelled from the spotlight of modernity, and are destined to return to/remain in the countryside, pre-modernity and nature, while the authority and the privilege of few male authors are heavily guarded. Through this and other modern literature, it is apparent that female writers in modern era suffered from the systematic repression and marginalization to "womanly" genres and narrative styles.

Keywords:

gender, sexuality, modern Japanese literature, I-novel, modernization, female author

寡婦性はいかに変容可能か
——インド・タミル・ナードゥ州に住む寡婦に着目して——
久保田 紘

1 はじめに

パフォーマンス研究の第一人者であるリチャード・シェクナーが述べているように、われわれは「複数の文化が衝突し、相互に干渉し、融合し、そして/あるいは混交することによって新しい成果が生まれてくるような文化状況のなかに」暮らしている (1998, p. 6)。そこでは、一見、明確に定義され、固定され、安定しているように見える行為の意味は、不安定で捉えがたいものとなる。「悲劇的存在」として知られるインドにおける寡婦という存在の意味もまた、固定的ではなく流動的で不安定である。政治、文化、宗教など、さまざまな要素が衝突し、融合し、混交する中で、絶えず寡婦という存在の意味が産出され、消費され続けているのである。

本稿では、南インド・タミル・ナードゥ州における低カーストに属する寡婦に着目し、彼女たちの日常生活や彼女たちをめぐる儀式をパフォーマンス¹として捉え、それらの行為が反復されることで寡婦性が産出され変容するプロセスの分析を行う。インドに関する研究の多くがそうであったように、インドの寡婦に関する研究も北部のヒンドゥー文化圏に着目したものが大部分であり、ドラヴィダ文化に属する南インドにおける寡婦の実態は注目されてこなかった。また、北部でも特に、上位カーストに属する寡婦の実態を調査したものが中心となっている。近年の研究としては Khanna (2003) の研究を挙げることができる。しかし、この研究はインド全体の傾向を幅広く捉えたものであり、特定の地域に踏み込んではいない。したがって、今日の特に南インドの低いカーストに属する寡婦に関する研究は手薄になっているのが実態である。

ところで、寡婦に関する慣習をパフォーマンスとして捉えるということは、「対象を仮の、時間とともに存在し変化する中間過程」として考察する

ことを可能にする（シェクナー, 1998, p. 8）。すなわち、ヒンドゥー教、ドラヴィダ文化、カースト制、州政府の方針、農村部コミュニティの構造などさまざまな要素が交錯しあう中で、寡婦という存在が産出され、消費されるプロセスを明らかにすることができるのである。インドの寡婦に対する差別的な扱いはヒンドゥー教に基づいていることは多くの研究の中で指摘されてきた。しかし、寡婦という存在の意味、さらに寡婦をめぐる社会規範は、時代、地域、宗教、文化間の衝突、融合、混交の緊張関係の中で、パフォーマンスな行為の反復によって継続的に産出され、消費されているのである。パフォーマンス研究の視点は、社会的規範を構築する寡婦をめぐる儀式や日常行為をパフォーマンスな行為の反復と捉えることで、「明確に定義され、固定され、安定している」ように見える寡婦という存在が、実は「存在論的に不安定で、信頼を欠き、捉え難い存在」であることを示すことができる。そのダイナミズムを明らかにしていく中で、寡婦に対する社会的規範が構築され、強化されていくプロセスだけではなく、そうした抑圧的な社会的規範に対抗する可能性を見出すことができると考えるのである。なぜなら、対抗の可能性もまたこのダイナミズムの中で生み出されるからである。

2 儀式、日常生活によって、産出される「陰」の存在としての寡婦

本稿は、2011年8月に行ったフィールド調査に基づいている。フィールド調査の際には、現地で活動するNGO組織SALT²の協力を得た。調査法には参与観察・インタビューといった質的手法を主に用いた。タミル・ナドゥ州ディンディグル県は、州都チェンナイから電車で7時間ほどのところにある農村地域である。調査を行ったK村はすべて指定カーストの人々で構成されている。2001年の政府による集計では、タミル・ナドゥ州は指定カーストの割合が19パーセントとインド全土の中でも5番目に高い。インド全土の指定カースト人口の7.1パーセントがタミル・ナドゥ州に住んでいる。調査を行った村の人口は577人ですべてヒンドゥー教徒であり、寡婦は30人ほどである。このうち年齢の若い9人に対してインタビュー調査を

行うことができた。

K村での調査によってまず明らかになったのは、夫を亡くした村の女性すべてに対して夫の葬儀の前に行われるヒンドゥー教の儀式の存在である。それは、村人がそれらの女性に陰の存在として生きることを宣告する儀式であるといえる。その儀式により、女性たちはこれまでの「生」から自らを引き離され、寡婦性という社会規範の中に配置されるのである。

この儀式の分析に入る前に、儀式の歴史的背景を抑えておくことにする。夫の死後、妻は陰の存在として生きなければならないという考えは、紀元前2世紀から紀元後2世紀頃に書かれたと考えられているヒンドゥー教の法典、『マヌ法典』に基づいており、夫を亡くした女性は古くから差別の対象となってきた。

かつては、タミル・ナドゥ州を含むインド全土でサティ（タミル・ナドゥ州ではウドゥンカッタイ）という寡婦が夫の死後に殉死する儀式が行われていた。夫の死に殉じて自ら死を選ぶことは、夫を亡くした女性のもっとも賞賛すべき姿であるとされ、このような女性は神格化された。18世紀以降、州ごとにサティを禁止する法律が制定されるようになって以降サティは次第に行われなくなったが、夫に命を捧げる女性像は現代においても多くの支持を得ている。そのことを如実に物語っているのが、1987年にインド北西部のラジャスタン州で行われたサティと、その後の論争である（セン、2004）。近隣の村から多くの人々がサティを賛美するために集まり、熱狂の中で儀式は行われた。その後、サティが寡婦自身の意思によるものか、親族による殺人であったかが問題の焦点となり、死亡した女性の親族が取調べを受けたが結局無罪となった。裁判においてもサティは女性自身の意思によるものであるとされ、その女性を神格化する声は少なくなかった（セン、2004）。また、宗教的価値の復興を説くヒンドゥー・ナショナリズムが、近年インド国内で高まっている状況の中で、夫に命を捧げる女性を神格化する傾向が強まっている（中島、2009）。サティを行う女性が神格化され、その行為が繰り返されてきたことで、生き残った女性の「生きる場」も消し去ら

れてきたのである。サティは寡婦の身体的「死」を意味するが、サティが禁止された現代では寡婦になることは象徴的「死」を意味する。かつては夫の死後生き残った女性は一族の恥として認識され、装飾品、財産をすべて剥ぎ取られ家を追い出されることもしばしばであった。現在でも寡婦が家を追われ、行き場を失ってしまうケースが少なからず存在する (Damon, 2001)。また、家を追い出されなかったとしても、寡婦はすべての装飾品を外し、頭髪をそり、食事を控え、すべての楽しみから遠ざかることが求められ、現在でも一部でその習慣は続いている。

サティの習慣は過去のもので現代では行われていないが、K村における儀式はサティの名残ともいえるものである。K村における儀式は、夫の葬儀の日に執り行われる。葬儀の日、夫の遺体の火葬の前に妻は花嫁の姿に着飾られる。結婚式用のサリーを着させられ、ガラス製のバングル(腕輪)を着け、化粧をほどこされる。夫側の親族がこれらを用意し、寡婦となったその女性に着せるのである。その直後、女性は密室で醜い姿に変えられる。バングルは破壊され、髪や化粧も乱される。これらの行為は同じ村に住む寡婦によって行われる。同じ村に住む寡婦がこの行為を行うということで、「陰の世界」へと配置換えを余儀なくされる。そして醜い身なりのまま三叉路まで連れて行かれ、そこで別の儀式が行われる。儀式を行うのは、息子か、息子がいない場合は夫の父親または兄弟である。水が入った粘土製のポットを持ち、遺体の周りを3度回る。1周まわるごとに、僧侶がポットを少しずつ壊していく。3周まわり終わるとポットは粉々に破壊される。寡婦はただその光景を見ているだけである。その後、遺体は火葬場へと運ばれるが寡婦はそこへ行くことは許されていない。サリーで顔を覆われ、自分の家に連れて行かれるのである。美しい花嫁の姿にした直後にそれを醜く乱すことによって、結婚している女性が持つとされる幸運や豊穡といった要素を剥ぎ取ることの意味していると考えられる。

儀式を経て、公に陰の存在として生きることを宣告されたK村の寡婦は、生活上、一定の制限を受けることになる。まず、服装であるが、結婚を象徴

するものを身に着けることは許されない。たとえば、ガラス製のバンゲル、足にはめる指輪、髪につける花飾り、ビンディと呼ばれる額につける赤いステッカー、結婚していることを表すチェーンなどである。また、結婚式や新築祝い、新生児の命名の儀式などの祝い事への参加は控えなければならない。これらの制限に従って生活していくことにより、コミュニティ内の、さらに社会における陰の存在としての意味づけが実体を持ち、強化されていく。このような儀式はK村だけのものではなく、他の地域の村のヒンドゥー教徒の間でも見られる。

こうした儀式や寡婦に課される制約がヒンドゥー教の『マヌ法典』に起源をもつことについてはすでに触れた。つまり、それらの制約はカースト制度の最上位に位置するバラモン階級の男性が中心となって作られたものである。そして、それらは同じバラモン階級の男性が構築した「物語」によって正当化されてきた。夫につくすことを妻の唯一の義務とし、夫の死後も夫に身を捧げる女性を美化する「物語」である。この「物語」は一方で、男性が女性を管理する必要性を強調している。結婚前には女性は父親によって管理され、結婚後は夫により管理されるべきであると考えられているのである。男性に管理されていない女性は社会にとって危険な存在であり、厳しい制限が必要であるというのが寡婦に対する制約を正当化するロジックとなっている。

しかし今日こうした寡婦に対する制約はヒンドゥー教の女性に限られているわけではない。夫の死後、結婚衣装を着せられ、その後醜い姿にされる儀式こそ経験しないものの、今回調査を行なった地域に住むキリスト教徒の女性に対しても服装の制限が課せられていることが明らかになった。そうした制約がヒンドゥー教徒以外にも慣習として広まっていることには注目すべきである。また、映画などのメディアでも男性に依存する女性像が繰り返し流されるなど、宗教の枠を超えて、そういったイメージが再生産されているのである。

男性に管理されていない女性は社会にとって危険な存在として見なされる

ため、寡婦となった女性は醜い姿になり、他の男性を惑わさないようにしなければならぬ。したがって、若い寡婦ほど陰の存在としてのアイデンティティを持つことを、より強く要求されるであろうことは推測に難くない。では夫を亡くした女性に再婚の可能性はないのであろうか。

K村においては再婚する寡婦はこれまでほとんど存在しない。従来の研究では高いカースト内でのみ再婚を禁じ、それ以外のカーストは再婚を認める傾向があることが指摘されてきた (Chakravarti, 1995; Khanna, 2002)。バラモン階級が再婚を禁じてきた理由としては、支配層としての立場を強固にするために、性に対する管理を厳しく行ってきたことが挙げられる。一方、農村部などでは、農業に従事する労働力が必要とされるため、再婚が推奨されてきたという指摘がある。中には亡夫の弟との結婚 (逆縁婚) が奨励される地域もあるということが言われている (Khanna, 2002, p. 39)。

ではなぜ指定カーストのK村では、再婚が見られないのか。K村の寡婦たちが口を揃えていう理由は子持ちであるということであった。それ以外の社会的、文化的要因としては、一人の男性に一生尽くす女性像がヒンドゥー教の教えの中のみならず、映画などの中で繰り返し産出され、タミル・ナドゥの農村社会の中にまで浸透してきていることがある (Sagayaraj, 2007)。したがって、寡婦自身も再婚を控えるようになり、また、男性も寡婦との再婚を考えないようになっていった。さらに、タミル・ナドゥ州政府が出生率の抑制を推進しており、その考え方が農村部まで浸透していることも、再婚が行われない要因の1つとして考えられる。

3 寡婦へのまなざし

以上のように夫の葬儀と同時に行われる儀式と、その後の生活規範の制限によって、陰の存在としての寡婦のアイデンティティは強化されていく。しかし、K村の人びとがそのような寡婦性を絶対的なものと厳格に捉えようとする姿勢は見られない。実際にK村の寡婦に課される制限は、Khanna (2003) の先行研究で指摘されている制限と比べると、比較的緩やかである

ことがわかる。たとえば、インドでは伝統的に寡婦は白色のサリー（タミル・ナドゥ州では明るいアーモンド色のサリー）のみ着用が許されると先行研究では指摘されているが、K村ではサリーの色に制限はない。また、Khanna（2003）によると、インドでは寡婦の食事は1日1回か2回で、肉、魚、たまねぎ、にんにく、ピクルスなどは性欲を増徴させるとして禁止されており、この傾向は特に上位カースト（ブラフマン）に見られる。しかし、今回調査を行った寡婦の中で夫の死亡後、食事を変えた人は見られなかった。

さらに、村人の寡婦に対するまなざしは、差別的というよりは同情的である。たしかに、「知り合いから相談されなくなる」、「夫側の親族から連絡がなくなる」などといった、自らが軽視されるようになる傾向を寡婦自身感じており、これは寡婦に対する差別であると言えよう。しかし、先行研究に見られるような寡婦の人間性を否定するような傾向までは見られなかった。むしろ、少なくとも表向きは社会的制約や貧困状況に同情的な視線を向ける人が多い。また、亡夫の親族からいやがらせを受けるといった事例は先行研究で数多く取り上げられているが、K村においてはそのような事例を聞くことはなかった。むしろ、亡夫の両親や親族が寡婦に対し、何らかの援助をしている事例が複数見られた。ただし、金銭面については親族や他の村人から支援は得られていないようであった。これは、寡婦という存在を理由とするよりは、K村全体が貧しく、村人の多くは自らの生活を守るのに精一杯で、返済が期待できない寡婦に経済的援助をする余裕がないからであると考えられる。

K村の人々は、先行研究で挙げられている北部の事例と比べると、寡婦性に対して比較的緩やかな態度をとっている。その要因として、まずK村の構成員がすべて指定カーストに属していることが挙げられる。寡婦に対する差別は上位カーストほど強いといわれ、タミル・ナドゥ州の中でも、一部の上位カーストの村ではアーモンド色のサリーのみ着用が許されるなど、より厳しい制限が課せられている。

もう一つの要因として、ドラヴィダ文化特有の村内・親族内の結婚の習慣や母系の絆を大切にしている習慣、母親を大切にしている習慣があることが挙げられ

る (Kapadia, 1993; George, 2003)。K村においても半数以上の寡婦が母方または父方の親族と結婚していた。また、村内か近隣の村といった地理的にも近い相手と結婚する傾向が見られた。このような結婚制度においては、寡婦が親族から完全に排除されるということは考えにくい。さらに、母親がドラヴィダ文化においては特別な存在であることも、寡婦に対する差別が北部地域に比べて緩やかな要因として働いていると考えられる。ドラヴィダ文化においては母親は絶対的に大切にすべき存在であり、妻に対してはある程度の横暴な態度は許容されても母親に対し、失礼で横暴な態度を取ることはタミル・ナドゥの社会においては許されない (Sagayaraj, 2007, p. 132)。従順な妻像が映画等の大衆メディアで産出されているのと同時に、崇拜する対象としての母親像もまた、同じメディアの中で生み出されているのである。K村の寡婦は全員寡婦であると同時に母親である。ここでは、二重の矛盾したイメージの中で生きることになる。先に見てきたように、寡婦は寡婦性の制約の中に生きることを要求されるが、村社会の背後に完全には追いやられないのは、ドラヴィダ文化における崇拜の対象としての母親像があることが影響しているのではないかと推測される。

タミル・ナドゥ州政府とNGOによる、女性の地位向上へ向けた取り組みも見逃すことのできない要因の一つである。インド全土の中でもタミル・ナドゥ州政府は女性の地位向上に熱心であり、特に貧困層の女性に対してマイクロクレジット等を用いて女性の経済的自立を促すなど、さまざまな取り組みがNGOと連携して行われている。また、十分に機能しているとはいえないものの、寡婦年金制度等、寡婦に対する支援制度も整えられている。このような取り組みもまた寡婦に対する意識に変化をもたらす要因の一つと推察される。

4 寡婦Aの事例－寡婦をめぐる社会的規範に対抗する可能性－

陰の存在として寡婦を位置づける社会的規範は残っているものの、それらは絶対的ではなくなっている。ここでは、K村に住む寡婦Aに着目し、

彼女の日常生活をパフォーマンス研究の観点から分析し、寡婦Aが支配的な陰の存在としてのアイデンティティに対する対抗的アイデンティティを産出していることを明らかにする。2011年8月にAに終日同行し、その生活の様相を調査したほか、複数回インタビューを実施した。

K村に住む村人全員がそうであるように、AはPallanという指定カーストに属し、2011年8月時点において42歳である。13年前に病気で夫を亡くしている。ヒンドゥー教徒で、州立の保育所の職員を務めている。保育所の職員の仕事は夫の存命中からしているという。仕事を始めたころは、保育所の職員の助手をしており、夫の死後、職員として働くようになった。10年生（日本の中学校に相当する）までの教育を受けており、村の中での教育レベルは高いと見られる。⁴ Aはこの村で生まれ育った。夫は近隣の村の出身で、彼女の実の父親も働いていた紡績工場で日雇い労働をしていた。結婚後、夫がこの村に移り住み、共に暮らしていたが、夫の死後も現在までK村で生活している。

Aという存在が示しているのは、陰に生きる寡婦像とは異なる、K村の表舞台上で活躍する寡婦像である。多くの寡婦がそうであるように経済的貧困には直面しているものの、Aは主体的に生きる寡婦の可能性を提示している。

Aへのインタビューや観察を通して明らかになったのは、州立の保育所の正職員という地位がAのアイデンティティの大きな位置を占めていることである。タミル・ナードゥ州では公的機関での仕事は特別な敬意を持って扱われる。教育、交通、飲食業まで幅広い範囲で州政府運営の機関は存在するが、日本ではあまり評価されないような仕事であってもこの地域では公的機関の職員というだけで尊敬の対象となる。したがって、村の中のAの社会的地位はかなり高いと言える。A自身も州立の保育所であることをインタビューの中で強調する傾向が見られた。

さらにタミル・ナードゥ州の村では公立保育所の職員は保育所の子どもたちの面倒を見るだけでなく、村人の妊娠、出産、子育ての公的支援に関して中心的な役割を担っている。例えば、Aは村に住む妊婦すべての記録をつ

けるという役割も担っている。妊娠していることがわかると、妊婦の女性はAのところに来て、状況を報告するという。帳簿には、村の誰が妊娠何ヶ月でどういう状態なのかの記録がつけられている。また、妊娠中・子育て中の栄養指導を行うのも公立保育所の職員の仕事となっている。月に一度は保育所で妊婦や子育て中の母親を対象にミーティングを行っている。州政府は妊婦に対して、栄養食を毎月配布している。その管理を行うのもまた、公立保育所の職員である。

こうした妊婦に対する政策は2000年頃にタミル・ナードゥ州政府によって導入されたものだが、導入当初からAはこの役割を担ってきた。最初はこの政策の理解を得るために各家を回ってその取り組みの重要性や家族計画の大切さを説いて回ったそうである。また、州政府は保育所の児童を対象に無料で5種類の予防接種を実施している。医師や看護師が保育所に来て予防接種を行う仕組みになっているため、保育所の職員がその記録をつけることになっている。

寡婦であるAがこのようにK村の育児に関して中心的な役割を担っていることは、寡婦は幼い子どもに触れてはならないというヒンドゥー教の習慣があること (Khanna, 2002) を考えると特筆すべきことである。Aが保育士として妊娠・出産・育児に携わる行為を反復することで、不吉な存在としての寡婦のアイデンティティを揺るがしているといえる。

Aが額につける赤いステッカーも寡婦のアイデンティティをAが揺るがしていることを象徴している。ヒンドゥー教徒は、ビンディ (タミル語ではプットゥ) と呼ばれる丸い赤いステッカーを額につける。夫が亡くなると赤い色のビンディをつけることは通常許されない。赤は女性のエネルギーを象徴するものであり、女性やその夫を護るものとされるからである。寡婦は黒いステッカーをつける事になっている。

では寡婦Aはどのようにして赤いビンディを着用するようになったのか。すなわち、どのようにして寡婦Aは、寡婦に課される社会規範から脱したのであろうか。Aは自ら赤いビンディをつけることを選択したわけではなかつ

た。上司に当たる州政府の職員から赤いステッカーにはどうかと言われつけるようになったという。寡婦は赤ん坊に近づいてはいけないと考えられているため、妊娠、出産、育児の仕事に携わるには寡婦性を隠す必要があると上司が考えたのではないかと推測される。おそらく同じ村の人に対してというよりはむしろ、他の村の同じ立場の職員に対して、Aの寡婦性を隠す必要があるとその上司は判断したのではないか。というのも同じ村の人びとはAが寡婦であることを認知しており、その上で彼女が出産・育児について中心的な役割を担うことを認めている。公立の保育所の職員というのは、定期的に職員同士のミーティングがあり、それに参加しなければならず、その場で他の村や都市部の職員と会う機会があるという。カーストや階級によって、寡婦の社会参加、特に子どもに関する仕事に携わることに對して否定的な反応をする人がいるために、彼女の上司は赤いステッカーをつけることを勧めたのではないかと考えられる。

しかし、寡婦であるAが自らの意思で赤いビンディを着用しなかったからといって、Aによってもたらされる抵抗的意義が弱められるわけではない。赤いビンディをつけて仕事をするという行為を繰り返し、それが村人に受け入れられていくことで、抑圧的な寡婦性は不安定なものになっていく。勿論、Aの存在により、ただちに寡婦の社会的制約が弱体化していくわけではない。Aの住む村内では現時点では赤いビンディは彼女だけが許される特権である。公的機関で働いていることに對して村人が敬意を持っていること、彼女が村の中で実績を残し、村人からそれが認められていること、彼女自身が生まれ育った村で働き、村人との間に強い信頼関係があることの結果として、赤いビンディが許されているのである。それでも尚、寡婦Aの存在は陰の存在、不吉な存在としての寡婦のアイデンティティを揺るがし得るものと考えられる。

最後に、対抗的言説を産出しうる条件について考察する。コミュニティの構成員の寡婦に対するまなざし、コミュニティの中における寡婦に対する社会的規範、その地域における政治的、文化的、社会的要素が寡婦性の形成に

影響することは言うまでもない。それらをいかに変えていくことができるかが鍵となる。寡婦Aの事例から言えることは、教育レベルや専門性の高く公共性の高い職業につくことが重要であるということである。

ドラヴィダ文化の中では、女性は男性との関係のみにおいてアイデンティティが規定され、男性に従順であることが女性としてもっとも重要な要素であるといわれている (Sagayaraj, 2007)。しかし、男性との関係に頼り、それ以外の自分自身のアイデンティティを持たないことは、女性自身が大きなリスクを負って生きることを意味する。なぜなら、夫がいなくなってしまった後の拠り所がなくなってしまうからである。独自のアイデンティティを持たない寡婦は、陰の存在としての寡婦のアイデンティティに身をゆだねて生きるしかない。男性との関係性以外の面でアイデンティティを構築していくこと、すなわち、教育を受け、なんらかの職業に就くことではじめて、寡婦に課される社会的規範から自らを解放することができるのである。その可能性を寡婦Aは示してくれているといえるであろう。

5 おわりに

K村において寡婦性は、ヒンドゥー教、ドラヴィダ文化、タミル・ナードゥ州政府の政策、コミュニティにおける寡婦へのまなざし、カースト制のせめぎ合いの中で絶えず産出され、消費されている。寡婦は儀式を課され、生活を規制されることで、寡婦という役割を演じることを要求される。その規範の中で生きることで、陰の存在としての寡婦のアイデンティティが形成されていた。

しかし、ヒンドゥー教の経典にもとづく寡婦のアイデンティティを、寡婦はなすすべもなく受け入れ、それを再生産することしかできないわけではなかった。寡婦Aの存在はこれまで構築されてきた寡婦に関する支配的言説に対し、対抗的な言説を産出していたのである。すなわち、彼女の生き方そのものが「陰の存在」としての寡婦というアイデンティティを揺るがすパフォーマンスとして機能しているのである。そこに寡婦差別の解決の可能性を見出すことはできないであろうか。

Footnotes

- ¹ 高橋雄一郎（2005）はパフォーマンスを三つの枠組みに分類している。一つは、舞台芸術、芸能として捉えられるパフォーマンス、二つは、日常生活におけるパフォーマンス、三つは、文化的パフォーマンスである。本稿では、二と三のパフォーマンスについて取り上げる。
- ² SALT（Stanley Arms of Love Trust）は2010年6月に調査を行なったK村のあるインド・タミル・ナードゥ州ディンディグル県で設立されたNGOであり、寡婦支援、教育支援を中心に活動を行っている。
- ³ 指定カーストとは、かつて不可触民と呼ばれ、カースト制の外にあると認識されてきた人々のことを指す。
- ⁴ この村の情報提供者9人の学歴は以下の内訳になっている。まったく教育を受けていない人が3人、2年生が1人、5年生が3人、8年生が1人、10年生が1人であった。

References

- シェクナー・リチャード. (1998). 『パフォーマンス研究－演劇と文化人類学の出会うところ』(高橋雄一郎, Trans.). 東京：人文書院. 16
- 高橋雄一郎. (2005). 『身体化される知－パフォーマンス研究』. 東京：せりか書房
- 中島岳志. (2009). 『インドの時代－豊かさと苦悩の幕開け』. 東京：新潮文庫
- マラ・セン. (2004). 『インドの女性問題とジェンダー』(鳥居千代香, Trans.). 東京：明石書店
- Chakravarti, Uma. (1995). Wifehood, widowhood and adultery: Female sexuality, surveillance and the state in the 18th century Maharashtra. *Contributions to Indian Sociology*, 29, 3-21.
- Damon, Arwa. (2007, July 5). Shunned from society, widows flock to city to die. CNN World. Retrieved 19 June 2011, from <http://www.articles.cnn.com/2007-07-05/world/damon.india.widow>
- George, Glynis R. (2003). Pineapples and oranges, Brahmins and Shudras: Periyar feminists and narratives of gender and regionality in south India. *Anthropologica*, 45 (2), 265-281.
- Khanna, Meera. (2002). Widowhood in India: Trauma of taboos and tribulations. In V.M. Giri (Ed.), *Living Death: Trauma of Widowhood in India* (pp. 19-49). New Delhi: Gyan Publishing House.
- Sagayaraj, Antonysamay. (2007). The Dravidian women of south India: A case study of Kerala nurses. *アカデミア 人文社会科学編*, 第84号, 127-135.

**The changeability of widowhood: A study of widows in Tamil Nadu,
India
Aya KUBOTA**

The meaning of “widows” and the social norms are continuously produced and consumed in particular social and historical circumstances although they seem clearly defined, fixed, and stable. Based on performance studies which assume all of social reality is constructed by actions, behaviors and events, this study reveals the dynamism of widowhood in Tamil Nadu, the southern part of India. Specifically the focus is on widows in a scheduled caste village in rural area. The study shows that Hinduism, Dravidian culture, the state government's policies, attitudes toward widows in communities and the caste system affect on shaping widowhood. Certain behaviors and rituals which are learned, rehearsed and presented over time form widow's identity as a “shadow.” However, it does not mean that widows cannot do anything but reproducing the identity. The study presents a possibility of changing widowhood by focusing on a widow and demonstrating that her performative acts function as making the dominant discourse of widows unstable.

Keywords:

widows, Tamil Nadu State in India, performance studies, the caste System, rural area

書評

Rose, Tricia.(1994). *Black noise: Rap music and black culture in contemporary America*. Hanover, NH: Wesleyan University Press.

トリシャ・ローズ.(2009).『ブラック・ノイズ』.(新田啓子, Trans.).

東京：みすず書房.

堀真悟

『ブラック・ノイズ』は、学術書としては初めてヒップホップを取り上げた本として知られている。著者のトリシャ・ローズは、フェミニズムや黒人文化論を横断的に論じるアメリカ文化研究者であり、日本においては断片的に論文やインタビューが紹介されてきた。そして、『ブラック・ノイズ』は、彼女の著書の初めての邦訳となる。フェミニズムや黒人文化研究の領域において精力的に発言している彼女の研究が、こうして紹介されたことは、それらの研究領域に携わる者にとっても、また、日本のヒップホップ・ヘッズにとっても、喜ばしいことといえるだろう。

『ブラック・ノイズ』におけるローズの目的とは、次のようなものである。「『ブラック・ノイズ』は、人種的・性的支配力、黒人文化の指向性、そして現代ラップ・ミュージックに現れる大衆の抵抗が交差する、複雑で矛盾に満ちた諸関係を見極める試みだ。」多岐にわたるヒップホップ・カルチャーのなかでも、とりわけ論じられるのは、ラップ・ミュージックである。ローズはその内に、アメリカ社会における、人種やジェンダーをめぐるポリティクスの諸相を見出そうとする。

つまり、ローズによれば、ラップ・ミュージックの発生と発展は、それが出現した社会/歴史的な文脈に即して説明される必要があるという。ラップ・ミュージックは、真空空間から突如として生じたものではない。そこに書き込まれているのは、「イデオロギー的、文化的、性的葛藤」を語る「多声的な言語」であり、これこそ「ブラック・ノイズ」と呼ばれるものに他ならない。

ローズにとってのラップ・ミュージックは、黒人の口承伝統や音楽伝統と、1970年代NY・ブロンクス地区において利用され、また廃棄されていたテクノロジー（DJのターンテーブルはその一例である）の融合の結果として生まれたものである。黒人の表現形式と切っても切り離せないそれはしかし、機動的なアイデンティティ・ポリティクスとは異なるものである。「ラッパーズ・ディライト」のヒットやランDMCなどの活躍によって注目を得たラップ・ミュージックは、産業/商業的な回路を通じて、またミュージック・ビデオなどの手法を通じて、「郊外に住む何千人もの白人の少年少女に訴える」ことが可能となっている。

すなわち、ラップ・ミュージックは「他者の楽しみや参加を否定するものではない。」むしろ、白人による受容があつてこそ、ラップ・ミュージックは大衆音楽へと成長できたともいえる。時にそこには、文化の収奪や、人種の抑圧への抵抗の無化といった危険性も生じるだろう。しかしだからこそ、ラップ・ミュージックは、その言説的側面と音楽的スタイルという「最低でも二重の構造を保つことで、黒人オーディエンスと、白人の支配するより広い文脈の両方に語りかけてきた」のである。

くわえて、その言説的側面、すなわち歌詞の分析において、ローズが次のように述べていることは興味深い。「ラッパーは、支配的な言説の断片を取り上げ、それを代替的で拮抗するヘゲモニーを備えた言説の中へと絶えず投げ込むことで、対抗的な解釈を合法化しようと図ってきた。」直接の言及こそないが、ここにはジュディス・バトラーが論じているような「意味づけなおし」、支配的な言語の引用—反復による攪乱可能性をみることもできるだろう。¹ そうしたテキスト上の抵抗を通じて、ラップ・ミュージックは「時に譲歩や調停の可能性を開く。」すなわち、ラップ・ミュージックは、人種やジェンダーのポリティクスに介入し、ヘゲモニーの書きかえを要求する「陣取り合戦」として理解されるのである。

ここまで、ローズのラップ・ミュージック論を概観してきたが、注意せね

ばならないのは、彼女の議論はヒップホップやラップ・ミュージックの単なる讚美に終わるものではないということだ。それらが内包する黒人文化の伝統を重視しつつも、彼女は、同時にその内部に、看過しがたい問題点、重要な差異とその拮抗を見出す。それはラップ・ミュージックにおいて表象されている「性差別主義」であり、また「人種差別や性差別にあうことの痛みを創造的に問題化する」黒人女性ラッパーたちである。

ローズは、ラップ・ミュージックの性差別主義を、「偽りの救済」と称する。それは、経済的/社会的な恩恵に預かれず、自己肯定感を得られない若い黒人男性が、みずからを慰めるために持ち出される。財力や社会的地位の欠如を補填すべく、異性愛的な男性性が動員されるのである。ラップ・ミュージックは、抑圧的な社会状況下で、若い黒人男性が権力にアクセスするための一媒介としての役割を担いうる。

しかし、だからといって、ラップ・ミュージックが本質的に性差別的だというわけではない。ラップ・ミュージックは、みずからが抱える性差別主義を自己批判してもきた。また、そこで表象され反復されているのは、アメリカの文化構造そのものに根差した性差別主義であり、ラップ・ミュージックのみにそれを還元するのは、ラップ・ミュージックをスケープゴート化することにつながってしまう。ローズは、こうした事情に目をくばりつつも、男性ラッパーが性差別主義を弁解することには鋭い批判を向ける。「ラップの性差別主義が攻撃されるたびにラッパーが持ち出す陳腐な言い訳には、もううんざりだ。」ローズの議論は、ラップ・ミュージックに、困難をも積極的に見出していく。

しかしローズは、性差別主義者としての黒人男性ラッパー、反性差別主義者としての黒人女性ラッパーという二項対立的図式を、注意深く回避しようとする。そうした図式は、いわば「男性の性差別と女性ラッパーの抵抗の一枚岩」である。ローズは、こうした「抵抗の一枚岩」に、ふたつの問題点を指摘している。

ひとつに、「女性ラッパーを男性ラッパーの反対勢力として全体化してし

まう」ことが挙げられる。ローズによれば、クイーン・ラティファやMCライトといった女性ラッパーたちは、この点に気づいているという。これらの女性ラッパーたち、そしてローズが危惧するのは、自分たちの反性差別的な言説が、反人種差別的な政治に流用されてしまうことである。しかしその一方で、ラップ・ミュージックの性差別主義もまた、看過することはできない。こうした隘路にあつて、女性ラッパーたちは、「全面対決」ではなく、「様々に矛盾する方法で、男性ラッパーの性的言説を支持し、同時に批判もしてきたのである。」

ふたつめにローズが問題視するのは、「男女を一元的に対立させたところで、ラップの性的ダイアロジズムの矛盾する性格や複雑性は説明できない」ということである。ラップ・ミュージックにおける歌詞/言説の差異や矛盾は、単にジェンダーのみに基づいて説明されるものではない。たとえばセクシュアリティを導線として考えることも可能だろうし、また女性ラッパー同士、また男性ラッパー同士においても、差異や矛盾は見出される。ア・トラライブ・コースト・クエストがデートレイプを批判する一方、アイス・キューブは性差別的な意識を鼓舞する。ヨーヨーが父家長制に無自覚であるかたわらで、ソルト・ン・ペパは黒人男性のおかれる苦境に理解をしめす。「つまり、男性ラッパーの性的言説といえども常に性差別主義的なわけではなく、女性ラッパーの性的言説も一様にフェミニスト的であるわけではない。」

ラップ・ミュージックにおいて、ある種の表象や主体が支配的個別性を持っているとしても、それを全体化することはできない。たとえば、「ラップを男らしさの再確認と定義すれば、男性性と異性愛が同一視されてしまうととも、女性がヒップホップへ見出してきた歓びと、一貫した貢献を、無化することになってしまう」だろう。必要とされるのは、ラップ・ミュージックがその内に抱え込んできた差異や矛盾を顕在化させていくことであり、そのためにも、「我々は基本的に、セックス、性差別、暴力への議論を減らすのではなく、増やさねばならないのである。」

このように、ラップ・ミュージックにおける差異や矛盾を聴き取ってこ

うとするローズの議論は、「白人フェミニズムと黒人女性ラッパー」の関係にまで及んでいく。ローズは、MCライトやソルト・ン・ペパやクween・ラティファといった黒人女性ラッパーとの対話において、「フェミニストとレッテルを貼られることへの彼女たちへの不快感」を見出している。そしてローズは、これに対して一定の理解をしめす。むしろローズは、白人中心的なフェミニズムに対して、「自己本位のその運動は、人種を無視してきたし、それに対するバックラッシュの歴史にも、無知を通してきた」と辛辣である。(白人)フェミニストに対する女性ラッパーたちの嫌悪は、理由なきものではない。「黒人女性は、黒人としての彼女たちの境遇に係わる具体的な理由から、フェミニズムを拒否している」のであり、これはまた、「黒人男性と女性を対立させようとする、人種差別社会の拒否」でもある。

こうした社会状況が続くならば、人種を越境したかたちでシスターフッドを形成することは難しい。いいかえれば、女性アイデンティティに立脚した一枚岩の主体を形成することは、人種や階層の問題を無視し、抑圧的にはたらきうる。さらには、「白人フェミニストがMCライトに言えることも、やはり紙のように薄い」とすら、いえてしまうだろう。

フェミニズムがこうした批判に直面するかたわらで、女性ラッパーたちは性差別批判を繰り広げ、また、黒人男女を対話へと誘い続けている。彼女たちは、みずからの実践と(白人)フェミニズムとを区分する。彼女たちにとって、みずからがおこなっているのは、「黒人男性オーディエンスとラッパーとの親密なコミュニケーションを築くいっぽう、若い黒人女性オーディエンスを励まし、助言してやれる運動」である。ナインティ・ナインによって『ブラック・ノイズ』のために贈られた曲「ここにはいないブラザーたちへ(For The Brothers That Ain't Here)」は、その端的な例だといえる。女性ラッパーたちの実践は、黒人男性と対話的關係/ダイアロージーをとりむすび、かつ、伝統的な公共空間においては聞かれてこなかった女性たちの声を聴かせようとする、代替的な公共空間のこころみである。こうした女性ラッパーたちの実践に対して、単に「他者に語らせる」のではないかたちで、

フェミニズムはどのように分節化していくことができるだろうか。これは、『ブラック・ノイズ』が発刊された1994年から現在にまでつづく課題である。そしてまた、このような挑発的な問いを打ち出していくローズの議論は、ラップ・ミュージックの性差別主義、そしてフェミニズムの白人中心主義、双方に対して批判的彫琢をせまるものであるといえるだろう。

ここまで見てきたように、ローズの議論は、文化研究者やフェミニズム研究者、またヒップホップになんらかのかたちに関わろうとする者にとって、示唆的なものである。アドルノやフレドリック・ジェイムソンなど、従来の西洋中心的な音楽研究が聴きのがしてきたノイズを、人種やジェンダーなど、輻輳するポリティクスを綿密に捉え上げながら「ブラック・ノイズ」として理論化したその功績は大きい。

しかしその一方で、ラップ・ミュージック研究は、いまだ発展途上にあることもまた、ここに記しておきたい。『ブラック・ノイズ』において示された論点は、更に推し進められることを待つものでもある。

まず指摘できることとして、『ブラック・ノイズ』において論じられた時代状況、またヒップホップのあり方は、現在では、より多様化/複雑化しているということである。ローズ自身が、ヒップホップを、アメリカ社会の時代状況やその文化に沿って説明しようとしたことを考えると、『ブラック・ノイズ』における議論を、現在の、あるいはアメリカ国外のヒップホップにそのまま適用しようとするには、少なくともいくつかの留保が必要となる。

たとえばローズは、ターンテーブルを用いたDJプレイやサンプリングに、「共同体の対抗的記憶装置」としての機能を見いだす。廃棄された機材を用いて、既存のレコード音源をミックスしていくその手法は、音楽という資源を用いることで、旧来の黒人文化において重視された価値観を再演し、また新たに書きなおすものであるとされる。

だが、ヒップホップ黎明期から数十年の時間が経過した今、この議論はど

れだけ現在性をもっているだろうか。現在のラップ・ミュージックにおいては、MPCなどの機材を使って、新たに音源を作り起こす手法がとられることがしばしばである。こうした状況において、黒人文化の「記憶装置」は、どのように位置づけることができるのだろうか。

こうした問題は、グローバリゼーション論などと関連づけてラップ・ミュージックを論じる上でも生じるものである。ここ日本においては、ラップ・ミュージックが聴かれるようになり、30年以上の年月が経つ。特に90年代以降は、日本においても多くのラッパーが登場してきた。社会学者の木本玲一によれば、日本におけるラップ・ミュージックは、グローバル化の進展とともに、アメリカ/本場に追随し対抗しようとする「ローカル化」の時期を経て、必ずしもアメリカ/本場を意識しない「自律化」の時期に入っているという。² 木本が論じるようなラップ・ミュージックのローカルかつ自律的な実践を、黒人の口承伝統や音楽伝統の系譜に位置づけ分析していくことは、はたしてどれだけ妥当なのか。

一方で、ローズの議論は、こうした課題に対して、耐えきれないものというわけでもないだろう。自律化しつつあるラップ・ミュージックにおいても、ローズが論じたようなラップ・ミュージックとさほど変わらない表現形式が用いられていることは、注目に値する。たとえばローズは、ヒップホップのうちに反復と断絶の表現形式を見出し、「フロウ、レイヤリング、ラブチャー」として理論化した。これは、「アフロディアスポラの文化形式に広く散見される」ものとされるが、一方、変化を続けるヒップホップにあって、これらは「まだほとんどのラップ曲に生き続けている」とローズは述べている。実際これらの表現形式は、黒人の手を離れて、あらたな発展を続けている。そこではもはや、「アフロディアスポラの文化形式」や黒人性は、必ずしも意識されるものではない。少なくとも、明示的に参照されはしないことが、ままたるだろう。とすれば、次なる課題は、ヒップホップにひとまず見出されたような黒人文化の形式を、多様化/複雑化をつづけるヒップホップの現在に即した言葉づかいで、新たに理論化していくことではないだ

ろうか。

それはいわば、黒人文化をそこで表象される意味/黒人性のみならず、形式/スタイルに力点をおきながら理解しなおしていく作業である。あるいは、「ブラック・ノイズ」を、諸文化のあいだにおける、文化翻訳の一契機として捉えなおす作業といってもいい。この作業は、アイデンティティ・ポリティクスではなくヘゲモニーの書きかえとしてヒップホップを理解しようとした、ローズ自身の議論にも連なることが期待されるだろう。もしくは、都市生活のテクノロジーと黒人伝統の融合としてヒップホップの発生を把握しようとしたローズの仕事は、この過渡期にあるともいえる。本書記者の新田啓子は、サウンドの分析においては、それに干渉する「社会性」が無視できないことをあとがきで指摘しているが、「ブラック・ノイズ」は、ある意味でそのブラックネスから離れて、文化翻訳の実践のなかにあって「変わっていく同じもの (Changing Same)³」として把握される必要があるのである。

ローズは次のように述べている。「他の誰もが持ち得ないスタイル——つまり、理解するのも消去するのも容易ではなく、常に動き、常に変化する敵に向けた反撃の物語を紡ぐ反射力に優れたスタイル——の開発は、抵抗のコミュニティを強化するとともに、喜びをわかちあう権利を最も効果的に保存する方法だ。」ヒップホップという「他の誰もが持ち得ないスタイル」の実践を、自律化するその現在に内在しながら、どのように理論化するのだろうか。すなわち、「KEEP IT REAL」の呼び声コール&レスポンスに応じるように論じることへと、『ブラック・ノイズ』は繰り返し、わたしたちを挑発し続けている。

Footnotes

- ¹ Butler, Judith. (1997). *Excitable speech: A politics of the performative*. New York & London: Routledge. ジュディス・バトラー. (2004) 『触発する言葉』(竹村和子, Trans.). 東京: 岩波書店.
- ² 木本玲一. (2009) 『音楽文化の現在2 グローバリゼーションと音楽文化 日本のラップ・ミュージック』. 東京: 勁草書房.
- ³ Gilroy, Paul. (1993). *The black atlantic: Modernity and double consciousness*. London & New York: Verso. ポール・ギルロイ. (2006) 『ブラック・アトランティック——近代性と二重意識——』.(上野俊哉, 毛利元孝, 鈴木慎一郎, Trans.). 東京: 月曜社.

Book Review: *Burakku noizu***Shingo HORI**

**Rose, T. (1994). *Black noise: Rap music and black culture in contemporary America*. Middletown: Wesleyan University Press.
(Keiko Nitta. Trans., (2009). *Burakku noizu*. Tokyo: Misuzu shobou)**

Black noise is known as an academic book first dealing with hip hop. The author Tricia Rose is a scholar in American cultural studies engaged in feminism and black culture interdisciplinary. Although some of her academic works have been introduced to Japanese readers through her essays and interviews, *Black noise* is the first Japanese translation of Rose's work. This translation would be valuable both for scholars in the same fields and Japanese hip pop heads, as she has vigorously been engaged with feminism and black cultural studies.

One of the purposes in Rose's *Black noise* is as follows: "*Black noise* examines the complex and contradictory relationships between forces of racial and sexual domination, black cultural priorities and popular resistance in contemporary rap music." Among various hip pop cultures, her main discussion is spared for rap music. Rose tries to find out various aspects of race and gender in American society.

According to Rose, the birth and development of rap music should be discussed in its social and historical contexts. Rap music was not born suddenly from the vacuum space. "Polyvocal languages" narrating ideological, cultural, and sexual struggles, inscribed in rap music, is what she calls "black noise."

Rap music in Rose's view is a product of fusion between African American people's oral and music tradition and the technology used and discarded in the Bronx, New York, in 1970's, such as DJ turntables. However,

Rap music, which is an inseparable means of expression for African American people, is different from mobile identity politics. It attracted attentions by the success of "Rapper's Delight" and Run-D.M.C, and enabled to appeal to thousands of white boys and girls in living in a suburban area, through industrial and commercial circuits and music videos.

Rap music does not reject people's pleasure and participation. Rather, we could say that it would have never grown up to popular music without white people's reception. This may cause a danger of depriving culture and annihilating resistance against racial repressions. For this reason, rap music has appealed for both African American audience and wider contexts dominated by white people, by retaining at least the double structure of its discourse and musical style.

Moreover, in terms of aspects of its discourse, namely, analysis of the lyrics, it is interesting to note what Rose mentions as follows: "Rappers are constantly taking dominant discursive fragments and throwing them into relief, destabilizing hegemonic discourses and attempting to legitimize counterhegemonic interpretations." Although there is no direct reference, it is possible to find out "resigni-fication," as Judith Butler (1997) argues, a possibility of subversion by citation and repetition of the dominant language. Through such resistance in texts, Rose states that rap music sometimes open up the possibility of concession and conciliation. In other words, rap music is understood as a battle which interferes with racial and gender politics and demands to rewrite hegemony.

In these arguments on rap music by Rose which I have outlined so far, we should note that her discussions do not simply end in applause of hip pop and rap music. Emphasizing the tradition of black culture that includes them, she, at the same time, points out problems which cannot

be ignored, such as significant differences and their oppositions existing inside hip hop and rap music. These problems are sexist views represented in rap music, and the oppositions to them is the existence of female black rappers who problematize pains of racial and sexual segregation in a creative manner.

Rose calls rap music's sexism as "tales of sexual domination falsely relief their lack of self-worth and limited access to economic and social markers for heterosexual masculine power." This is used by young African American men, who cannot reap the economic and social benefits and thus do not gain self-affirmation, to console themselves. In order to compensate their lack of financial and social status, it employs heterosexual masculinity. Rap music takes a role of providing those people under repressive social situations with a means of accessing power.

Of course, this does not mean that rap music is essentially sexist. It has also criticized its own sexism. Also, as it represents and repeats the sexism rooted in the American cultural structure itself, this assumption would make rap music into a scapegoat if we attribute these problems only to rap music. Although Rose considers these situations, she strongly criticizes male rappers' excuse for sexism: "I have grown weary of rappers' stock retorts to charges of sexism in rap." Rose thus vigorously finds out the difficulties of rap music as well.

Yet, Rose carefully avoids the binary opposition between male black rappers as sexists and female black rappers as anti-sexists. This scheme can be "the monolith of male sexism and women rapper's opposition to it." Rose points out two problems in this monolith of the resistance.

First, there is a problem of generalizing female rappers as counterbalance of male rappers. According to Rose, female rappers such as Queen Latifah and MC Lyte notice this problem. These rappers as well as Rose

herself are concerned that their anti-sexist discourse may wrongly be appropriated to the anti-racial politics. At the same time, however, the sexism of rap music cannot be ignored. In these obstacles, female rappers have supported male rappers' sexual discourse along with criticizing it in various paradoxical ways rather than directly confronting them.

Second, Rose points out the problem that we cannot account for the paradoxical nature and complexity of rap's sexual dialogism, even if we set women against men in a unified manner. The paradox of the lyrics and discourse in rap music cannot be explained simply by gender. For example, it is possible to consider these paradoxes and differences from the perspective of sexuality. Even in the relationships between women or men, they are also found. While A Tribe Called Quest criticizes date rape, Ice Cube stimulates sexist awareness. YO-YO is unconscious of patriarchy whereas Salt'n Pepa expresses understanding for African American men's predicaments. To sum up, male rappers' sexual discourse is not always sexist, nor is female rappers' discourse feminist.

Even though we consider that a kind of representation as well as subjectivity has dominant individualities, it is difficult to generalize it. For instance, according to Rose, if we define rap as reconfirmation of masculinity, it will lead to understand masculinity as sexuality, and annihilate the pleasure which women find out in hip hop and their consistent contributions. What we need is to reveal the differences and paradoxes rap music contains. For this purpose, as Rose argues, we should fundamentally encourage discussions on sex, sexism, and violence, rather than reduce them.

Discussing these differences and paradoxes in rap music, Rose goes on to discussions on a relationship between white feminism and black female rappers. In dialogues with African American female rappers includ-

ing MC Lyte, Salt'n Pepa, and Queen Latifah, Rose finds out their feeling of discomfort with being labeled as feminists. Rose understands them; she is rather critical to white-dominant feminism, stating that their self-centered movements have neglected human rights and they have been ignorant about a history of backlash. There are reasons for their antipathy toward (white) feminism. African American women reject feminism for specific reasons concerning their situations, and this is also refusal of racist society which attempts to set African American men against women.

If these social situations continue, it is difficult to create sisterhood across races. In other words, the creation of monolithic subjectivity based on female identity may neglect issues of races and classes and thus it works repressively. Furthermore, we could even say that "what white feminists say to MC Lyte will remain paper thin."

While feminism has been confronted with these criticisms, female rappers have developed criticisms against sexism and invited African American men and women to having dialogues. Female rappers separate their actions from (white) feminism. For them, their activities are movements encouraging and supporting young black female audience along with establishing close communication with black male audience and rappers." For the brothers that ain't here," a song from Ninety-Nine for *Black noise*, is a representative example. Female rappers' practices are the attempts to connect African American men with dialogic relationship/ "dialogy" and tell women's voices, which has never been heard traditionally, in an alternative public space. How feminism can segment for these female rappers' practices, not simply by having others tell. This has been a question since 1994 when *Black noise* was published. Rose's discussions which reveal such challenges urge us to elaborate criticisms of rap music's

sexism and feminism's white-centricity.

As we have seen so far, Rose's arguments provide many suggestions with scholars in cultural studies as well as feminism and those who engaged in hip hop in one way or another. It is a great achievement that she theorizes noises, which the existing western-centered music studies, such as Adorno and Fredric Jameson, have failed to hear, as "black noise," by closely considering the congested politics of race and gender.

On the other hand, I would like to state that rap music studies are still yet to be developed. Discussions shown in *Black noise* await for further exploration.

First, I would like to point out that historical situation with which *Black noise* dealt and what hip hop is expected to be have become more diverse and complex. Given that Rose herself tried to explain hip hop along with historical backgrounds and cultures in American society, we should be careful for applying her discussions into our contemporary American hip hop or hip hop outside the United States.

For example, Rose sees "communal countermemory" in DJ plays and samplings used by turntables. This method of using discarded equipment and mixing the existing sound sources from records makes it possible to perform values emphasized in traditional black culture and write it anew by using musical resources.

However, at the present moment after a few decades since the dawn of hip hop, to what extent is this view valid? Rap music nowadays often creates a new sound by using equipment such as MPC. In this situation, where can we place memory storage of black culture?

The same question occurs in discussing rap music in relation with globalization. It has been more than thirty years since rap music was accept-

ed by Japanese audience. There appeared a number of Japanese rappers since 1990's. According to Reiichi Kimoto (2009), a sociologist, Japanese rap music has now reached a stage of autonomy, in which they are not always conscious of the United State as a place of its origin, after a period of localization, in which they followed and opposed to it, as globalization has been advanced. How valid the method of placing the local and autonomous rap music which Kimoto discusses into the black oral convention and music tradition could be?

It is possible to consider that Rose's arguments are valid for these issues. It deserves attention that autonomous rap music also employs a similar form of expression to that in Rose's discussions. For instance, Rose finds out a form of repetition and disconnection in hip hop and theorizes it as "flow, layering, and rapture." She states that this is often found in cultural forms of Afro-diaspora and still used in most of the rap music which has always been changing. In fact, these forms of expressions have newly been developed, having left the hand of African American people. The cultural forms of Afro-diaspora and the blackness here is no longer noticeable at all times; at least, it sometimes happens that they are not clearly referred. If so, our next challenge would be to create a new theory for forms of black culture found in hip hop, by using vocabulary appropriate for the present hip hop, which continues to become diverse and complex.

In other words, this is a task of understanding black culture with focus on its form and style as well as its representations. Or, we could see "black noise" as a starting point of cultural translation in various cultures. It is expected to make further contribution to Rose's arguments in which she attempts to understand hip hop not as identity politics but as rewriting of hegemony. As she sees the origin of hip hop as a mixture of the Afri-

can American tradition and technologies of city life, her work can be placed in this transition period. The translator of this book, Keio Nitta, points out that we cannot ignore its sociality in analyzing sounds. “Black noise” should be understood as “changing same” (Gilroy, 1993) in practices of cultural translation, in a sense apart from its blackness.

Rose states that invention of the style that no one can achieve is the most effective way to preserve a right to share pleasure as well as strengthening a resisting community. This is a reflexive style of narrating stories of counterattack against ever-moving and ever-changing enemies, rather than understanding or erasing them. Developing a style nobody can deal with — a style that cannot be easily understood or erased, a style that has the reflexivity to create counterdominant narratives against a mobile and shifting enemy — may be one of the most effective ways to fortify communities of resistance and simultaneously reserve the right to communal pleasure. “How can we theorize practices of hip hop as the style that no one can achieve? Black noise continually challenges us to discuss voices of “KEEP IT REAL” in call and response.

References

- Butler, J. (1997). *Excitable speech: A politics of the performative* (K. Takemura, Trans.). New York: Routledge.
- Gilroy, P. (1993). *The black atlantic: Modernity and double consciousness* (T. Ueno, Y. Mouri, & S. Suzuki, Trans.). Cambridge: Harvard University Press.
- Kimoto, R. (1993). *Ongaku bunka no genzai 2: Gurobarizeisyon to ongaku bunka: Nihon no rappu myujikku*. [Modern music culture 2: Globalization and music culture: Rap music in Japan.] Tokyo: Keiso Shobo.

ワンデー・レクチャーシリーズ報告
HIV/エイズに見る日本・アジア ―越境するセクシュアリティ―
2011年10月10日（月・祝）
加藤悠二
ジェンダー研究センター 研究所非常勤助手

国際基督教大学ジェンダー研究センター(CGS)では、「HIV/エイズに見る日本・アジア ―越境するセクシュアリティ―」(Re-visiting “Japan” and HIV/AIDS: Japan in Asia, Asia in Japan) と題するワンデー・レクチャーシリーズを、Living Together 計画（詳細は後述）の協力のもと、東ヶ崎潔記念ダイアログハウスにて開催した。このレクチャーシリーズは、本学学部生がメインターゲットではあるが、学外からの参加者も多く参加できるよう、祝日ながらも授業開講日にあたる10月10日（月・祝）に開催。3つのセッションとランチタイム・レセプションで、のべ310名が参加した。当日のプログラムは下記の通りである。

10:00-11:20 セッション1

「HIV/エイズとアジア情勢：当事者の視点から」

講師：羽鳥潤

日本HIV陽性者ネットワーク・ジャンププラス (JaNP+) 国際部門
アジア・太平洋地域HIV陽性者ネットワーク (APN+) 日本代表

11:30-12:40 セッション2

「HIV陽性者と向き合う：医療・支援の現場から」

講師：沢田貴志

(認定)特定非営利活動法人 シェア=国際保健協力市民の会 副代表理事
港町診療所 医師

12:40-13:40 ランチタイム・レセプション

「Living Together in ICU」

手記朗読：磯部仁沙（ICU 学部生）、川目漱一郎（ICU 学部生、横浜 Cruise ネットワーク）

ライブ：サトウリュースケ

司会：ジャンジ（Living Together 計画スタッフ、非営利団体 akta 代表）、加藤悠二

13:50-15:00 セッション3

「日本・アジアにおける MSM（Men who have Sex with Men: 男性と性的接触を持つ男性）の現状」

講師：市川誠一

名古屋市立大学 看護学部 看護学科 教授

厚生労働省エイズ対策研究事業「MSMのHIV感染対策の企画、実施、評価の体制整備に関する研究」研究代表者

それぞれのセッションの詳細については、講師の皆様にも講演要旨をお寄せ頂いているため、ここでは紙幅を費やさない。この記事では、上述の構成でのレクチャーシリーズを開催した背景と成果について、また、ランチ・タイムレセプションとして開催された「Living Together in ICU」（以下「LT in ICU」）についてを報告したい。

1. レクチャーシリーズ実施の背景とその成果

本レクチャーシリーズは、2011年2月に「民族学地域研究」（CGS運営委員・森木美恵教授が担当する人類学メジャー専攻科目）と共催で開催したセミナー「HIV/エイズを考える一病の他者化への抵抗」を引き継ぐイベントとして企画された。ジェンダー/セクシュアリティの領域に深く関わるHIV/エイズの問題を概観するために、学際的に疫学研究を行っている新ヶ江章友

氏（名古屋市立大学）に、日本におけるHIV/エイズの感染動向とこれまでの研究のレビューを、HIV陽性の当事者としてスピーカー活動を行っている桜井啓介氏（ぷれいす東京、JaNP+）に、HIV陽性者から見る日本社会のあり方をお話し頂いた。

当初、2011年度は「HIV/エイズを考える」から地域枠組みを拡大し、アジア全域におけるHIV/エイズの問題を考えるレクチャーシリーズとして、アジア諸国から1～3名程度の専門家を1週間招聘し、滞在期間中にミニレクチャーを複数回開催する形式を企画していた。しかし、3月11日の東日本大震災を受け、国外からの招聘者を迎え入れることへの見通しが立てられないことから、招聘者を国内からお迎えするかたちへと、企画内容の変更が余儀なくされた。

そのような経緯を経て企画された本レクチャーシリーズの大きな目的は、HIV/エイズという視座を通じて、「国内におけるアジア」にフォーカスをあてることであった。過去に開催されたCGSの国際ワークショップでは、アジア諸国からアクティビストや研究者を招聘する一方で、日本国内における国籍・人種多様性には目が向けられることが少なかった。前年度のイベントで試みた「病の他者化への抵抗」と同時に、「アジアの他者化への抵抗」を試みることで、大きな目的として掲げられたのである。

今回お招きした講師の方々は、国内外に広くネットワークを築いているHIV陽性者団体のメンバーである羽鳥氏、NGOを通じた東南アジアでの支援経験を持ち、日本国内での外国人医療に従事している医師である沢田氏、そして日本国内でのMSM対策をリードし、アジア各国との連携も進めてきた疫学研究者である市川氏と、活動の基盤は日本に置きながらも、アジア諸国との連携も同時に図ってきた面々である。アジアにおけるHIV/エイズは、全般的には女性のHIV感染者が増えている一方で、日本ではMSMでの感染者が増えているという感染動向の違いがある。また、性への忌避感などの文化的な差異や、医療費や健康保険制度などの政治的・経済的格差などもある

ため、感染の拡大への対策や、陽性者支援の方針は、一概に同様のプログラムを適用することはできない。しかし、羽鳥氏からの報告にもあった通り、ICAAP10（The 10th International Congress on AIDS in Asia and the Pacific: 第10回アジア・太平洋地域エイズ国際会議）では、アジア太平洋地域におけるKAPs（Key Affected Population: HIV感染や影響を受けやすいと思われる）として、PUD（People who Use Drugs: 薬物使用者）、セックスワーカー、MSMとトランスジェンダー、移民労働者が挙げられており、多様なかたちでの対応策が求められている。例えば、沢田氏がタイの農村で実践してこられた、HIV陽性者の参画を伴うスティグマ軽減のためのアクティビティと、HIV陽性者への差別・偏見が低減して初めて感染拡大に歯止めがかかったという事実は、他国でも参考すべきものだろう。また市川氏によれば、日本の先進的な医療技術はもちろんのこと、ゲイ・コミュニティのなかで育まれてきたLiving Together計画のメソッドもまた、アジアの他の地域からも有用なものとして注目を集めつつあるという。今回のレクチャーシリーズは、今後も予測されるHIVの感染拡大に対応するためには、地域・国家の枠を超えた活動と知見の交換、HIV/エイズと周辺領域へのスティグマの低減などが求められていることが、重層的に共有される機会となったと考えられる。

2. 「Living Together in ICU」実施の背景とその成果

LT in ICUは、ゲイ・コミュニティに根ざした活動から生まれた運動を大学教育の場に導入し、HIV/エイズに関するリアリティを共有することを目的に企画された。この開催にあたっては、Living Together計画（以下「LT計画」）にご協力を頂いている。LT計画とは、「We are already Living Together（HIVを持っている人も、持っていない人も、もうすでにわたしたちは一緒に生きている）」をコンセプトに、NPO法人ぷれいす東京と、非営利団体aktaが呼びかけ団体となった活動である。前者はHIV陽性者とパートナーや家族、友人など周囲の人々のサポートをおこなってきたCBOであ

り、後者は新宿2丁目で**community center akta**を運営し、拠点事業及び、アウトリーチ事業、啓発普及事業等をゲイ・コミュニティに根ざしたかたちで展開してきた団体だ。

LT計画ではそのコンセプトを広く共有するために、HIV陽性者やその周囲の人々に執筆をお願いした手記の収集と、その朗読を取り入れたイベントをさまざまなかたちで展開してきた。なかでも新宿2丁目の**club Arch**で毎月第一日曜日を基本に開催している「**Living Together Lounge**」は、2012年2月時点で86回を数える。3名の参加者が手記朗読をし、それを読んだ感想をシェアするリーディングと、ゲイ・コミュニティを中心に活躍するアーティストによるライブが展開されるこのイベントには、毎回様々な観客が足を運んでいる。HIV/エイズを普段身近に感じることの少ない人は、身近に感じている人々の手記を聞くことでリアリティを感じることができる。また、身近に感じている人にとっても、改めて他の人の手記や、それを読んだ人の感想を聞くことによって、より立体的な理解を得ることができる機会となっている。

LT in ICUを企画するにあたっては、ぷれいす東京専任相談員の生島嗣氏には構成と手記選定を、akta代表の荒木順子氏には構成とライブアクト選定、当日の司会をお手伝い頂いた。時間的制約もあることから、手記朗読は2名に絞り、ICU学部生の磯部仁沙さんと、同じく学部生で横浜**Cruise**ネットワーク（神奈川県でのMSM向けHIV/エイズ等性感染症の予防・啓発事業や、かながわレインボーセンター**SHIP**の運営を行う団体）のメンバーでもある川目漱一郎さんをお願いした。また、ライブアクトには、「機材面の理由から、弾き語りができる方」「ICUの学部生が親しみを持ちやすい年齢・キャラクターの方」という基準のもと、過去LT Loungeへ3回の出演経験を持つサトウリュースケ氏をお招きすることとなった。

LT in ICUは、一般教養科目「日常生活とジェンダー」の授業内に組み込まれたこともあり、会場となったダイアログハウス2階の中会議室フロアに

は、100名を越える来場者を迎えた。海外でHIV/エイズを身近に感じたことのある磯部さんの体験談や、HIV陽性者であることをカミングアウトする手記に、自身がゲイであることをカミングアウトする意味を重ね合わせる川目さんの体験談は、参加者に静かに受け入れられていたように思う。続くサトウ氏のライブは会場の雰囲気や、磯部さん・川目さんの話を聞いて緊張した心を和ませ、投げかけられたメッセージをやわらかく受容することをサポートしている様子が見られた。

ここで筆者にとって印象的だったのは、手記朗読の感想のなかで語られた「エイズがうつったかもしれない」という表現である。エイズとは、HIVに感染して免疫力が下がった結果、指標疾患を発症した場合に診断される症状のことであり、エイズ自体はうつるものではない。そのため、「エイズがうつる」という表現は知識としては正確ではないし、参加者から「HIVとエイズの区別もついていない状態で、**Living Together**と言われても説得力がないし、傷ついた」といった趣旨の感想が見られたことも事実である。反面、HIV/エイズをこれまで身近に感じる機会がなかった参加者からは、

「『エイズがうつったかもしれない』と不安に思ったことのある人が、同じキャンパスのなかにいると考えたこともなかった」

「エイズがうつることは怖いと思っていたが、手記朗読を聞いて、うつったとしても、これまで通りに生きていけることがわかった」

といった感想も多く聞かれていたことから、**Living Together**のメッセージが強い共感をもって伝わっていることが推察される。また、

「テレビCMやポスターなどから『エイズは怖いもの』というイメージばかりを受け取っていたため、余計に『自分とは関係ないもの』と遮断していたことに気がついた」

という声も多数聞かれた。このようなかたちで、多くのICU学部生にとっては、HIV/エイズに関する知識もリアリティも、それを共有する機会も持ち得るものではなかったのだ、という「リアリティ」を体感できたことは、大きな収穫であったように思う。

今回のLT in ICUでは、時間的な制約があることもあり、HIV/エイズに関する基礎知識はほとんど盛り込むことなく、リアリティを共有することを第一目的として開催した。今後ICU内で学部生を主な対象として開催できる機会には、司会の時間を長くする、トークゲストとして専門家を招く、あるいは参加型のワークショップ形式で開催するなど、リアリティの共有と基礎知識の獲得が同時に促される形式も試みたく思う。

付記

今回のレクチャーシリーズとLT in ICUの会場となったダイアログハウスは、私たちCGSの活動を最初期から応援していただき、2011年6月に逝去された本学職員、故・相坂保盛氏が建設に深く関わり建てられたものである。私にとってこのイベントを企画・開催することは、HIV/エイズの予防啓発活動にも深く関わりを持たれていた故人との対話の機会でもあった。故人がこのイベントを天国で喜んでくださっていることを願いつつ、安らかな眠りにつかれておられることをお祈りしたい。

Report: One-day lecture series
Re-visiting "Japan" and HIV/AIDS: Japan in Asia, Asia in Japan
Monday, 10th, October, 2011
Yuji KATO
Center for Gender Studies, Research Institute Assistant

Center for Gender Studies (CGS) at International Christian University held a one-day lecture series titled "Re-visiting 'Japan' and HIV/AIDS: Japan in Asia, Asia in Japan," in cooperation with Living Together Plan (discussed below), at Kiyoshi Togasaki Memorial Dialogue House. Although we intended for ICU students to be the main participants, we had this lecture series on a national holiday (while classes were still held at ICU), so that people outside the university may join. There were 310 participants in total for all three sessions and the lunch-time reception. The program was as follows:

10:00-11:20 Session 1

HIV/AIDS in Asia

Lecturer: HATORI Jun

International Division, Japanese Network of People Living with HIV/AIDS (JaNP+)

Delegate from Japan, Asia-Pacific Network of People Living with HIV/AIDS (APSN+)

11:30-12:40 Session 2

Field Report from Medical Circle

Lecturer: SAWADA Takashi

Services for the Health in Asian and Regions (SHARE)

Doctor, Minatomachi Medical Center

12:40-13:40 Lunch-time Reception

Living Together in ICU

Reading: ISOBE Misa (ICU Undergraduate), KAWAME Soichiro (ICU Undergraduate, Yokohama Cruise Network)

Musical Performance: SATO Ryusuke

MC: JohnJ (Living Together; Nonprofit Organization, akta), KATO Yuji

13:50-15:00 Session 3

MSMs (Men who have Sex with Men) in Japan/Asia

Lecturer: ICHIKAWA Seiichi

Professor, Nagoya City University, School of Nursing

Chief Researcher, Study Group on the Development of Community-based HIV Prevention Interventions for MSM, Funded by a Health and Labor Science research Grant

I will not devote too much space here for describing the details of each session, as lecturers have also contributed their reports to this journal. Instead, I will discuss the background and achievements of this lecture series and lunch-time reception “Living Together in ICU” (hereafter, LT in ICU).

1 Background and Achievements of Holding the Lecture Series

This lecture series was prepared as a sequel to the seminar, “Thoughts on HIV/AIDS: Resistance against the Otherization of the Disease,” which was cohosted by Area Studies in Ethnology and spear-headed by MORIKI Yoshie, an Associate Professor at ICU and CGS Steering Committee

Member. In order to address issues of HIV/AIDS deeply related to gender/sexuality, several guest speakers made presentations: Mr. SHINGAE Akimoto (Nagoya City University), who has engaged in interdisciplinary immunization research, gave a talk on HIV/AIDS infection trends in Japan and review of his past studies; Mr SAKURAI Keisuke (PLACE TOKYO, JaNP+), who has conducted speech activities as a HIV positive, lectured on the ideal Japanese society from the viewpoint of HIV positive people.

At first, we were organizing a lecture series on issues of HIV/AIDS across Asia, by expanding the regional framework of thoughts on HIV/AIDS. We also planned to invite a few researchers from Asian countries for a week and ask them to give mini-lectures during their visit. However, due to the Great East Japan Earthquake, which struck on March 11th, 2011, it became difficult to invite lecturers from overseas and we had to change contents of the project, inviting researchers residing in Japan instead.

One of the major objectives of this lecture series was to focus on the presence of Asia in Japan through the perspective of HIV/AIDS. Although past international workshops held by CGS invited activists and scholars from Asian countries, diverse nationalities and races in from within Japan were not focused on. Thus, our major goal remains resistance against the otherization of Asia, as well as resistance against the otherization of the disease, just as we did in the last year's seminar.

The lecturers invited for the lecture series include Mr. Hattori, a member of the group of HIV-positive people, Mr. Sawada, who has experience working with NGOs in Southeast Asia and provides medical care to foreigners in Japan, and Mr. Ichikawa, a scholar in immunization research who leads measures for MSMs inside Japan and promotes cooperation with Asian countries. All of them have been engaged in working with various countries in Asia, even though their activities are based in Japan.

As for current situation in HIV/AIDS in Asia, the infection trend in Japan is different from other Asian countries: The number of HIV carriers among MSMs has increased in Japan, while that of female infected patients has risen in general. It is also difficult to employ the same medical care programs for HIV carriers because of cultural differences such as avoidance of sexual matters and disparities in medical expenses and insurance systems. However, as Mr. Hatori reports that ICAAP10 (The 10th International Congress on AIDS in Asia and the Pacific) requires measures in diverse ways for PUD (People who Use Drag) such as sex workers, MSMs, transgender people, and itinerant laborers in the Asia-Pacific region as KAPs (Key Affected Populations). For example, other countries should learn from Mr. Sawada's activities with HIV-positive people in order to reduce the stigma against them in agricultural villages in Thailand and the fact that the spread of infection abated only after the discrimination and the prejudice against HIV-positive people was reduced. Moreover, according to Mr. Ichikawa, not only Japan's advanced medical techniques, but also our methods of Living Together cultivated in gay communities have been seen as beneficial and has gradually attracted attention from other Asian districts. I believe that this lecture series provided participants with an opportunity to share ideas and realize that we need activities across districts and nations, and an exchange of knowledge, reduction of stigma against HIV/AIDS and its peripheral areas.

2 Backgrounds and Achievements of Living Together in ICU

We planned LT in ICU in order to share the reality concerning HIV/AIDS by introducing activities rooted in gay communities to a place of university education. This event was held in cooperation with Living

Together Plan (hereafter, LT Plan). LT Plan is an activity started by Incorporated NPO PLACE TOKYO and NPO akta, under the concept that "We are already Living Together" (regardless of whether one is an HIV carrier or not). The former organization is a CBO, supporting HIV-positive people and people around them such as their partners, family, and friends. The latter has organized the community center akta in Shinjuku Nicho-me, and engaged in outreach and enlightenment activities based in gay communities.

Living Together has collected memoirs by HIV-positive people and people around them and organized various events including readings of these memoirs. As of February 2012, LT Lounge had 86 sessions held at the club Arch on the first Sunday of every month in Shinjuku Nicho-me. This event includes readings of memoirs by three participants, sharing comments, and musical performance by artists active in gay communities and has attracted diverse audiences every time. People unfamiliar with HIV/AIDS can feel a sense of reality by listening to the memoirs by those familiar with these issues. Also, even for people familiar with HIV/AIDS, this provides them with an opportunity to gain more a substantial understanding by hearing other people's writings and the audience's comments about them.

In order to set up LT in ICU, we asked for support from Mr. IKUSHIMA Yuzuru, a staff consultant at PLACE TOKYO, regarding the organization and selection of memoirs, and Ms. ARAKI Junko, a representative of akta, for the selection of a musical performer and MC. Due to time constraints, we chose two readers: Ms. ISOBE Misa, an ICU undergraduate student, and Mr. KAWAME Soichiro, an ICU undergraduate, and a member of Yokohama Cruse Network (a group organizing Kanagawa Rainbow Center SHIP and conducting enlightenment campaigns for preventing

STIs such as HIV/AIDS among MSM in Kanawaga Prefecture). As for a musical performer, we invited Mr. SATO Ryusuke, because he can sing and play the acoustic guitar without any equipment and because we believed that ICU students would feel closer to him due to his age and friendly character. Mr. Sato also has had experience of performing on stage at the LT Lounge three times previously.

As it was part of General Education course, "Gender in Everyday Life," LT in ICU welcomed more than 100 participants at the conference room in Dialogue House. I believe that the audience calmly accepted Ms. Isobe's experience of feeling HIV/AIDS closer to her in a foreign country, and Mr. Kawame's identification of his coming-out as a gay with the memoir writer's coming-out as an HIV carrier. The following musical performance by Mr. Sato eased the tense atmosphere of the stage and audience members' hearts after the reading by Ms. Isobe and Mr. Kawame, and helped them to understand their messages in a flexible way.

What I was struck with then is the expression that "I might have been infected with AIDS," written in the memoirs. AIDS is a symptom diagnosed when the person has developed the AIDS defining illness as a result of HIV infection and the following compromised immune system. Therefore, AIDS is by no means an infectious disease, and the expression, "infected with AIDS," is not accurate. Indeed, we received a comment that Living Together was not convincing at all without a correct understanding of what HIV is and what AIDS is, and one of the participants says that he/she even felt hurt. On the other hand, the participants who were unfamiliar with HIV/AIDS so far comment as follows:

"I never imagined that there were students on campus who were worried that they might have been infected with AIDS."

"I was afraid of being infected with AIDS, but after hearing the memoirs,

now I understand that we can live same as usual, even after being infected.”

This feedback seems to show that they received and sympathized strongly with messages of Living Together. Moreover, we also heard many voices from the audience as follows:

“I realized that I have been shut myself off from AIDS as something little to do with myself, since I have got impressions from TV commercials and posters that AIDS is a horrible disease.”

This is also one of the achievements for me to feel a sense of reality that most ICU students have few opportunities to share the knowledge and the reality of HIV/AIDS.

LT in ICU mainly aims to share the reality without introducing basic knowledge of HIV/AIDS because of time constraints. For the next time, if we organize another event mainly targeted for ICU undergraduates, I hope we will try to encourage the students to gain a basic knowledge of HIV/AIDS as well as sharing the reality, by using a more lengthy amount of time for MC, inviting specialists as guests for a talk, or holding participatory workshops.

Notes:

Dialogue House, where this lecture series and LT in ICU took place, was built with the cooperation of the late AISAKA Yasumori, ICU staff. He had supported our activities at CGS since the earliest period, but sadly passed away in June 2011. Organizing and holding this event was an opportunity for me to have many dialogues with him, as he was deeply involved in enlightenment activities for HIV/AIDS prevention. I pray his soul may rest in peace and wish that he would look down on these events from heaven and be delighted with our achievements.

HIV/エイズとアジア情勢：当事者の視点から

羽鳥潤

日本HIV陽性者ネットワーク・ジャンププラス（JaNP+）国際部門

アジア・太平洋地域HIV陽性者ネットワーク（APN+）日本代表

アジアの流行の現況

- ・アジアでのHIVの新規感染（2009年現在）：20%減 →（2001年との比較）
- ・カンボジア、インド、ミャンマー、タイなど東南アジア、南アジア地域ではセックスワーカーなど性を売買する人口層への対策が進み、感染率が大きく低下している
- ・小児層の感染が減少（2009年現在）：15%減 →（2006年との比較）
- ・抗レトロウイルス治療（ART）のアクセス数は3倍増。反面、治療（抗ウイルス療法）を必要としている人たちの6割に手が届いていない →ユニバーサルアクセスの達成にはまだほど遠い現実にある
- ・世界的な経済不況の影響から国内、国際的な資金の流れが滞り、高い感染リスクにさらされているキーポピュレーション（KAPs）への対応に遅れ →国際的資金に依存している国々（中国、マレーシア、パキスタン、サモア、タイなど）への深刻な影響、KAPsへの予防対策は南アジアで8%、東南アジアでも20%程度の普及にとどまっている

ICAAP（アジア太平洋国際エイズ会議）とは？

- ・“International Congress on AIDS in Asia and the Pacific”
- ・HIVの流行が懸念されているアジア、太平洋地域の問題を扱うための会議（International AIDS Conference:「国際エイズ会議」とは別に開催されている）
- ・市民グループが主導し、開催都市が協力して行う「コミュニティが主役」のイベント
→専門職の技術者、学識経験者だけでなく、HIV/AIDS問題と取り組むさまざまな分野の関係者、HIV陽性者が一緒に参加できる点に特徴がある

第10回ICAAP釜山レポート

- 2005年以来の東アジアでの開催であった（韓国では初開催）
- 参加国65カ国、公式発表による参加者数は約3,000名
- "Diverse Voices, United Action"
→さまざまな声を集めて一致団結して行動しようというスローガンで開催された
- MSMにスポットを当てた構成
→プレナリーセッションで当事者たちが発言、活発化するアジアの多様なネットワークを感じた
- 市民社会の協力が得られず 国内メディア（韓国）による報道も少ない結果に終わってしまった
- 韓国政府の対応をめぐり、参加者から抗議デモが発生
→ KAPs (Key Affected Population) が積極的に関与できないことに対する不満、活動家たちが "Nothing about us without us" に込めた抗議のメッセージ、"無理解" の厳しい現実に直面した感の強い大会となった

鍵を握る KAPs (Key Affected People)

アジア太平洋地域で HIV リスクの感染や影響を受けやすいと言われているのは以下のグループである

- PUD (People who use drugs: 薬物使用者)
- セックスワーカー
- MSM (Men who have Sex with Men) & トランスジェンダー
- 移民労働者
→それぞれのグループが、男性をパートナーにもつ"女性"と直結している

<リスクの背景にあるもの>

KAPsに対する

- スティグマ、偏見、差別→コミュニティや血縁社会からの孤立

- ・法律による処罰や犯罪化→サービス利用への妨げ
- ・低年齢層へ拡大→大半が25才以下の青少年であり、予防プログラムの機能が低下が著しくリスクを高めている

新時代へ向けた発想の転換を

New UNAIDS report shows HIV epidemic at critical juncture in Asia-Pacific region

新規感染者は 複数のKAPsに集中している

HIV感染の低年齢化が進んでいる（メインは25才以下）
 これまで感染率の低かった国でも感染が広がっている

IT技術を利用した情報インフラの整備

IT技術+国際協力によるアプローチ

例) AIMSS2010（2010年1月）

アジア地域でのMSMを対象とした大規模なOnline Survey

約1万人が参加、9言語対応で利便性を追求

HIV陽性者からの回答が予想外に多い結果→

リアルタイムでの実施で現状が「見える」

KAPsからの情報収集

ネット世代の価値観や行動範囲の把握

アジアが目指すべきもの

国境を越えたネットワークの構築

法規制/非犯罪化による効果

ネットワークの一員である粕という自覚が社会に対する連帯感、共感を高揚
 支援、サポートと同時に、積極的に自立意識を芽生えさせる

Youth Generationへのアピール

HIV/AIDS in Asia

Jun HATORI

**International Division, Japanese Network of People Living with
HIV/AIDS (JaNP+)**

**Delegate from Japan, Asia-Pacific Network of People Living with
HIV/AIDS (APN+)**

Current Asian Trends

- The incidence of new HIV infections in Asia (as of 2009): 20% reduction (compared to 2001)
- In Southeast Asian countries such as Cambodia, India, Myanmar, Thailand and in South Asia, measures were implemented towards sex workers and others in the demographic group of those involved in sex trafficking and as a result the infection rate greatly decreased.
- Infections in the child demographic decreased (as of 2009): 15% reduction (compared to 2006)
- Access to Antiretroviral Treatments (ART) increased threefold. But on the other hand, 60% of people needing Antiviral Therapy did not receive it; achievement of universal access is still far from reality at present.
- Due to the poor state of the world economy, the flow of funding from both Japanese institutions and international organizations is backlogged. Support for Key Affected Populations (KAPs) who are at high risk of infection is delayed. Countries that rely upon international aid (China, Malaysia, Pakistan, Samoa, Thailand, etc.) have been severely affected. Preventative measures for KAPs in South Asia have remained at 8% and in South East Asia have remained at 20%.

What Is ICAAP (International Congress on AIDS in Asia and the Pacific)?

- "International Congress on AIDS in Asia and the Pacific"
- This congress's purpose is to deal with the issue of the HIV epidemic causing concern for the Asia-Pacific Region
(The International AIDS Conference is held separately)
- Citizen's groups lead the initiative, and the community plays the leading role in this event, which takes place with the cooperation of the city in which it is held
→ The salient feature of this event is that participation is not limited to professional technicians, and academic experts but includes those in each field related to the issue of HIV/AIDS as well as those infected with HIV.

The 10th ICAAP Pusan Report

- The first event held in East Asia since 2005 (held for the first time ever in Korea)
- 65 countries participated, and according to official announcements, the number of participants reached around 3,000 people
- "Diverse Voices, United Action"
- The event opened with this slogan, inspiring participants to gather with their different voices and move forward as one group.
- It focused on MSMs
- many MSMs' remarks at the plenary session demonstrated the diversity of networks active in Asia.
- Due to the lack of cooperation with civil society, it received little media coverage in Korea.
- Some participants conducted a demonstration against the Korean government for its poor support.

→ The meeting faced the harsh reality of incomprehension, addressing the participants' frustration about the fact that KAPs cannot get involved in issues actively, and the activists' voicing of their message of protest: "Nothing about us without us."

Holding the Keys: KAPs (Key Affected People)

The groups in the Asia-Pacific Region who are considered most at risk to be affected by HIV or infected with HIV infection are as follows:

- PUD (People who use drugs)
- Sex Workers
- MSMs (Men who have sex with men) & Transgendered people
- Migrant workers

→ Each group is linked with women who have male partners.

<Some Background Concerning Risk>

Against KAPs:

- Stigma, prejudice, segregation causes them to be isolated from communities and societies based on blood-ties.
- Punishment by law and criminalization prevents them from utilizing services.
- The spread of infection to younger generations

→ Most of them are below 25 years old, and ineffective programs of prevention remarkably increase risks.

Changes in Policy That Looks Towards New Era

Toward Zero Newly Infected People in Asia and the Pacific

- We need to recognize the urgency of the present efforts of securing funds in order to prevent future economic losses.

- There is a pressing need to encourage effective prevention, treatment, care support for KAPs.

New Report from UNAIDS

("HIV in Asia and the Pacific: Getting to Zero") shows HIV epidemic at critical juncture in the Asia-Pacific region

- A number of newly infected persons was found to be concentrated in KAPs.
- The spread of HIV to the younger population is progressing (mainly below 25 years of age)
- Even in countries which up to now had a low infection rate, the rate of infection is rising.

Using IT Expertise to Improve the Structure of the Flow of Information

- Approaches using both IT Expertise and International Cooperation

Example: AIMSS2010 (January, 2010)

- Took a large-scale online survey of MSM in the Asian Region
- Had approximately 100,000 participants; usage sought in 9 different languages
- The number of answers from HIV-positive people were much larger than expected; the effect of real-time administration of the survey lead to "being able to see" the current situation
- Collection of data from KAPs
- The values of the internet age and the range of comprehension

Goals Asia Should Strive for

- Construction of a network that goes beyond country borders

- Use legislation and decriminalization for improvement
- Edify their awareness of a sense of community and empathy towards society, as a member of the network
- While providing support, actively sow the seeds of independent consciousness
- Appeal to younger generations

HIV陽性者と向き合う：医療・支援の現場から

沢田貴志

(認定) 特定非営利活動法人 シェア=国際保健協力市民の会 副代表理事
港町診療所 医師

1994年に東北タイの農村でエイズへの取組みが始まったとき、多くの住民にとってエイズは「どこか遠い町の他人の病気」でしかなかった。既に数人の村人が発病し始めていたにもかかわらず、人々はこの病気につけられたネガティブなイメージを恐れて、発病した仲間を自分とは別の存在であると考えることに腐心した。

こうして人々はエイズについて語ることを避け、検査に行くことなく発病し、命を落としていった。巧妙なウィルスは人々を分断し差別を植えつけることで、効果的に勢力を拡大していった。

村人達と私達のこのウィルスに対する取組みは、この病気が「私達の病気」だと認識することから始まった。生殖活動を行う人間であれば誰もが感染しうる病気であることを認め、自分と地域の仲間がこのウィルスに直面している存在であると位置づけることによって、私達は少しずつ局面を押し戻すことができるようになった。村の健康ボランティアが、学生達が、保育園の保母が、そして小学生達が私達の取組みに加わった。そして次第に存在感を増していったのが、ウィルスを背負って生きるHIV陽性者だった。HIV陽性者が自助グループを結成し、病院の医療に参加した時、治療は改善し地域社会の支援も大きく前進した。陽性者のQuality of lifeが向上したとき、差別は軽減し、予防のためのメッセージも広がった。こうしてタイはアジアで初めて推定HIV感染数を減少させることに成功した。

眼を転じて日本はどうだろう。HIV感染数が増え続けている日本の社会は、エイズをどれだけ自分達の課題として考えているであろうか。国籍・セクシュアリティ・職業など、さまざまな理由をつけてこのウィルスを背負って生きる人々を他者化する中で、人々は分断されウィルスは広がっていく。

セクシュアリティが多様であるという本来の姿を、社会が、そして医療が受け入れなければ、流行の拡大を止めることは難しい。同様に、国籍の違い・在留資格の違いで医療を受けられない人々を作ってしまったら、ウィルスの思うつぼである。

1996年に効果的な治療ART（抗レトロウイルス剤治療）が開発され、日本のHIV陽性者の生命予後は大きく改善した。しかし、言葉や経済的な障壁から治療を受けられない開発途上国出身の在日外国人にとって、エイズは死の病であり続けた。多くの医療機関では、在留資格の切れた外国人がHIV陽性であるとわかると、「日本では何もしてあげられないから帰国をしなさい」と勧めていた。このことは「HIVに感染していることがわかると帰国させられる」といった認識を広げ、在留資格のない外国人の間でHIVのスティグマを深め、外国人の足を検査や治療から遠ざけてしまったのではないかと。多くのHIV陽性の外国人が、重篤な病状になるまで受診しなくなってしまった。

そんな中でもHIVを自分達の問題と捉え、HIV陽性の仲間を支えていく取組みが外国人コミュニティの中にも育っていった。1990年代に日系ラテンアメリカ人達の間で始まり、その後タイ人の間でもグループが形成されている。2002年以降、母国のエイズ医療体制が改善する中で、こうしたHIV陽性者を支える互助の活動によって、多くの命が救われるようになってきた。

当事者自身が支え合うことで問題を乗り越えてきた、エイズをめぐる取組み。私たちの社会はそこから何を学びとることができるのだろうか。

**Field Report from Medical Circle
Takashi SAWADA
(Certified) Services for the Health in Asian & African Regions (SHARE)
Doctor, Minatomachi Medical Center**

In 1994 when we started to engage with AIDS in a farming village of Northeast Thailand, AIDS was nothing but “a disease for other people in a distant town” for most citizens. Even though there were several village people who already developed AIDS, they struggled to consider themselves different from their peers. Thus, people avoided talking about AIDS, developed it without having any tests, and lost their lives. This smart virus effectively extended its influence by dividing people and instilling segregation between them.

We and the villagers began to work on this virus by recognizing the disease as one of our own problems. By admitting the fact that anyone involved in sexual activities can be affected with HIV and thinking that we and our community members were being confronted with the virus, we succeeded in reversing the situation little by little. Health volunteers, students, nursery staff, and elementary school pupils in the village joined in our activities.

Moreover, HIV-positive people living with the virus have gradually taken on an important role. By establishing a self-help group and participating in medical care at hospitals, they improved their condition and advanced further support from local society. Due to the improvement in HIV-positive people’s quality of life, discrimination against them subsided and their messages supporting HIV prevention became widely known. Thus, for the first time in Asia, Thailand succeeded in decreasing the estimated number of HIV carriers.

On the other hand, what is the situation in Japan? There is an increasing number of HIV carriers in Japanese society; to what extent does society think of AIDS as a challenge? By otherizing people with this virus, labeling them with various reasons such as their nationalities, sexualities, and occupations, people become divided and the virus spreads.

Unless society and those practicing medicine accept diversity in sexuality as a natural state, it will be difficult to stop this epidemic from spreading. If we make those who cannot have treatment because of their nationalities and resident statuses, we will end up giving the virus exactly what it wants.

Since 1996, when the effective treatment ART (Anti-Retroviral Therapy) was invented, the life-expectancy prognoses of Japanese HIV carriers have improved greatly. However, AIDS has been a deadly illness for foreign residents in Japan from developing countries who cannot have medical treatment due to linguistic and economic barriers. In many medical institutions, when patients with expired visas turn out to be HIV-positive, medical workers often advise their patients to go back to their home countries because they cannot do anything for them in Japan. This spreads the misconception that we send them back to their countries upon diagnosis of infection with HIV, and it enhances the stigma of HIV among foreigners without residence status. Furthermore, it keeps them from HIV testing and treatment. Many HIV-positive foreigners have not been seen in a clinic until they become seriously ill.

Despite this situation, it appears that some foreign communities have accepted this as their own problem and engaged in supporting their HIV-positive friends. Starting with the Japanese-Latin American people in the 1990s, the Thai community followed suit, creating a similar kind of group. Since 2002, in the midst of reforming the medical care system for

HIV in their countries, a number of lives have been saved by these cooperative activities for HIV-positive people.

By supporting each other, these various efforts concerning AIDS have overcome many problems. What kind of lessons can our society learn from them?

日本・アジアにおける MSM の現状

市川誠一

名古屋市立大学 看護学部 看護学科 教授

厚生労働省エイズ対策研究事業「MSM の HIV 感染対策の企画、実施、
評価の体制整備に関する研究」研究代表者

1 日本の MSM における HIV/AIDS の現状

HIV 感染者、エイズ患者ともに、日本国籍の異性間感染例は 2000 年ごろからほぼ横ばいで推移しているが、男性同性間感染例は 1995 年以降から増加が続いている。日本国籍 HIV 感染者の年齢階級別・感染経路別推移では、どの年齢層も男性同性間感染の占める割合が高く、増加が著しい。また、外国籍男性の同性間性的接触の感染例も日本国内での感染例が見られている。

20-59 歳の日本人成人男性で、性的な魅力を感じる対象に同性あるいは同性と女性の両者をあげた割合は 3.7%、性行為の相手が同性のみまたは同性と異性の両者を回答した割合は 2.0% であった。平成 17 年度国勢調査における 20 歳以上 60 歳未満の日本成人男性人口と MSM の割合から、同性愛者等はおおよそ 1,468,000 人、MSM 人口はおおよそ 683,000 人と推定された。

平成 20 年エイズ発生動向年報における、MSM と MSM 以外の男性の HIV およびエイズ報告累計から、有病率を推計したところ、人口 10 万人対の HIV 有病率は MSM が 692.9 で MSM 以外の男性 7.2 の 96 倍、エイズ有病率は MSM が 188.9 で MSM 以外の男性 5.8 の 33 倍であった。また、各地の MSM 人口を算定して求めた 2008 年のエイズ患者発生率は、東京が 35.4 と最も高く、近畿 33.2、東海 32.2 が同程度まで上昇し、九州など他の地域も同じ状況に近づきつつある。

このことは、MSM では、いずれの地域も東京と同程度の HIV 感染状況にあることを示唆している。各地の MSM に向けて、検査機会を拡大する対策を設け、早期検査を促進しなければ、今後もエイズ患者の増加は続くことが予想される。

2 MSMにおけるHIV感染対策の課題と取り組むうえで重要な点

1) 性的指向に対する偏見と差別

男性同性愛者は社会において偏見・差別を受けており、自身の性的指向を明らかにして就学・就労などの生活を送ることが困難な人が殆どであるといえる。またHIV陽性者はHIV/エイズへの偏見・差別が重なり、こうした偏見・差別が受検行動、受療行動、予防行動などに影響を及ぼしている。従って、彼らの社会的背景に考慮し、人権や守秘性を重視した取り組みを必要とする。

2) 訴求性のある啓発とNGO活動

HIV感染予防やHIV検査などの情報を普及するためには、異性愛者を中心とした一般社会の啓発に加え、男性同性愛者等に訴求性のある資材や方法で啓発を行うことが必要である。HIVを彼らの健康問題として意識化することを進め、予防行動や受検行動を促進することが望まれる。そのためには、当事者で構成する啓発活動組織（NGO）の働きは欠かすことができず、彼らが活動し、当事者を呼び込むようなコミュニティセンターの設置が必要である。既存の市民対象の公民館などは、性的指向を明らかにすることができない男性同性愛者等がHIV啓発活動に活用するのは困難である。厚生労働省は2003年から、財団法人・エイズ予防財団を通じて、コミュニティセンター事業を実施している。現在は、「ZEL」（仙台）、コミュニティセンター「akta」（東京）、コミュニティセンター「rise」（名古屋）、コミュニティスペース「dista」（大阪）、コミュニティセンター「haco」（福岡）、コミュニティセンター「mabui」（那覇）が全国6地域で展開されている。

3 アジアにおけるMSMの現状と課題

先進諸国のMSMにおけるHIV感染の広がりや、1980年代後半から明らかとなっていたが、アジアのMSMにおけるHIV感染状況が知られるようになったのは、2000年を過ぎてからである。タイ・バンコクのMSMのHIV陽性率は、2003年17.3%、2005年28.3%、2007年30.7%と著しい広がりである

ことが報告され、アジアのMSMのほぼ5人に1人（18.7%）がHIVに感染しているとUNAIDSは推定している。

4 まとめ

MSMにおけるエイズ患者発生を抑制し、HIV感染者の減少を達成するためには、中長期的な展望をもって、検査促進、受療促進、予防啓発介入などを具体的に進めていく体制が必要である。NGOやコミュニティセンター事業を推進するとともに、その活動を評価する研究を連動していくことが大切と考える。アジア地域においても、MSMにおけるHIV感染の拡大が知られるようになった。同性愛者等への差別・偏見はアジア地域のいずれの地域においても顕在し、MSMへのHIV感染対策を遅らせている。わが国のMSMへのHIV感染対策の取り組みは、アジア地域のMSMへの取り組みを進める上でも、重要なこととなる。2009年からモンゴル国のゲイNGOと日本のNGOとの交流を始めており、東京で実施しているLiving Togetherをモデルにした啓発活動がモンゴルでも開始される。セクシュアリティやHIV陽性者の存在について、リアリティのある社会形成になればと思う。

MSMs in Japan/Asia**Seiichi ICHIKAWA****Professor of Communicable Disease Epidemiology and Control****Nagoya City University, School of Nursing****Chief researcher, Study Group on the Development of Community-based HIV Prevention Interventions for MSM, Funded by a Health and Labour Sciences Research Grant****1 The Current Situation of HIV/AIDS Presenting in MSMs in Japan**

While the cases of heterosexual infection among Japanese HIV carriers and AIDS patients have remained in stasis since 2000, the incidence of infection among male homosexuals has continued to increase from 1995 onward. Looking at Japanese HIV carriers according to their ages and their infection routes, the percentage of infections among male homosexuals makes up a higher proportion in all age groups and its number has rapidly increased. Moreover, there are cases of infections between male homosexual foreigners in Japan.

Among Japanese men ages 20 to 59, 3.7% answered that they are sexually attracted to men and women, and 2.0% responded that their sexual partners are either male only or both sexes. Using the number of male adults between 20 and 59 years old according to the 2005 National Census and the rate of MSMs (Men who have Sex with Men), the population of male homosexual people is estimated to be about 1,468,000 and MSMs is about 683,000.

Estimated from the number of HIV and AIDS infection reports from MSMs and non-MSM people in The 2008 Annual Reports of HIV Trends in Japan, the prevalence of HIV and AIDS is respectively 692.9 and 188.9, which indicates its prevalence to be 96 times and 33 times greater than

among non-MSMs, which is 7.2 and 5.8 respectively. Further, calculating the rate of AIDS infection in 2008 from the MSM population, Tokyo marks the highest figure (35.4); Kinki (33.2) and Tokai (32.2) have increased to a similar extent; Kyushku and other areas are coming close to that same situation. This suggests that MSMs in each area share the same level of infection status as those living in Tokyo. Unless we take measures for expansion of testing opportunities for MSMs and provide for early check-ups, we can expect that the number of AIDS patients will continue to rise in the future.

2 Key Points for Engaging in HIV Prevention Among MSMs

1) Prejudice and Segregation against Sexual Orientation

As male homosexual people suffer from social prejudice and segregation, it is difficult for most of them to reveal their sexual orientation while leading their everyday lives at work or school. HIV-positive people also experience discrimination and these situations influence both their attitudes toward checkups, treatment, and prevention. Therefore, their social background, human rights, and confidentiality should be considered.

2) Appealing Enlightenment and NGO activities

In order to spread information about infection prevention and HIV testing, it is necessary to conduct enlightenment activities with resources and methods which appeal to male homosexuals. We should encourage their awareness of HIV as their health issue and teach them that their actions for prevention and HIV tests are desired. For this purpose, it is crucial to cooperate with NGOs consisting of HIV-positive people. The establishment of community centers is needed in order to provide them with a place for their activities and welcome HIV-positive people. Yet it is difficult for closeted male homosexuals to use existing public halls for citi-

zens. Since 2003, the Ministry of Health, Labour and Welfare has launched community center services through Japan Foundation for AIDS Prevention. Today, there are community centers and space in six areas of Japan, such as "ZEL" in Sendai, "akta" in Tokyo, "rise" in Nagoya, "dista" in Osaka, "haco" in Fukuoka, and "mabui" in Naha.

3 Current Situation of MSMs and Challenges in Asia

Although the widespread of HIV infection in developed countries has been recognized since late 1980s, it was not until 2000 that HIV infection status of those living in Asia became known. It is reported that the rate of HIV-positive people among MSMs in Bangkok, Thailand, has rapidly increased: 17.3% in 2003, 28% in 2005, and 30.7% in 2007. UNAIDS (Joint United Nations Programme on HIV and AIDS) estimates that about one out of every five MSMs in Asia is infected with HIV.

4 Conclusion

In order to control the incidence of AIDS infection among MSMs and decrease the number of HIV carriers, it is necessary to establish a system which specifically enhances HIV tests, treatment, and enlightenment interventions as preventative measures. This system should provide for a medium- to long-term vision. I believe it is important to advance NGOs and community center services along with the research that evaluates their activities.

The spread of HIV infection among MSMs has been known to Asian areas. Yet HIV infection controls for MSMs are retarded by existing segregation and prejudice against homosexual people in each Asian district. Thus, Japan's engagements will be significant in order to further activities supporting Asian MSMs. Since 2009, gay NGOs in Mongolia have interacted with Japanese NGOs, and together they are planning the launch of knowledge-

spreading activities modeled on "Living Together" in Tokyo. In conclusion, I hope that we will create a society that accepts the reality of both human sexualities and HIV-positive people.

報告：座談会 みんなで語ろう！大学での子育て
コーディネイター：生駒夏美
国際基督教大学

ジェンダー研究センターでは、日頃からキャンパスでの子育て支援を実現するべく活動が続けているが、その活動の一環として、2012年1月31日に座談会を開催した。オンキャンパスでの子育て経験者である教職員や、学生/院生として出産や育児を経験した人にあらかじめ声をかけ、ICUに求める子育て支援のあり方についての提言をしていこうとするものであり、大学の関係部署職員にも参加を呼びかけた。

その結果、当初のこちらの予想を嬉しくも裏切って、学生、院生、教員、職員、卒業生、聴講生など、多種多様な立場の25名もの参加者が集まった。当初よりの参加予定者にはあらかじめレジュメを作成してもらい、当日それを参加者に配布し、議論の材料とした。何よりも嬉しかったことは、当日参加の方々が積極的に発言し、議論を有意義で熱いものにしてくれたことだった。特に出産を控えた参加者たちが当日参加してくれたことは、子育て支援の緊急性を示す上でも非常に大きな意義があった。

この文章の後に当日配布したレジュメに加筆修正したものを掲載するのでご覧いただきたい。経験者の言葉は非常に重く、また切実である。以下の部分では、レジュメで指摘・提案されている以外で、当日の参加者からいくつもの重要な提言がなされたのでまとめることにする。

学生/院生という立場では、保育園の点数が低いいため、入園しにくいという困難がある上、経済的に非常に厳しい。また、学生は授業時間以外にも研究やグループワークなどを求められ、育児との両立が困難である。費用のかかる休学ではなく、産休制度の導入、学生が授業中に子供を預けられる施設、学生同士の相互補助の仕組み、またグループワークなどへの教師の配慮などが求められる。またICUは19時までの授業や休日/祝日開講があるが、保育園が

閉まってしまうため、育児中の学生にとっては授業参加が困難である。

非常勤講師も、その雇用形態と経済的な不安定さのため、公的な保育園の利用が難しい。実質的に非常勤講師は女性に多く、また大学教育が多くの女性非常勤講師によって支えられている現実があるのに、彼女たちを補助する育児支援が欠如しており、研究時間の確保によるキャリアアップを妨げている。勤務中に子供を預けられる大学併設の保育施設があれば、非常に助かる。

学生/院生での出産や育児に関しては、情報がまったくなく、ネットワークが存在しないため、将来に不安を抱えている。ICUでの育児支援や、オンキャンパスでの授乳設備などの情報や、近隣の支援施設・制度について、情報集約し共有するシステムも構築する必要がある。

子供を持つ留学生の場合、さらに研究と育児の両立は困難となる。限られた資金での保育園の利用は難しい。また学内の寮のほとんどが単身者向けであり、夫婦用はあっても子供のいない夫婦用になっている。子連れでも入れる寮を検討してほしい。近隣の地理に関して不慣れな留学生にとって、万が一のときにキャンパス内に保育施設があることが安心につながる。

大学に保育所を作れば、万事問題が解決するわけではない。コスト面や保育の質を考えれば、国や自治体が保育を責任もって支援すべきである。しかし、保育園が整備されておらず待機児童も多い現状では、公的な保育施設では受け止められない問題の受け皿として、大学併設の育児支援が必要であろう。

出産する学生向けに産休制度を設けることは、大掛かりな設備の建設が必要なわけでもなく、比較的容易に導入できる上、大学の広報にも大いに有益であろう。

図書館が子供の入館を禁じているため、子連れで登校した学生・院生は大

変困っている。保育を必要とするほどの低年齢でなくとも、小さな子供が安全に過ごせる場所をもうけてほしい。図書館で読み聞かせなどするスペースを作るのはどうか。

キャンパスに立派な障害者用トイレがあるが、使用頻度は高くない。そこにおむつ交換台をせめて設置してはどうか。これも、そんなに多額の設備投資を必要とはしないだろう。

これらの提言をもとに、緊急性の高いものから簡潔に要望をリスト化した。

- 1) 障害者トイレにおむつ交換台を設置する。
- 2) 学内に保育／授乳室を設ける。(地域の保育ネットワークと法人契約をする)¹
- 3) 産休制度を創設する。
- 4) 教員に対し、育児中の学生・院生への配慮を徹底する。
- 5) 図書館の20歳以下入館禁止措置と本館への関係者以外立ち入り禁止を見直し、例外規定を設ける。
- 6) 子供連れが入寮できるシステムを作る。
- 7) 将来的には、幼稚園との統合を含め、教職員・学生・院生・非常勤講師らが利用しやすい学内保育所を設立する。

このリストをもとに、ジェンダー研究センターでは大学側に育児支援の必要性を具体的に訴え、一日も早く、安心して育児と研究／教育／業務が両立できる環境を作っていきたいと考えている。

¹ この地域ネットワークのオルタナティブとして、ジェンダー研究センターが中心となって、学生の間で保育援助者のネットワークを構築し、安価で保育を提供するシステムを作ることも可能である。

Report: Let's talk about parenting on campus

Coordinator: Natsumi IKOMA

International Christian University

ICU Center for Gender Studies has been working to realize childcare support system on campus. As part of its effort, we organized a round-table talk on 31 January, 2012. We asked educational/clerical staff members as well as students who experienced difficulties in raising child(ren) while at work or as a student to express freely their opinion and their demand. We also invited university staff members from responsible offices.

To our happy surprise, the talk attracted various audiences as many as 25 participants, including undergraduate students, graduate students, former students, audits, faculty members, and clerical staff. We distributed documents prepared by previously arranged participants, and our discussion starts with sharing their opinion. Many participants were eager to join the discussion, which turned out to be quite heated and fruitful. We owe especially those pregnant participants whose presence gave the talk such an urgency and significance.

Please look at the documents at the end of this summary, the same ones as distributed at the round-table talk with minor editing. They all are filled with important demand inspired by their own experience. Below I would like to summarize the important ideas shared at the round-table session.

Students encounter difficulties in getting their child(ren) accepted to public childcare facilities, as they are allotted lower candidate points that

used in application procedure. Private ones are too expensive. As students, they need to study or do some group-work outside their class time, which is really hard to do while taking care of their child(ren). As the alternative of current absence system, maternity leave system for students that guarantees some period of absence without any fee is desirable. Also a facility to take care of child(ren) while attending the classes, a system of student helpers, and professors consideration for those taking care of small children with regards to group-work etc., are required. ICU offers classes till 7 pm and on holidays as well. But childcare facilities are not open till so late at night and closed on holiday. That makes impossible for students raising child(ren) to attend the classes.

Parttime lecturers, due to their work schedule, are prevented from using public childcare facilities. But the university education depends on so many parttime teaching members whose majority is female. The lack of support system of their childcare needs is the great barrier for their career development, as they cannot secure time for academic research. On-campus childcare facility would greatly benefit them if they can use it while teaching.

Pregnant students are having difficulties in finding necessary information and networks that can help them deal with their concerns about childcare. We need to set up a system for working/studying parents to share information on childcare facilities and support on/off campus.

Student parents from abroad are in extra difficulties in balancing research activities and childcare. Their limited fund makes it hard for them to use childcare facilities off campus. Though on-campus accommoda-

tion could have helped them financially, due to the university regulation, they are not allowed in. The university must create an accommodation for student parents. On 11 March 2011, they had such a hard time in getting to their kids at the off-campus childcare facilities without local knowledge. On-campus childcare facilities could have provided them with peace of mind.

On-campus nursery cannot solve all the problems we have. Childcare services should be provided by the national and local governments on principle, because they can provide better and less expensive services. However, on-campus childcare facilities are necessity today, when the public ones do not function well, and many children are waiting to enrol.

Creating a maternity leave system for students does not require a drastic change in the facilities, and it is easily introduced. It also appeals to the public, and works for the PR of the university.

The library regulation that does not allow children into the library is causing studying parents a great difficulty. A space where small children can stay safely is necessary, even after they pass the age of nursing. Kid's space in the library where student volunteers can read books for the children would be ideal.

There are some WC for the disabled on campus that are rarely used. Why can't we install diaper changing tables in them? They won't cost much.

Based on those suggestions, we listed up our demands in the order of

urgency.

- 1) Install diaper changing tables in WC for the disabled on campus.
- 2) Create a space for nursing/childcare.
(Bind a contract with local NPO childcare service to become a corporate member.)
- 3) Create a maternity leave system for students.
- 4) Instruct all faculty member to pay due regard to the difficulties of studying parents.
- 5) Reconsider the no-entry rules of children into the library and Honkan. Set up exception rules.
- 6) Create on-campus accommodation for studying parents.
- 7) In the long run, create an on-campus nursery for students, full/part-time faculties and staff, possibly through the integration of ICU kindergarten.

CGS is planning to make these demands to the university and help realizing a better environment in which we can study/research/teach/work and care for our children at the same time.

大学と保育施設
木部尚志
国際基督教大学

大学には保育施設が必要であると思う。この必要性は、大学に内在する三つの性質に即して考えることができる。それらの性質とは、学びの場としての大学、職場としての大学、研究の場としての大学を指す。

まず、学びの場としての大学について言えば、育児ケアに従事しながら勉学に励む学生のニーズを考えると、保育施設は必要である。この種の施設がキャンパスにあるならば、育児ケアの負担を軽減することができ、勉強時間の確保にもつながり、勉学にも好ましい影響を与えることができる。勉強のための時間が少しでも確保できないとなると、成績不良という結果が待ち受けているであろう。そうした事態を回避するための休学や退学という選択肢と比べて、保育施設を活用しての学業の持続という選択肢の方が魅力的であるように思われる。保育施設の必要性は、自分自身の経験にも基づいている。ドイツ留学中に娘が生まれた際に、大学の家族寮の一角に保育園があったことに大いに助けられた。

つぎに職場としての大学の点からも、保育施設が求められる。これは、大学が良好な労働環境を提供することを心がけ、そのことを通じて良き人材を獲得し、ひいては組織としての良好なパフォーマンスを引き出す上で不可欠である。この種の意識と努力がない組織は、女性の社会進出および伝統的家族構造の崩壊という状況の中では、人材の確保と労働意欲の維持の点で困難に直面するであろう。

最後に研究の場としての大学に目を向けても、やはり保育施設が必要である。研究と育児の両立が大変であることは、女性の研究者が男性のそれに比して少ないという事実が雄弁に物語っている。研究に時間を割くことができなれば、業績、就職、昇進に悪影響が生じる。キャンパス内の保育施設は、研究をする環境を改善することで、優れた研究を促進する環境作りに大いに

貢献するであろう。保育施設の存在は、優れた研究者を育て、優れた研究者を集めることに役立つことで、それを通じて教育の質を高めることにも資する。さらに言えば、これまで述べてきた点を十分に考慮して保育施設を設けることは、広い意味での学生の意識向上や教育につながるものである。

大学は、学びの場であり、同時に働く場や研究の場でもある。これら三つの面からみると、大学には保育施設が必要とされることが理解されるだろう。不要論を唱えるのは、これらの大学にとって本質的な面をまじめに考慮するかぎり、きわめて困難であると言わざるをえない。

Universities and Childcare center
Takashi KIBE
International Christian University

I believe that universities need childcare centers. The necessity is demonstrated by the main three purposes of the university: A place of learning, a workplace and a place of research.

First of all, as far as the university as a place of learning is concerned, childcare centers are needed for students who study while raising their children. If we have these centers on campus, such students will be able to reduce their burden in regards to child-care and save that time for studying, which will, in turn, lead to positive effects in their academic achievements. On the other hand, if they cannot set aside that time, they may receive poorer results. In order to avoid such a predicament, continuing to study by using a childcare center on campus seems to be a more attractive choice than a temporary leave or withdrawal from the university. I would also like to stress the need for childcare centers on campus from my personal experience: when I had a daughter while studying in Germany, we greatly benefited from the kindergarten at the dormitory for families on campus.

Second, from the perspective of the university as workplace, childcare centers are necessary. They are essential to universities' efforts to provide a better working environment, gain better human resources, and improve their performance as organizations. In the presents, the circumstances of women's social advancement and the collapse of traditional family structures cause organizations without any awareness and effort regarding the above to be confronted with difficulties in securing human resources and maintaining employees' motivation to

work.

Finally, the university as a place for research also demonstrates a need for childcare centers. The difficulty of doing research and child rearing at the same time is clearly shown by the fact that there are less female researchers than male. If female scholars with children cannot secure the time for their research, it would have a negative effect on their academic achievements, employment, and promotion. Childcare centers on campus will make a great contribution to advancing their research by improving the academic environment in which they conduct their work. It would also foster and gather qualified scholars, and thus help improve the quality of university education. Furthermore, it will lead a rise in students' awareness and the quality of education in a wider sense.

Universities are places for work and for research as well as learning. Considering these three aspects, it is understandable that universities need childcare centers. Therefore, I would have to say that it is too difficult to argue that they are not necessary, if we seriously consider these essential parts of universities.

子育てを支援するICUに

紀平宏子

国際基督教大学職員 / 国際基督教大学大学院卒業生 (07)

私は昨年9月にICUに転職しました。私には現在4歳と2歳の子どもがおりますが、2人とも前職に在籍中に産みました。現在子どもは地元の公立保育園に通っています。この数年間を振り返ると、最も大変だったのはやはり出産後の職場復帰の時期で、育児と仕事のバランスのとり方が分からず非常に苦しかった思い出があります。また公立保育園への入所も激戦で、ようやく入れたと思っても1年ほどは病気で何度も呼び出しを受けていました。一般的にも、仕事と育児を両立させる上で最も大変時期は「産後から子どもが2歳になるまで」なのではないかと思えます。

この時期の親子をサポートしてくれるシステムがもしも大学にあれば非常に心強いと思えます。具体的な提案としてふたつあります。ひとつ目は保育施設です。前述のとおり、公立保育園への入園は非常に難しい状況です。入園は家族の状況を調査した上でポイント制で厳格に審査され、ポイント累積の高い子どもから選定されていきます。ここで問題になるのが、親が「学生」であったときのポイントの低さです。フルタイムで勤務している人に比べ、学生で親になった人に付与されるポイントは少ないため、結果的に公立保育園への入所に不利になります。共働き家庭より家庭収入は低いにも関わらず、保育料の安い公立保育園への入所が難しいという矛盾が生じるわけです。こういった人たちをサポートする意味でも学内に保育施設を作ることは大きな意義があると思われます。ICUは学生数の少ない大学なので収支に合わないという考え方もあるかもしれませんが。しかし発想を逆転させれば「保育施設がある大学」という触れ込みは、優秀な教員・職員・学生を集める上でのインセンティブとして利用することもできるのです。

以前の職場で私は毎日、昼休みに医務室で母乳を搾り、冷凍させて保育園に持参していました。もしも昼休みや空き時間に授乳ができる距離に保育所

があれば、子どもはもちろん母親の精神衛生上、非常に良いと思います。またストレスが軽くなれば仕事や勉強により集中することができます。大学内の保育施設を「コストのかかる面倒なもの」と捉えずに「優秀な人材を引き寄せる仕組み」と捉えていただき、ぜひ設置をご検討いただければと思います。

ふたつ目の提案はワーク・ライフ・バランスへの理解を深めることです。冒頭にも書いたとおり、子育て中は保育園からの急な呼び出しで仕事の予定をキャンセルすることになったり、数日休むことになってしまうことが往々にしてあります。周囲の人たちの中には、そういった事情に気持ちがなかなかついていけない人もいます。しかしながら、子育てと仕事・勉強で奮闘する中、周囲の理解も得られなければ、親はどんどんと孤立してしまいます。ただでさえ子育ての悩みは一人で抱え込みがちです。特に若くして親になった学生は、周りの友だちと置かれている環境のギャップ、求められることの多さなどに苦しむことも多いと思います。

私も子どもを持つ身になって初めて彼らが、時には引き裂かれるような気持ちを感じながら子育てと仕事・勉強を両立させているということを知りました。そしてそんな気持ちのとき「子どもさん心配だね」「もう大丈夫なの？」などの声をかけてもらえると、救われるような気持ちになることも知りました。ぜひ教授や管理職職員の方々に向けて、ワーク・ライフ・バランスの重要性や、子育て中の親への理解を深める講習会などを開いていただければと思います。

ICUにはぜひ、保育環境、そしてワーク・ライフ・バランスの分野でも「世界基準」を目指すことを期待しています。

育児に関する座談会

二木泉

国際基督教大学大学院卒業生 (08)

私は社会人経験後、長女が2歳の時に2006年に大学院に入学しました。そして、大学院在学中に第二子を出産後、1学期間のみ休学し復学しました。

学生で子どもを持つ事について

第二子を4月に合わせて、生後3ヶ月で保育園に入園させ復学しました。その際、学業と育児を両立するため学校の近所に引っ越しをすることも考えましたが、2歳の長女が学校の近くの保育園に変わることができず断念。保育園の入園は点数制です。就労時間、賃金などからポイントが決められ、点数が高い順に入園します。学生は「就労」と比較して点数が低いため長女と同じ第一希望の園には入園することができませんでした。二人を別々の園に通わせることになりました（ふたつの園をまたいだ保育園生活は、2年続きました）。学内ですれ違うICU幼児園の園児と親を見ながら「学内に保育園があったらなあ。せめて幼児園がもう少し長い時間あいていればとても助かるのになあ」と毎日思っていました。

学生は「就労」状態と比較して、保育園入園のための点数が低いのですが、社会人の経験をした私の視点では、子どもを持ちながら学生をすることは、時に就労時よりも困難だと感じました。なぜなら、子どもが発熱した場合など、いざという時に休暇を取れる会社員と異なり、休む＝授業を欠席しなければなりません。産休・育休もなく（ICUは休学中も1/3の学費を支払わなければならないため休学しにくい）上、家に帰れば家事、育児に加えて課題や研究が待ち受けています。お迎えというタイムリミットがあるため、取りたい授業も取れず、毎日ダッシュで家に帰り、家事育児をこなしつつ課題を行う。社会人の時と比較しても、想像以上に余裕のない日々を過ごして

いたように思います。

大学の設備・制度について

復学後は保育園に預けながら母乳での育児を続けていました。昼間は母乳を与えることができないため、張りが辛いときなどは搾乳しなければなりませんでしたが、困ったのは、学内に落ち着いて搾乳できるような場所がなかったことです。ERBの個室が一つしかないトイレで落ち着かない日々を過ごしました。

また、どうしても子どもを連れてこなければならない場合に、学内ではおむつを替える場所や授乳できる場所がなく困りました。専用の場所だけでなく「誰でもトイレ」のような場所があると助かると思いました。

大学暦等について

子どもを持つ学生・TAとして困ることが、ICUの独自の大学暦です。ICUは祝日にも授業がある日がありますが、保育園は完全にお休みです。こちらで子どもを見てくれる人を探す必要があるのです。シッターさんを一日お願いするのは経済的にとても負担が大きく、また土日祝日に出勤の夫や、実家が遠く親に頼ることもできなかつたため、1学期間に数回と言えども、私には大きな心理的負担となりました。

この他にも復学の際に健康診断書が必要だと言われ子守りの手配をして病院に取りにいったこと、復学の申請書類を新生児を連れて提出しに来たこと、次年度の保育園の継続申込のための就労証明書（内定証明書）が3月以降にならないと出ないこと、など融通が効かないために困ったことはいくつもあります。

これらのことは、一つひとつは瑣末なことかもしれませんが、しかし、このような細かいことが積み重なることにより、とてつもなく大きな困難感を引き起こすものだということが分かりました。逆に言えば、少しの配慮と融通

の良さがあれば、子どもを持つ人だけではなく、見えないけれども存在するであろう様々な事情を抱える人々にとって生活がしやすい環境にもなるのではないかと考えています。

ICUにおける学びへの支援としての子育てサポート

西井瞳

国際基督教大学学部生

はじめに私は26歳の学部生です。高校卒業後に看護系大学を卒業・資格(看護師・保健師)を取得し数年間仕事をしたのち、現在も働きながら通学しています。私には出産や子育ての経験はありませんが、今回は率直な26歳・女性の学部生として、また資格者として協力できることがあるのではないかという思いから生駒先生にご連絡し、お話しする機会をいただきました。

子育てについては26歳という年齢もありとても身近に感じています。しかしICUで学生と子育てを両立することには、施設やシステムといった面でサポートが得られないのではないかと不安があることも事実です。具体的には、子どもを保育園に預けられなければずっと休学し続けなければならず、卒業できないのではないかとことがあります。日本人の学生であれば最初に保育所を検討すると思います。保育所に入所するには、両親や家族が就労していることや、学生であることも考慮される点ではあり、条件を満たすことは可能だと思われます。しかし現在三鷹市では待機児童も多い状況にあり、他の条件と比べても配分される点数はそれほど高くなく、学生だからと有利に預けられる保証はありません。保育所入所がかなわなかった場合、履修する科目を最低限にして子どもと一緒に通学することも選択肢の一つだと思います。しかしICUでは簡単なことではありません。それは施設面で不便な点が多いことです。ひとつはおむつを交換できるようなスペースがないこと、トイレに荷物を置く場所もないことです。新D館のトイレは比較的広く作られていますが、授業の合間に行けるような場所ではありません。また、授乳室のように子どもに食事を与える場所もなく、ケアができるスペースがなく、それならば学校にくること、勉強すること自体をあきらめてしまうのかもしれない。

このことから、私は以下の点を提案したいと思います。ひとつはケアをできる場を作ることです。手洗いができる流し台、水・お湯が使える流し台、おむつが交換できるベビーベッド、お湯が入れられる（電気）ポット、授乳できるソファ等、簡単な設備の部屋を用意することで、母親が自分の子どもにケアできる場を作ることです。もうひとつは、学生が母親から子育てを学ぶ場として、その場所を学生主体で事前登録制などにして開放することです。例えばスペースを利用する母子から、登録したボランティアとして学生がケアを学んでいくことで信頼関係が築かれ「この学生にこのケアは任せられる」となれば、アルバイトとして活用できると思います。地域に開かれた大学としては、一般に門戸を広げるのが理想かもしれません。しかし私はあくまでも保育所の代わりではなく、母親の勉強のための子育てサポートシステムとして ①比較的短時間 ②場所は基本的に大学内 ③基本的には母親によるケア ④学生はあくまでもボランティアスタッフ ⑤場合によってケアを提供する学生アルバイトの活用、を提案したいと思います。

キャンパスでのびのび子育て—キャンパス内保育園の魅力—

西納由紀

国際基督教大学職員

ICUのキャンパス内には幼稚園はありますが、保育園がありません。しかし、保育園に子どもを預けながら働く教職員は少なからずいます。学内に保育園の設置を希望する方は少なくないと思いますし、私もその一人です。私自身は、現在1歳半の息子を東京学芸大学内にある「学芸の森保育園」に預けています。その経験から感じる、キャンパス内保育園（職場内の託児所型の保育園）のメリットについて、ここでは書いてみたいと思います。

① キャンパスが園庭

広々としたキャンパスを園庭とできることが一番の魅力だと感じています。キャンパスは関係者以外の立ち入りが制限されていますし、車両を気にしながら道路を渡ってお出かけする必要もありません。また、学芸大には植物園や畑、水車のあるプレイパークがあり、子ども達の格好の遊び場となっています。ICUにも豊かな自然や広々とした芝生があります。「ここで自分の子どもを保育して欲しい」と思う教職員は少なくないのではないのでしょうか。

② 小さな保育園ならではの異年齢保育

学芸の森保育園の定員は30名で、設立2年目の現在、園児の数はまだ定員の半数程度です。一般の保育園では、年齢別保育が主流ですが、このように小さな保育園では、すべての年齢の子ども達が一緒に過ごします。家では一人っ子の子ども達も保育園では「兄弟姉妹」を得て、様々な交流が生まれます。意のままに振る舞う幼い子から、年上の子は忍耐と寛容を学びます。幼い子は、年上の子が走ったり話したりするのを見てまねをします。小さな保育園だからこそ、異年齢の子ども達の喜怒哀楽がぶつかり合う、生き生きとした環境が生まれます。

③ 保育園は子育て世代への最大の福利厚生

育児休業取得中の者にとって、復帰のタイミングで子どもを預けられるかどうか、また希望するような環境の保育園に入ることができるかどうか、結果が出るまで大変気をもむことです。私の場合は、復帰の3ヶ月前に認可保育園の申請が通らなかったことが分かりました。その後、無認可保育園を見学して回ったり、保育ママに仮申込をしたりなど、いろんな方法を検討しましたが、最終的に3月中旬に学芸の森保育園への入園が内定し、なんとか4月の復帰に間に合いました。もしもICUに保育園があれば、育休中の保育園探しの苦労や不安はもっと軽減できたのではないかと思います。また、送り迎えのために以前より通勤時間が1時間ほど長くなりましたが、職場と保育園が近ければ、このような送り迎えの労力や時間もだいぶ軽減されるものと思います。そして何よりICUが大学として子育てを支援してくれているという事実が、子育てをする教職員にとって大きな励み、大きな福利厚生になると思います。

キャンパス内に保育園を設置する、あるいは保育サービスを提供するメリットは他にもたくさんあります。また当然課題もあると思います。まずは学内での検討と議論を始めてみませんか。

Advocacy for the provision of on-campus child care at ICU

Mutiara PASARIBU

國際基督教大學大學生

The provision of day-care center in campus become very important for student parents who study at ICU nowadays. The absence of the day-care center facilities does not only impact to the success of student parents' study but also to their psychological health.

The student parents must deal with many challenges in carrying out their duties ranging from coursework to meet deadlines and perform their child-bearing responsibilities. The issue becomes more complicated and tough for those who live far away from their family/relatives. Student parents do not have any relative nearby who can help them even just to look after their child when they have to attend class. This complication are not only experienced by senior students at the graduate level but also experienced by undergraduates who might just have the first experience of living away from parents. Such circumstances likely disturb psychological health of the student's parent, especially feelings of being isolated from social life.

A limited financial ability also becomes the most decisive factor for the student parents to be able to access day care center run by a private company. Financial incapacity then forces the student parents to choose between continuing study, work, or being full-time parents. Many of the graduate students who study at ICU are economically dependent on their scholarship. The scholarship fund is usually only intended for a single student, therefore impossible for the student parents who are scholarship recipient to afford the services of day care center run by a private company outside the campus.

My personal experience as a mother who also study at ICU might be simi-

lar with others student parents. I do not see any support from the campus to the conditions I encountered during my study time. The absence of day care center facilities forced me to really be careful in managing my class schedule. Even though sometimes is unavoidable to attending the evening class. Such situation forces me to leave my child alone at home, while I was attending my class. Of course it is not a good option for me, but I have to do it more because I do not see any options provided by the campus for mothers/parents.

In my opinion, it is very important to think of solutions how the student parents could continue their study and also being successful in raising their child. The need for the availability of day care center is not only the issue of the student parents, but also should become a part of the policy consideration of the ICU campus that has a strong commitment to human rights and Christianity values. So that ICU could become a family-friendly campus in the future.

多摩ジェンダー教育ネットワーク 第8回～第10回会合
2011年6月30日～2011年12月22日

主催：国際基督教大学ジェンダー研究センター(CGS)加藤恵津子、田中かず子
一橋大学ジェンダー社会科学研究センター (CGraSS) 木本喜美子

2009年11月に発足、第1回の会合を開いた「多摩ジェンダー教育ネットワーク」(以下「ネットワーク」)は、専任・非常勤を問わず、多摩地区の大学でジェンダー教育に携わる人々の「人間関係」である。ジェンダー関連科目はあっても、ジェンダー教育がプログラムや専攻として制度化しにくい日本の諸大学にあって、その教育に携わる人々は孤立しがちである。当ネットワークはそのような人々をつなぎ、経験、スキル、そして直面している問題を分かち合うことで互いをエンパワーすべく始まった。これには「顔の見える」関係づくりが重要と考え、まずは行き来のしやすい多摩地区の大学教員をメンバーと定めている。

2011年度には、以下の通り計3回の会合を開くことができた(以下、敬称略)。

〈第8回会合〉

日時：6月30日(木)、19:00～21:00

テーマ：入門～中級クラスにおける教材

発表者：穂田照子(桜美林大学)、石川照子(大妻女子大学)、稲本万里子(恵泉女子大学)、田中弘子(元愛媛大学、新宿区相談員)、長島佐恵子(中央大学)

場所：一橋大学

参加者：14名

当初より要望のあった、教材シェアの第一弾。コミュニケーション学、歴史学、美術史、文学などの異なる分野でジェンダー教育を行う5名が、推薦できるテキストや視聴覚教材を紹介、また講義での効果的な使い方を、経験

に基づき披露した。これとは別に、国立女性教育会館（NVEC）の市村桜子氏から、新しい情報利用システムの案内もいただいた。

〈第9回会合〉

日時：10月6日（木）、19:00～21:00

テーマ：暴力など、扱いが難しいテーマにおけるヴィジュアル教材の使用法

発表者：田中妙子（純心女子大学）、福田紀子（白百合女子大学インターン）

場所：一橋大学

参加者：11名

DV、途上国における女性・子供への暴力や貧困など、視覚的にショッキングなテーマを講義で扱う際に勧められるヴィジュアル教材（ビデオ、写真）と、そのふさわしい使用法を2名が紹介した。見せっぱなしにせず学生からの反応を引き出す、他人事で終わらせず「自分たちに関わりはないか」を受講生に考えさせるなどのコツが披露された。

〈第10回会合〉

日時：12月22日（月）、19:00～21:00

テーマ：近現代を相対化する：言語と社会制度から見るジェンダー

発表者：穂田照子（桜美林大学）、野本京子（東京外国語大学）

場所：東京外国語大学

参加者：10名

今日のジェンダー関係が近現代の産物であることを、いかに学生に教えるか。言語学、近現代日本の社会制度を教える2名が、担当する講義の内容を紹介しつつ論じた。コメント用紙など、学生の意見や疑問を引き出す工夫も披露。これとは別に、「ピナット（ピナツボ復興むさしのネットワーク）」および「ロラネット（フィリピン従軍慰安婦支援グループ）」の出口雅子氏より、その活動や制作映画の紹介をいただいた。

〈第11回会合（予定）〉

日時：2012年4月26日（月）、19:00～21:00

テーマ：性教育の可能性—セックスとジェンダーをつなぐ学習の創造—

発表：村瀬幸浩（“人間と性”教育研究協議会）

場所：一橋大学

会合はいずれも、前半が発表、後半が質疑応答・意見交換という構成であり、活発な発言が交わされた。

本ネットワークの開始より2年が経った。あらためてメンバーの要望に耳を傾け、より多くの人々の参加を得られるよう、また参加者にとってより強いエンパワーメントの機会となるよう、内容・形式ともに工夫改善していきたい。

加藤恵津子（CGSセンター長）

**From 8th to 10th Meetings of the Tama Gender Education
Network 2011
June 30 - December 22, 2011**

Hosts: Etsuko KATO, Kazuko TANAKA, Center for Genders Studies (CGS),
ICU

Kimiko KIMOTO, Center for Gender Research and Social Sciences
(CGraSS), Hitotsubashi University

The Tama Gender Education Network (hereafter "Network") is an association of fulltime and part-time teachers who teach gender-related courses at universities in Tama district. The Network launched in November 2010. The Japanese academic environment, which discourages the institutionalization of gender studies, tends to isolate teachers of this academic area from each other. The Network aims to support the teachers, mutually empowering them through opportunities to share their experiences and teaching skills, as well as discuss hardships they are faced with. In order to enhance face-to-face relationships, the Network started within the district of Tama.

In AY2011 the Network held its 8th to 10th meetings focusing on various topics such as how to use visual material that includes violence, or how to relativize contemporary gender practice in historical points of view.

Etsuko KATO,
CGS Director

2011 年度ジェンダー研究センター (CGS) 活動報告

■春学期

4 月 25 日 (月) ～ 春学期読書会 開催

1. 『フェミニズムはみんなのもの：情熱の政治学 / 他

著者：ベル・フックス/訳：堀田碧

担当者：井芹真紀子（東京大学大学院）

日時：4 月 25 日～（毎週金曜日）

2. 『情熱としての愛－親密さのコード化』

著者：ニクラス・ルーマン/訳：佐藤勉・村中知子

担当者：川口遼（一橋大学大学院）、平森大規（ICU 学部生）

日時：4 月 27 日～（毎週水曜日）

3. *A Critical Introduction to Queer Theory*

著者：ニッキ・サリヴァン

担当者：進藤竜一（一橋大学大学院）

日時：5 月 6 日～（毎週金曜日）

4 月 13 日 (水) ・ 14 日 (木) ・ 15 日 (金)

オープンセンター・pGSS 説明会開催

4 月 25 日 (金)

セルフ＝アウェアネス・ワークショップ・シリーズ 第 1 回

「今なら聞ける！性のジョーシキ・非ジョーシキ」

講師：池上千寿子（特定非営利活動法人 ぶれいす東京 代表）

場所：国際基督教大学 本館 364 号室

5 月 20 日 (金)

共催オープンレクチャー「日本映画史における《女性アクション》」

講師：鷺谷花（早稲田大学演劇博物館特別招聘研究員）

場所：国際基督教大学 本館 116 号室

5 月 31 日（火）

セルフ＝アウェアネス・ワークショップ・シリーズ 第 2 回

「危険を近づけない！心と身体のコシン術」

講師：C・サイモンズ（国際基督教大学 准教授/ジェンダー研究センター
所員）

場所：国際基督教大学 C-gym

6 月 14 日（火）

セルフ＝アウェアネス・ワークショップ・シリーズ 第 3 回

「被害者にも加害者にもならない！ キャンパス・ハラスメント」

講師：北仲千里（広島大学 ハラスメント相談室 准教授）

場所：国際基督教大学 本館 364 号室

6 月 30 日（木）

「多摩ジェンダー教育ネットワーク」第 8 回会合

場所：一橋大学

■秋学期

9 月 14 日（火）・15 日（水）・16 日（木）

オープンセンター・pGSS 説明会開催

9 月 28 日（水）～ 秋学期読書会 開催

1. 『情熱としての愛－親密さのコード化』

著者：ニクラス・ルーマン / 訳：佐藤勉・村中知子

担当者：川口遼（一橋大学大学院）、平森大規（ICU 学部生）

日時：9 月 28 日～（隔週水曜日）

2. 『批判的性政治 *Critical Sexual Politics*』

著者：朱偉誠

担当者：于寧（東京大学大学院）、進藤竜一（一橋大学大学院）

日時：9月30日～（隔週金曜日）

10月 CGS ニュースレター 014 号発行

10月3日（月）

共催オープンレクチャー「セクシュアル・マイノリティをめぐるエスノグラフィ」

講師：砂川秀樹（文化人類学者）

場所：国際基督教大学 本館 260 号室

10月6日（木）

「多摩ジェンダー教育ネットワーク」第9回会合

場所：一橋大学

10月10日（月）

国際基督教大学ワンデー・レクチャーシリーズ

「HIV/エイズに見る日本・アジア -越境するセクシュアリティ-」

場所：国際基督教大学 東ヶ崎潔記念ダイアログハウス 2 階 国際会議室

10月28日（金）

共催オープンレクチャー「人はなぜ結婚するのか？— 同性結婚を通して考えなおす」

講師：中村美亜（東京藝術大学助教）

場所：国際基督教大学 本館 367 号室

12月22日（木）

「多摩ジェンダー教育ネットワーク」第10回会合

場所：東京外国語大学

■冬学期

12月13日(火)～ 冬学期読書会 開催

1. 『ポストコロニアリズムとジェンダー』

著者：菊地夏野

担当者：堀真悟（早稲田大学大学院）

日時：12月13日～（隔週火曜日）

2. *Impersonations: The performance of gender in Shakespeare's England*

著者：Stephen Orgel

担当者：菅野磨美（慶應義塾大学大学院）

日時：12月14日～（毎週水曜日）

3. 『サバルタンは語るることができるか』/他

著者：G.C.スピヴァク/訳：上村忠男

担当者：上田真央（国際基督教大学大学院）

日時：12月13日～（毎週水曜日）

1月18日(水)

オープンレクチャー「NHKディレクターに聞く！あたらしいTV番組のつくり方ーメディアとセクシュアル・マイノリティ」

講師：今村裕治（NHK大阪放送局制作部ディレクター）

コーディネーター：加藤悠二（国際基督教大学ジェンダー研究センター助手）

場所：国際基督教大学 本館170号室

1月28日(土)

映画上映会

「映画を通じたセクシュアル・マイノリティとの対話 -映画『しみじみと歩いてる』上映会-」

講師：島田暁（映像作家、Rainbow Action 代表）

コーディネーター：加藤悠二（国際基督教大学 ジェンダー研究センター助

手)

場所：国際基督教大学 本館 170 号室

1 月 31 日 (火)

トークセッション「みんなで語ろう！大学での子育て」

コーディネーター：生駒夏美 (国際基督教大学 准教授 ジェンダー研究センター 運営委員)

場所：国際基督教大学 東ヶ崎潔記念ダイアログハウス 2 階 中会議室

2 月 25 日 (土)

オープンレクチャー「『酷兒 (クィア)』と台湾文学 -文学/翻訳と台湾セクシュアル・マイノリティ-」

講師：紀大偉 (国立政治大学台湾文学研究所助教授)

コーディネーター：進藤竜一 (国際基督教大学 ジェンダー研究センター助手)

場所：国際基督教大学 東ヶ崎潔記念ダイアログハウス 2 階 国際会議室

3 月 20 日 (火・祝)

公開研究会「身体の不)可能性と<生存>の要求：ディスアビリティ理論とクィア理論の対話から」

スピーカー：飯野由里子 (東京大学先端科学技術研究センター/ジェンダー・セクシュアリティ研究)

清水晶子 (東京大学大学院情報学環・総合文化研究科/フェミニズム・クィア理論)

星加良司 (東京大学大学院教育学研究科附属バリアフリー教育開発研究センター/ディスアビリティの社会学)

司会/コーディネーター：井芹真紀子 (国際基督教大学ジェンダー研究センター助手、東京大学大学院総合文化研究科博士課程)

場所：国際基督教大学 東ヶ崎潔記念ダイアログハウス 2 階 国際会議室

3 月 CGS ジャーナル『ジェンダー&セクシュアリティ』第 8 号発刊

注

CGS 公式ウェブサイト「CGS Online」、ツイッター公式アカウント、
Facebook では随時、情報を更新しています。

CGS ニュースレター、CGS ジャーナル『ジェンダー&セクシュアリティ』は
「CGS Online」でダウンロードできます。

AY 2011 Activity Report, ICU Center for Gender Studies (CGS)

■ Spring Term

From Monday, April 25th, 2011: Spring Term Reading Groups

1. *Feminizumu wa minna no mono: Jounetsu no seijigaku (Feminism is for EVERYBODY: Passionate politics)*

Author: Bell Hooks (trans. by Midori Hotta)

Organizer: Makiko Iseri (Graduate School, University of Tokyo)

Date: Fridays, from 25th April

2. *Jounetsu to shiteno ai: Shinmitsusa no kodoka (Liebe als Passion: Zur Codierung von Intimität)*

Author: Niklas Luhmann (trans. by Tsutomu Satou, Tomoko Muranaka)

Organizer: Ryo Kawaguchi (Graduate School, Hitotsubashi University), Daiki Hiramori (ICU Undergraduate)

Date: Wednesdays, from 27th April

3. *A Critical Introduction to Queer Theory*

Author: Nikki Sullivan

Organizer: Ryuichi Shindo (Graduate School, Hitotsubashi University)

Date: Fridays, from 6th May

Monday, 13th – Wednesday, April 15th

Open Center at CGS, pGSS Briefing Sessions

Friday, April 25th

Self-awareness Workshop Series 1: Now You Can Ask! The Common Sense of Sex

Lecturer: Chizuko Ikegami (PLACE TOKYO)

Venue: Room H-364, International Christian University

Friday, May 20th, 2011

Open Lecture: "Women's Action" in the History of Japanese Films

Lecturer: Hana Washitani (Adjunct Researcher, The TSUBOUCHI Memorial Theatre Museum, Waseda University)

Venue: Room H-116, International Christian University

Tuesday, May 31st

Self-awareness Workshop Series2: Self-defence for Body and Mind

Lecturer: Christopher Simons (Associate Professor, ICU/Regular Member of the CGS)

Venue: C-gym, International Christian University

Tuesday, June 14th

Self-awareness Workshop Series3: Campus Harassment: Don't Become a Victim or Victimizer!

Lecturer: Chisato Kitanaka (Associate Professor, Harassment Consultation Room, Hiroshima University)

Venue: Room H-364, International Christian University

Thursday, June 30th

Eighth Meeting of the Tama Network for Gender Education

Venue: Hitotsubashi University

■Autumn Term

Tuesday, 14th – Thursday, September 16th
Open Center at CGS, pGSS Briefing Sessions

From Monday, September 28th: Autumn Term Reading Group
1. *Jounetsu to shitenno ai: Shinmitsusa no kodoka (Liebe als Passion: Zur Codierung von Intimität)*

Author: Niklas Luhmann (trans. by Tsutomu Satou, Tomoko Muranaka)

Organizer: Ryo Kawaguchi (Graduate School, Hitotsubashi University), Daiki Hiramori (ICU Undergraduate)

Date: Wednesdays, from 28th September

2. *Critical Sexual Politics*

Author: Chu Wei-cheng

Organizer: Yu Ning (Graduate School, University of Tokyo), Ryuichi Shindo (Graduate School, Hitotsubashi University)

Date: Wednesday, from 30th September

Friday, October 14th

Publication of the CGS Newsletter, No. 014

Monday, October 3rd

Co-hosted Open Seminar: An Ethnography of/by/for Sexual Minorities

Lecturer: Hideki Sunagawa (Anthropologist)

Venue: Room H-260, International Christian University

Monday, October 6th

Ninth Meeting of the Tama Network for Gender Education

Venue: Hitotsubashi University

Monday, October 10th

ICU, One-day Lecture Series: Re-visiting “Japan” and HIV/AIDS:

Japan in Asia, Asia in Japan

Venue: International Conference Room, Dialogue House 2F,

International Christian University

Friday, October 28th

Co-hosted Open Seminar: Same-sex marriage: Reconsidering the meaning of marriage

Lecturer: Mia Nakamura (Assistant Professor, Tokyo University of the Arts)

Venue: Room H-260, International Christian University

Thursday, December 22nd

Tenth Meeting of the Tama Network for Gender Education

Venue: Tokyo University of Foreign Studies

■ Winter Term

From Monday, December 13th: Winter Term Reading Group

1. *Posutokoroniarizumu*

Author: Natsuno Kikuchi

Organizer: Shingo Hori (Graduate School, Waseda University)

Date: Tuesdays, from 13rd December

2. *Impersonations: The Performance of Gender in Shakespeare’s England*

Author: Stephen Orgel

Organizer: Mami Kanno (Graduate School, Keio University)

Date: Wednesday, from 14th December

3. *Sabarutan wa kataru kotoga dekiruka (Can the Subaltern Speak?)*

Author: Gayatri Chakravorty Spivak (trans. by Tadao Uemura)

Organizer: Mao Ueda (Graduate School, International Christian University)

Date: Tuesdays, from 13th December

Saturday, January 18th

Open Lecture: Making new television programs: A director's perspective -The media and sexual minorities-

Lecturer: Yuji Imamura (Director, NHK Osaka)

Coordinator: Yuji Kato

Venue: Room H-170, International Christian University

Saturday, January 28th

Film Screening: Dialogues with Sexual Minorities through Film, "Each Step as Myself"

Lecturer: Akira Shimada (Movie Director, Represent of Rainbow Action)

Venue: Room H-170, International Christian University

Saturday, January 31st

Talk Session: Let's talk about Parenting on Campus

Coordinator: Natsumi Ikoma (Associate Professor, ICU / Steering Member of the CGS)

Venue: Medium Conference Room, Dialogue House 2F (203), International Christian University

Saturday, February 25th

Open Lecture: "酷兒 (Queer)" and the Literature in Taiwan -The

Literature/Translation and the sexual minority in Taiwan-

Lecturer: Ta-wei Chi (Associate Professor, Graduate Institute of Taiwanese Literature, National Chengchi University)

Coordinator: Ryuichi Shindo (Research Institute Assistant, CGS)

Venue: International Conference Room, Dialogue House 2F, International Christian University

Saturday, March 20th

Open Lecture: (Im) Possibility of the body and the claim to "survival": Within the dialogue of Queer Studies and Disability Studies

Speaker: Yuriko Iino (Research Center for Advanced Science and Technology/Gender and Sexuality Studies)

Akiko Shimizu (Interfaculty Initiative in Information Studies Graduate School of Interdisciplinary Information Studies/Graduate School of Arts and Sciences, College of Arts and Sciences, The University of Tokyo/Feminist and Queer Studies)

Ryoji Hoshika (The center for barrier-free Education, Graduate school of education, The University of Tokyo/Sociology of Disability)

Moderator/Coordinator: Makiko Iseri (Research Institute Assistant, CGS/Ph.D. Student, Graduate School of Arts and Sciences, College of Arts and Sciences, The University of Tokyo)

Venue: International Conference Room, Dialogue House 2F, International Christian University

March

Publication of the CGS Journal, *Gender and Sexuality*, Vol. 08

Note: Regular updates may be viewed on CGS Online, the official CGS website, Twitter and Facebook. The CGS newsletters and journal may also be downloaded from the site.

2012年度ジェンダー研究センター（CGS）活動予定

オープンセンター（兼pGSS説明会）

日時：2012年4月

場所：ジェンダー研究センター

春学期読書会

日時：2012年4月～6月

場所：ジェンダー研究センター

第11回 多摩ジェンダー教育ネットワーク・ミーティング

日時：2012年4月

場所：国際基督教大学および周辺大学

第1回 R-Project ワークショップ

日時：2011年6月

場所：国際基督教大学

第2回 R-Project ワークショップ

日時：2011年6月

場所：国際基督教大学

オープンセンター（兼pGSS説明会）

日時：2012年9月

場所：ジェンダー研究センター

秋学期読書会

日時：2012年9月～11月

場所：ジェンダー研究センター

CGS ニュースレター 015 号

発刊予定：2012年9月

第12回 多摩ジェンダー教育ネットワーク・ミーティング

日時：2012年9月

場所：国際基督教大学および周辺大学

第14回 「ジェンダー研究へのアプローチ」 共催セミナーシリーズ

日時：2012年10月

場所：国際基督教大学

冬学期読書会

日時：2012年12月～2013年2月

場所：ジェンダー研究センター

第1回 若手研究者による研究ワークショップ

日時：2012年12月

場所：国際基督教大学

第13回 多摩ジェンダー教育ネットワーク・ミーティング

日時：2013年1月

場所：国際基督教大学および周辺大学

第2回 若手研究者による研究ワークショップ

日時：2013年1月

場所：国際基督教大学

映画上映イベント

日時：2013年2月

場所：国際基督教大学

第3回 若手研究者による研究ワークショップ

日時：2013年2月

場所：国際基督教大学

第4回 若手研究者による研究ワークショップ

日時：2013年3月

場所：国際基督教大学

第14回 多摩ジェンダー教育ネットワーク・ミーティング

日時：2013年3月

場所：国際基督教大学および周辺大学

CGSジャーナル『ジェンダー&セクシュアリティ』第8号

発刊予定：2013年3月

注

CGS公式ウェブサイト「CGS Online」、ツイッター公式アカウント、Facebookでは随時、情報を更新しています。

AY 2012 CGS Activity Schedule

Open Center

Date: April 2012

Venue: Center for Gender Studies, International Christian University

Spring Term Reading Groups

Dates: April - June 2012

Venue: Center for Gender Studies, International Christian University

Eleventh Meeting of the Tama Network for Gender Education

Date: April 2012

Venue: International Christian University and other universities in Tama region.

First R-project Workshop

Dates: June 2012

Venue: International Christian University

Second R-project Workshop

Dates: June 2012

Venue: International Christian University

Open Center

Date: September 2012

Venue: Center for Gender Studies, International Christian University

Autumn Term Reading Groups

Dates: from September to November, 2012

Venue: Center for Gender Studies, International Christian University

CGS Newsletter No.015

Slated for publication: September 2012

Twelveth Meeting of the Tama Network for Gender Education

Date: September 2012

Venue: International Christian University and other universities in Tama region.

Co-hosted Open Seminar: Approaches to Gender Studies

Date: October 2012

Venue: International Christian University

Winter Term Reading Groups

Dates: December 2012 to February, 2013

Venue: Center for Gender Studies, International Christian University

Research Workshop by Young Researchers Series1

Date: December 2012

Venue: International Christian University

Thirteenth Meeting of the Tama Network for Gender Education

Date: January 2013

Venue: International Christian University and other universities in Tama region.

Research Workshop by Young Researchers Series2

Date: January 2013

Venue: International Christian University

Film Screening

Date: February 2013

Venue: International Christian University

Research Workshop by Young Researchers Series3

Date: February 2013

Venue: International Christian University

Research Workshop by Young Researchers Series4

Date: March 2013

Venue: International Christian University

Fourteenth Meeting of the Tama Network for Gender Education

Date: March 2013

Venue: International Christian University and other universities in Tama region.

CGS Journal *Gender and Sexuality* Vol. 08

Slated for publication: March 2013

Note: Regular updates may be viewed on CGS Online, the official CGS website, Twitter and Facebook.

執筆者紹介
Author profiles

久保田 絢

目白大学 外国語学部 英米学科 専任講師

専門：コミュニケーション学、国際開発学

Aya KUBOTA

Lecturer, Faculty of Foreign Language Studies, Department of English Language Studies, Mejiro University

Specialization: Communication, International Development Studies

生駒 夏美

国際基督教大学 教養学部 准教授

専門：英文学

Natsumi IKOMA

Associate Professor, The College of Liberal Arts, International Christian University

Specialization: English Literature

堀 真悟

早稲田大学大学院 文学研究科社会学コース 博士課程前期2年

専門：社会学

Shingo HORI

Master's Program in Sociology, Graduate School of Letters, Arts and Sciences, Waseda University

Specialization: Sociology

国際基督教大学ジェンダー研究センター (CGS) 所員
Regular members of the Center for Gender Studies, ICU
2012年3月現在
as of March, 2012

マット・ギラン

Matthew A. GILLAN

Music, Ethnomusicology

池田 理知子*

Richiko IKEDA*

Communication

生駒 夏美 (運営委員)*

Natsumi IKOMA (CGS Steering Committee Member)*

Contemporary English Literature, Representation of the Body in British
and Japanese Literature

伊藤 亜紀

Aki ITO

Storia dell'arte italiana, Storia del costume italiano

鄭 仁星

Insung JUNG

Educational Technology and Communications

上遠 岳彦

Takehiko KAMITO

Biology

加藤 恵津子 (センター長、運営委員)*

Etsuko KATO (CGS Director, Steering Committee Member) *

Cultural Anthropology, Gender Studies

菊池 秀明

Hideaki KIKUCHI

The Social History of China in the 17th-19th Centuries

ツベタナ・I・クリステワ

Tzvetana I. KRISTEVA

Japanese Literature

ジョン・C・マーハ

John C. MAHER

Linguistics

ショウン・マラーニー

Shaun MALARNEY

Cultural Anthropology

森木 美恵 (運営委員)

Yoshie MORIKI (CGS Steering Committee Member)

Cultural Anthropology, Demography

那須 敬

Kei NASU

History of Religion, Culture and Politics in Early Modern England

大森 佐和

Sawa OMORI

International Public Policy, International Political Economy

クリストファー・サイモンズ

Christopher E. J. SIMONS

English Literature

高松 香奈

Kana TAKAMATSU

Politics, International Relations

高崎 恵 (運営委員)*

Megumi TAKASAKI (CGS Steering Committee Member)*

Cultural Anthropology, Religious Studies

高澤 紀恵

Norie TAKAZAWA

Social History of Early Modern Europe

田中 かず子 (運営委員)*

Kazuko TANAKA (CGS Steering Committee Member)*

Sociology, Gender studies, Gender Stratification, Care Work

* 編集委員

Editorial Board Members

ICUジェンダー研究所ジャーナル
『ジェンダー & セクシュアリティ』
第8号投稿規程
2012年3月現在

1) ジャーナル概要

『ジェンダー & セクシュアリティ』は、国際基督教大学ジェンダー研究センターが年一回発行するジェンダー・セクシュアリティ研究分野の学術誌である。研究部門では、ジェンダー・セクシュアリティ研究における実証的研究や理論的考察に関する論文（綿密な学術的研究と、独創的な考察から成る、学术界に広く貢献しうる論考）、研究ノート（学術的研究・考察の途上にあつて、学术界に広く貢献しうる論考）を掲載する。フィールド部門では、活動家によるケーススタディ、組織・国内・国際レベルにおけるジェンダー関連活動に関するフィールドレポート（様々な領域の専門家、および研究者が、日々の実践の中から現状の一側面を報告するもの）を掲載する。

2) 第8号発行日：2013年3月

3) 第8号論文投稿締切：2012年8月31日（金）消印有効

4) 原稿提出先：国際基督教大学 ジェンダー研究センター 編集委員会
郵送：〒181-8585 東京都三鷹市大沢3-10-2 ERB301
Eメール：cgs@icu.ac.jp

5) 応募要綱

a) 原稿

- ・本誌に投稿される原稿は、全文あるいは主要部分において未発表であり、

他誌へ投稿されていないものとする。

- ・使用言語は日本語または英語に限る。
- ・原稿の様式は、**Publication Manual of the American Psychological Association**（2001年発行第5版）の様式に従うこと。様式が異なる場合は、内容の如何に関わらず受理しない場合がある。見本が必要な場合は、CGS ホームページ上の過去のジャーナル（以下URL）を参照するか、CGSに問い合わせること。

<http://web.icu.ac.jp/cgs/journal.html>（日本語）

http://web.icu.ac.jp/cgs_e/journal.html（English）

- ・第一言語でない言語を使用して論文および要旨を執筆する場合は、投稿前に必ずネイティブ・チェックを通すこと。書かれた論文および要旨に文法的な問題が見られるなど不備が目立つ場合は、その理由により不採用になる場合がある。

- ・姓名・所属・専門分野・Eメール・住所・電話およびFAX番号は別紙に記載する（姓名・所属・専門分野は、日本語と英語で記載すること）。審査過程における匿名性を守るため、原稿の他の部分では執筆者氏名は一切伏せること。

- ・原稿料の支払い、掲載料の徴収は行なわない。
- ・本誌が国際的に発表される学術誌であることを踏まえ、たうえで原稿を執筆すること。
- ・本規程に沿わない原稿は、改訂を求めて返却されることがある。

a-1) 研究部門（研究論文・研究ノート）

- ・研究論文は、図表、図版、参考文献および注なども含めて日本語で16,000～20,000字、英語の場合は6500 words～8500 wordsの長さとする。
- ・研究ノートは、図表、図版、参考文献および注なども含めて日本語で12,000字以内、英語で5000 words以内の長さとする。
- ・タイトルは日本語で最長40字、英語は最長20 wordsとする。簡潔明瞭で、

主要なトピックを明示したものであること。

- ・日本語か英語による要旨および5つのキーワードを別紙にて添付する（日本語は800字以内、英語は500 words以内）。なお、要旨・キーワードは、日本語原稿の場合は英語を使用することが望ましいが、それが不可能な場合は、原稿と同じ言語で提出してよい（編集部にてもう一方の言語へ翻訳する）。

- ・研究論文として投稿されたものに対し、査読の結果などを踏まえ、研究ノートとしての掲載を認める場合がある。その場合の文字数の上限は研究論文に準ずる。

a-2) フィールド部門（フィールドレポート）

- ・原稿は、図表、図版、参考文献および注なども含めて日本語で12,000字、英語で5000 words以内の長さとする。

- ・タイトルは日本語で最長40字、英語は最長20 wordsとする。簡潔明瞭で、主要なトピックを明示したものであること。

- ・日本語か英語による要旨および5つのキーワードを別紙にて添付する（日本語は800字以内、英語は500 words以内）。なお、要旨・キーワードは、日本語原稿の場合は英語を使用することが望ましいが、それが不可能な場合は、原稿と同じ言語で提出してよい（編集部にてもう一方の言語へ翻訳する）。

- ・研究論文・研究ノートとして投稿されたものに対し、査読の結果などを踏まえ、フィールドレポートとしての掲載を認める場合がある。その場合の文字数の上限は、研究論文・研究ノートに準ずる。

b) 図表および図版

- ・図表は別紙で添付し、本文内に取り込まないこと。

- ・図版は直接印刷に耐える画質のものを添付すること。

- ・本文中における図表・図版のおおよその位置を原稿上に示すこと。

- ・画像やイラスト、図表など著作権が著者がないものについては、署名された掲載使用の許可書を同時に提出すること。

c) 提出原稿

- ・原稿は、印刷コピーと電子ファイルの2種類を提出する。
- ・印刷コピーは、A4用紙に印刷したものを上記住所に3部提出する。
- ・電子ファイルは、Eメールに添付して上記アドレスに提出する。
- ・電子ファイルの保存形式
 - ーできる限りMicrosoft Word形式（ファイル名.doc）で保存したものを提出すること。拡張子.docxの提出は認めない。
 - ー.doc形式でのファイル保存が困難である場合は、Rich Text形式（ファイル名.rtf）、またはプレーンテキスト形式（ファイル名.txt）で保存したものを提出すること。
 - ー上記以外の形式、特に紙媒体から読み込んだ画像データによる本文及び要旨の提出は認めない。
- ・添付ファイルおよび印刷コピーの内容は、完全に一致したものであること。
- ・提出された原稿等は返却しない。

6) 校正

校正用原稿が執筆者に送付された場合、校正のうえ提出期限内に返送すること。その後、文法、句読法などの形式に関する微修正を、編集委員会の権限で行うことがある。

7) 審査過程

投稿原稿は編集委員会が指名する審査者によって審査される。審査では独自性、学術性、論旨の明快さ、重要性および主題のジェンダー・セクシュアリティ研究に対する貢献度が考慮される。原稿の改稿が求められる場合、審査意見および編集コメントが執筆者に伝えられる。投稿の受理・不受理の最終

判断は編集委員会が下すものとする。

8) 著作権

投稿を受理された論文の著作権は、他の取り決めが特別になされない限り、国際基督教大学ジェンダー研究センター編集委員会が保有するものとする。自己の論文および資料の複製権および使用権に関して、執筆者に対する制限は一切なされないものとする。

9) 原稿の複写

原稿が掲載された執筆者には3冊（執筆者が複数いる場合は5冊まで）の該当誌を贈呈する。なお、それ以上の部数については別途ジェンダー研究センターに注文することができる。

10) 購読申込

該当誌の購読の申し込みはEメール cgs@icu.ac.jp で受け付ける。

当規程は予告なく改定されることがある。

The Journal of the Center for Gender Studies, ICU
Gender and Sexuality
Journal regulations for Vol. 08
as of March, 2012

1) Journal Overview

Gender and Sexuality is an academic journal on the study of gender and sexuality, published by the Center for Gender Studies at the International Christian University. The journal's research section shall consist of research papers on empirical investigations, theoretical discussions on gender and sexuality studies (*1), and research notes (*2). The field section shall feature case studies by activists, and field reports (*3) concerning gender-related activities at institutional, domestic, and international levels.

*1 Research papers should be based on thorough academic research, contain original and creative viewpoints, and contribute to a wider academic field.

*2 Research notes should contain discussions that are still in progress but show their potential to contribute to a wider academic field.

*3 Field reports should report on the author's daily practice, focusing on one aspect of the field being studied.

2) Publication Date of Volume 08: March, 2013

3) Manuscript Submission Deadline for Volume 08: Friday, August 31, 2012, as indicated by the postmark on the envelope.

4) Address for Manuscript Submissions:

Center for Gender Studies Editorial Committee
Postal Address: ERB 301, International Christian University
3-10-2 Osawa, Mitaka-shi, Tokyo, 181-8585
E-mail: cgs@icu.ac.jp

5) Rules for Application

Manuscripts

-Manuscripts submitted to this journal must be previously unpublished, in full or in part.

-Only Japanese or English manuscripts shall be accepted.

-Manuscript format must be in accordance with the Publication Manual of the American Psychological Association (5th Edition, 2001). Manuscripts submitted in other formats may be rejected regardless of their contents and their scholarly worth. For examples of the necessary formatting, please review past issues of the journal, which can be accessed from the CGS home page at the following URL (s), or contact the CGS directly with any inquiries about formatting.

<http://web.icu.ac.jp/cgs/journal.html> (Japanese)

http://web.icu.ac.jp/cgs_e/journal.html (English)

- Manuscripts (papers or summaries) that are not in the author's native language must be proofread by a native speaker of that language. Manuscripts with obvious inadequacies such as grammatical errors shall be rejected.

-The author's name, affiliation, specialization, e-mail address, postal address, telephone number, and fax number should be written on a separate title page. Name, affiliation and specialization should be indicated in

both English and Japanese. To ensure anonymity during the screening process, the author's name should not appear in the text.

-There shall be no payment involved for manuscripts or for insertion.

-Manuscripts should be written in a style appropriate for an internationally-circulated academic journal.

-Manuscripts that do not conform to these guidelines may be returned with a request for revision.

a-1) Research Section

-Research papers should be between 16,000 to 20,000 Japanese characters or 6,500 to 8,500 English words in length, including figures, graphic images, references, and footnotes.

-Research notes should be less than 12,000 Japanese characters or 5,000 English words in length, including figures, graphic images, references, and footnotes.

-Titles should be short, simple, and no more than 40 Japanese characters or 20 English words in length. It should also preferably address the main topic.

-An abstract (including the title) of 500 words in English should be attached on a separate sheet with a list of five keywords in English.

-An abstract (including the title) of 800 Japanese characters should also be attached on a separate sheet with a list of five keywords in Japanese.

- A manuscript submitted as a research paper may be accepted as a research note, depending on the results of the referee reading. The length of such manuscripts may conform to the regulations for research papers.

a-2) Field Section

-Manuscripts should be no longer than 12,000 Japanese characters or

5000 English words in length, including figures, graphic images, references, and footnotes.

-The title should be short, simple, and no more than 40 Japanese characters or 20 English words in length. It should also preferably address the main topic.

-An abstract (including the title) of no more than 500 words in English should be attached on a separate sheet with a list of no more than five keywords in English.

-An abstract (including the title) of 800 Japanese characters should also be attached on a separate sheet with a list of five keywords in Japanese.

- A manuscript submitted as a research paper or research note may be accepted as a field report, depending on the results of the referee reading. The length of such manuscripts may conform to the regulations for research papers or research notes.

b) Figures and Graphic Images

- Figures should be attached on a separate sheet. Do not include them in the text.

- Graphic images should also be attached on a separate sheet, and should be of a quality high enough to resist degradation during printing.

- The approximate position of the figure/image in the document should be indicated.

c) Manuscript Submission

- Manuscripts should be submitted in both digital and hard copy.

- Three hard copies should be submitted. They should be double-spaced on single-sided A4 paper.

- The digital copy should preferably be submitted in MSWord (filename.

doc) format. Files may also be submitted in Rich Text format (filename.rtf) or Plain Text format (filename.txt).

- Files in formats other than those listed above, such as .docx extension files or scanned copies of images or text, shall not be accepted.
- The digital copy shall be submitted as an e-mail file attachment to cgs@icu.ac.jp.
- The digital and hard copies should be completely identical.
- Manuscripts submitted will not be returned.

6) Revisions

If a manuscript is returned to the author for revision, the manuscript should be revised and sent back by the specified date. Note that slight modifications (grammar, spelling, phrasing) may be carried out at the discretion of the editorial committee.

7) Screening Process

Submitted manuscripts shall be screened and chosen by reviewers designated by the editorial committee. Factors for selection include originality, scholarliness, clarity of argument, importance, and the degree of contribution that the manuscript offers for the study of gender and sexuality. In the event that a revision of the manuscript is required, opinions and comments by the editorial committee shall be sent to the author. The final decision for accepting or rejecting an application rests in the hands of the editorial committee.

8) Copyright

Unless a special prior arrangement has been made, the copyright of an accepted manuscript shall belong to the Editorial Committee of the ICU

Center for Gender Studies. No restrictions shall be placed upon the author regarding reproduction rights or usage rights of the author's own manuscript.

9) Journal Copies

Three copies of the completed journal (or five in the case of multiple authors) shall be sent to the author of the accepted manuscript. Additional copies may be ordered separately.

10) Purchasing Orders

Orders for the journal can be submitted by e-mail to cgs@icu.ac.jp.

Note that these guidelines may be revised without prior notice.

編集後記 加藤恵津子

ここに第7号をお届けできることを嬉しく存じます。年を追うごとに、より多くの論文・研究ノートのご応募があり、編集委員一同感激しております。また今年も海外の方、海外出身の日本在住の方からもお問い合わせ・ご投稿をいただき、当ジャーナルを日英バイリンガルで発行していることの効果を感じます。その分、多くの査読者の方にご協力いただくこととなりました。その適切かつご丁寧な論評に、心から感謝申し上げます。今号につきましては掲載は招待論文と書評、そして投稿作品より選り抜かれたものを合わせて3本と少なめですが、どれも読みごたえのあるものだと思います。読者の皆様にはぜひお楽しみいただきますよう、そして今後とも当ジャーナルをご愛読下さいますよう、よろしくお願い申し上げます。最後になりましたが、編集・発行作業にあたってくれたCGS関係者の皆様、今回も本当にありがとうございました。

Postscript from the Editor Etsuko KATO

It is with great pleasure that we present the seventh volume of *Gender and Sexuality*. We are delighted to have received an unprecedented number of manuscript submissions for this volume. In particular, the large number of enquiries and submissions from researchers overseas and foreign researchers in Japan has reinforced our original objective to publish a bilingual journal in Japanese and English. The diversity of submissions required the assistance of many referees to whom we are indebted for their detailed evaluations. While this volume is relatively slim, one invited paper, book review and one working paper have been carefully selected for their depth and significance. We trust that you will find them insightful and stimulating. Finally, I would like to thank all those at CGS who were involved in the editing and publication of this volume.

Gender and Sexuality Vol. 7

Journal of the Center for Gender Studies,
International Christian University

Printed and Published on March 31, 2012

Editor International Christian University
Center for Gender Studies Editorial Committee

Publisher Center for Gender Studies
International Christian University

ERB 301, 3-10-2 Osawa, Mitaka city, Tokyo 181-8585 JAPAN

Tel & Fax: +81 (422) 33-3448

Email: cgs@icu.ac.jp

Website: <http://subsite.icu.ac.jp/cgs/>

Printing Hakuhosya Co.,Ltd.

© 2005 by Center for Gender Studies, Japan.

All rights reserved.

国際基督教大学ジェンダー研究センター ジャーナル

『ジェンダー&セクシュアリティ』第7号

2012年3月31日印刷・発行

編集 国際基督教大学ジェンダー研究センター編集委員会

発行 国際基督教大学ジェンダー研究センター

〒181-8585 東京都三鷹市大沢3-10-2 ERB301

Tel & Fax: (0422) 33-3448

Email: cgs@icu.ac.jp

Website: <http://subsite.icu.ac.jp/cgs/>

印刷 株式会社 白峰社

著作権は論文執筆者および当研究センターに所属し、
著作権法上の例外を除き、許可のない転載はできません。

